

---

IS インフィニット・ストラトス 漆黒のIS

風神

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 漆黒のIS

### 【Nコード】

N6633R

### 【作者名】

風神

### 【あらすじ】

「俺は誓ったんだ。もう二度と『ーーーー』」女性にしか動かせないISを動かせるのは一夏だけじゃなかった。少年は何を見、何を守るのか。

処女作なのでアドバイスなどを頂けたらうれしいです。週一更新になってきた・・・

## プロローグ（前書き）

読んでくださっていた方マジですいません。もっとおもしろいくなるので勘弁して下さい。

## プロローグ

ここはアメリカのホテルの一室。

カタカタ・・・カタカタカタカタ・・・  
軽快にキーボードを叩く音が聞こえる。

「これで・・・終わり！！と。あー疲れた」

さっきまでこの部屋でキーボードを叩いていた少年は、ハアと息を吐く。

「出力も武器も上出来、今回はうまくいったな」

彼の視線の先にはたくさんコードにつながれたISがあった。ホテルにこんな物置いていいのかわれそうだが今はどうでもいい。そのISの全体は漆黒に染まり、ところどころに鮮やかな青が入っている。そこで特に目立つのは、背中にある四枚一対の高出力推進翼（スラスター）で、その漆黒のISからは神の名にふさわしい威厳のようなものが放たれている。

「一次移行（ファーストシフト）も終わったし、そろそろ行くかな。今頃なーにやってんだろ、あいつ」

そういつて少年はISを待機状態の黒いブレスレットに変え、左腕に付けながら部屋を後にしホテルの入り口に足を運んだ。

「遅い、いつまで私を待たせるつもりだ。機械いじりばかりしてないで少しは他人の事も考えろ」

すると入口には腕組みで仁王立ち、見るからに苛立っている彼がよく知る女性が彼を待っていた。

「いやいや千冬さん、まだ予定の時間より10分だけ遅れただけですよ？何をそんなに怒って『パソコン！』……い……いて……。久しぶりに会ったのに何すんだよー」

彼は彼女の繰り出した手刀の犠牲になった頭をさすりながら涙目で言った。

「10分前行動だ。馬鹿者」

「……へいへい……」

そうやって千冬と呼ばれた女性、織斑千冬はついてこいと言いながら自身の車が置いてある場所まで行き、少年を乗せ、空港まで行く。途中ずっと無口だった少年がふいに口を開く。

「なあ、千冬さん」

「何だ」

前を向いたまま視線を外さず千冬がこたえる。

「俺、強くなつたかな？、守れるかな？、みんなを……」

「さあな。それはお前次第だ、悠夜」

少年、黒川悠夜はハハハ、そうだよなと言いながらこれから向かう

ところへ胸をはせていた。

## 第一話 編入生(前書き)

しばらく速攻で更新します。

## 第一話 編入生

「ここがIS学園か」

IS学園ゲート前、そこには本来あるはずのない男子用の制服を着た少年、黒川悠夜が立っていた。

『IS』、正式名称『インフィニット・ストラトス』。女性にのみ起動させることができるマルチフォーム・スーツで、『白騎士事件』によって従来の兵器を超越する圧倒的な性能をみせつけたことから飛行パスワード・スーツとして軍事転用し始め、今や各国の抑止力の要となった。IS学園は、そんなISの使用方法などを教育する機関である。

「にしてもデケー、何この無駄な広さ。いくらかかってんのよこれ」  
悠夜がそんなことをつぶやいていると、

「このぐらいの大きさで何をビビッている。悠夜」  
とスーツ姿の千冬が悠夜のもとに歩いてきた。

「もう編入手続き終わったの？千冬さん。いや、場所的に考えると織斑先生か・・・」

「理解がはやいな。私はこれからお前を黒川と呼ぶからな。・・・  
まったく、どつかのバカより手がかからなくていい」

そのバカ、もとい彼女の弟である織斑一夏のことを思い出したのかハァーとため息をはいた千冬は気を取り直したように悠夜の方を





「じゃあ、私が呼んだら入ってこい」

教室に入っていく千冬を見送りながらふと悠夜は昔の幼馴染の一夏と篝のことを思い出した。

「あいつらに会うのも3年ぶりか。ま、どーせ篝はともかく一夏は何一つ変わってないんだろっかな」

ククク、と不気味に笑っていると教室の中から千冬の声が聞こえた。

「これでSHRを終わりにするが、今日からここに少し遅れて入学してきたやつがいる。・・・入れ」

「へーい」

千冬に呼ばれた悠夜は返事をし、教室に入っていく。突然の登場人物、しかも男というわけで、教室はシン・・・と静まり返る。

(うつわ、緊張するー。どうしよう自己紹介。まあ、無難に)

「黒川悠夜だ。まあ、よろしく」

(こんなもんだろ。えーと、おー！)

女子生徒が惚けている中、悠夜はひとときわ唖然とした表情になっている男子生徒と女子生徒を見つけた。

「よっ、一夏に箒。元気にしてたか？」

悠夜 side

「……………悠夜？……………悠夜なのか？……………」

「あ……………ああ……………あ……………」

まだ唖然としている一夏が俺のことを確認してきた。というか箒さん、あなた驚きすぎでしょ。

「残念だなー一夏。俺のこと忘れたのか？まあ、確かに俺はs『キヤアアアアーーーーー』つな、なんだ！？」

突然女子たちが窓を声だけで壊せるんじゃないかってくらいに超高音、超大音量で黄色い声を上げた。

『男！男よ！！』

『しかも超イケメン！！』

『お願い私を罵倒してーーーー！！！！』

最後のは聞かなかったことにしよう。うん。ていうか五月蠅いなー。早くやまないかなー、ほら何故かは知らないけど箒が怖い顔してこ

つちを睨んでるから。

「静かにしろ！……！」

おーー、流石は教師千冬さん。この場を静かにしてくれた。ていうか鎮まるの早っ！やっぱりみんな千冬さんが怖いんだね。・・・ヤベツ！！ シュツ！バシ！！

「ちっ、取ったか……。まあいい、お前は後ろの空いてる席に座れ」

こえー……。手刀でもあんなに破壊力があるのに出席簿なんてものを使ったら確実に頭痛いじゃ済まないだろ。しかも舌打ちってあなた……。ま、いいや。

「へい」

そう言って俺は後ろの席に座った。

## 第一話 編入生（後書き）

他の作者さんの作品に似てしまった。すみません。

## オリ主設定（前書き）

オリ主設定です。足りない部分があったら教えてください。

## オリ主設定

黒川 悠夜（くろかわ ゆうや）

身長：173 7 cm

体重：67 kg

性別：男

趣味：ゲーム（でもオタクじゃない）、勝負、剣道

性能：運動能力は、学園の中で一番いい 剣術では千冬と五分五分好きなもの：白米、勝負、強いやつ、可愛いもの、友人

嫌いなもの：魚介類、友人を傷つけやつ、敗北、亡国機業

容姿：上の上

黒髪黒眼で、長身痩躯。（コードギアスのルルーシユのような感じ）

性格：好戦的だが、友人を最も大切にしている。超鈍感で周りを呆れさせる。

生い立ち：あることが原因で亡国機業をひどく憎む。ISの技術は束に、剣術は千冬に教わった。一夏と箒と鈴音とは幼馴染。鈴音が転校したあと、自分専用ISを作るため一夏達の前から突然消え、各地を転々としていた。自分の力がどこまで通るか知るためIS学園に入ることを決心する。ちなみにすでに箒と鈴音にはフラグを立てた。

## 第二話 初日（前書き）

一話にだいたい何文字打てばいいんだろ。誰か教えて。



## 第二話 初日

「おい、悠夜」

「ん、何だ一夏」

朝のSHRが終わった直後、俺は女子たちの質問攻撃を受けていた。

『趣味は!?!』

『好きな女の子のタイプは!?!』

『BLに興味は!?!』

最後の質問はよくわからないがとにかくさまさまな質問に答えていると一夏が急に呼びかけてきた。あれ、よく見ると篝も一緒にいる。

「よう、篝。またきれいになったな」

「なっ／＼／＼、何を言っている!／＼久しぶりに会っていきなり・・・」

このポニーテイルの女子は昔一夏と俺と一緒に千冬さんに剣道を教わっていて幼馴染の篠ノ之篝。ちなみにISを作った張本人、篠ノ之束の妹だ。それにしてもなにを怒っているだ?それになんか赤いし、風邪か?

「それより今までどこで何をしていたんだよ!!!」

「そつ、そつだ！私だって心配したんだぞ！！」

「おおぅ、まあ待てつて。えーと、今まで俺は自分専用のISを作つて……あ」

「ん？どうかしたのか？」

やべー、千冬さんに俺がISを作れることを言うのはやめろつて言われてたんだ。

「い、いや。あーと……、何してたかだったよな。えーと、あれだ！！俺はあの時からISが起動できるのが分かってたからいろんなところに実験として行ってたんだよ！！そつ！！」

とにかく苦し紛れに嘘をついてみた。

「お、おう……そつか。ならしかたないな」

一夏はなんとか納得してくれた。あ、あぶねー。一夏が馬鹿でよかった。危うく千冬さんに出席簿アタック以上の地獄を見せられるところだったぜ。

「なにはともあれ、そつ、その……おかえり／＼」

「ああ、ただいま」

そつ言つて俺は篝の頭をなでる。こつするといつつも篝は顔を緩めて気持ちよさそつな顔をする。可愛いなあ。

「ちよつとよろしくて？」

「あ？」

すると突然金髪クルクル髪の見るからにお嬢様的な女子が話しかけてきた。ん？一夏があらかさまにいやな顔になってる。なんかあったのか？

「俺になんか用か？て言うか誰？」

「まあっ、あなたも知らないのですね。いいですわ、名乗って差し上げましょう。私はセシリア・オルコット。あなたたちとは違いイギリス代表候補生であり、入試主席のエリートなのですわ！！」

あー、一夏がこんな顔をする理由がよく分かった。俺こういうタイプ一番苦手なんだよな……。

「俺は黒川悠夜だ。それで何か用か？」

出来るだけ早く終わらせてくれよ。

「いえ、二人目の男と聞いたのでどんな方かと思って話しかけただけですよ。思った通り無礼な方でしたけど。それでは……あ、それと織斑さん、逃げないでくださいね」

「誰が逃げるかよ」

「そうですね」

「どうなってんだ？」

二人のやり取りを聞いていてわけがわからない俺に筈が先日起きたことを教えてくれた。なるほど。

「へー、決闘。一夏らしいな」

「うっせーよ。ていうか勝負つつたらお前の方が好きじゃねーか」

まあ好きだけども。

「あら、ならあなたもしますか？決闘。しかし私に負けたら奴隷ですけど」

奴隷って、今の時代にそんな身分ないだろ。にしても決闘か、ここ最近ISの製作ばかりで体動かしてないからなー。それに面白そうだ。

「いいぜ」

「意外とあっさりしてますのね。ハンデはどれぐらいにしますか？」

「いらねーよ、よんなの。どうせ一夏もいらないうって言ったんだろ」

あいつのことはよくわかる。

「あら、あとで欲しいといってもあげませんわよ」

「いってろ」

「では、次の月曜日に」



目にあった。そして、

「だーかーらー、ISは操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアで包んでて、ISには意識に似たようなものがあっからお互いの対話つまり一緒に過ごした時間で分かりあうっていうか、操縦時間に比例してISも操縦者の特性を理解しようとしてんだよ。これで何回目だ？」

現在進行形でさんざんな目に逢っていた。

「んなこといったって分かんないもんは仕方がないだろ」

「あーあ、お前が授業分からないから教えてくれって言った時どーせ一部分だろうと思ってた俺が馬鹿だったよ」

悠夜は、まさか授業の全てが分からないなんて思ってもみなかった。後から聞いた話だが一夏は山田先生の前で堂々分かりませんと言ったらしい。

ちなみに山田先生というのは、1年1組の副担任で、巨乳にメガネという結構なスペックをもっている人物だ。

「はあー、もういい。第二アリーナでISの特訓するぞ。簿が許可とって待ってるから」

「あれ、簿ってまだお前とけんかしてなかったっけ」

「俺がなんとか無理言っただけ許可もらいに行ってもらってんの。おい、早く行くぞ。これ以上待たせたらまた怒られる」

そう言っただけ悠夜は若干早歩きで教室を出て行った。

私は今悠夜に一夏の特訓をするからと頼まれて第二アリーナの使用許可をもらい、そこで待っていた。なぜケンカしていたのかと云うと、

~~~~~

「あ、そうだ筈。第二アリーナと打鉄の使用許可、取ってきてもらっていいか？」

「なんで私がお前のためにそんなことをしなければならんだ」

「そう怒るなって。実はな、折り入って頼みがあつて俺と一緒に一夏を鍛えてくれないか？」

「わっ、私と！？／／／」

「？、ああ、だって頼めるのは筈だけだからな。俺は今から一夏にISのこと教えないといけないから。な？」

「そ、そうか。私だけ、か／／／．．．よ、よし！そこまで言うのなら仕方がないから取ってきてやる」

「本当か！？いやーありがとう！じゃあ行ってくるわ。すぐ来ると思うから先言つてていいぞー」

「ああ、分かった．．．私だけ．．．えへ、えへへ／／／／」

~~~~~  
~~~~~

と、言うことである。しつ、仕方ないじゃないか。私だけって言われたんだから。まあ、本人には自覚はないだろうが。それにしても、

「遅い」

そう、いつまでたつても来ないのだ。時間はもう6時、使える時間は後1時間が限界だろう。すると、

「だああああー！ー！ー！ー、ほー！ー！ーうー！ー！ーきー！ー！ー！ー！ー」

悠夜と一夏が全速力で走ってきた・・・女の子を大勢つれて。

「お、おい悠夜。これはなんだ、ちゃんと説明し」「ごめん！！！」  
ふえ／／／！！！！」

我ながら情けない声を上げながら私は悠夜に俗に言う、お姫様だっこをされた／／／／／

「ちよっつ／／／悠夜これは、「ちよつと黙ってる！！いま全神経足につかっただから！！！」・・・はい」

悠夜の勢いに気圧され、私はお姫様だっこ状態でリンゴのように真っ赤になりながら大勢の女子たちから逃げ惑った。

（数分後）



三人称 s i d e

三人はなんとか生徒たちを振り切り、内二人は瀕死状態になっていた。

「はあっ、はあっ、な・・・なんとかまいたか・・・」

「ああ・・・っはあ、まつ、まだ、質問に答えてない女子がっ、あんなに・・・はあっ、いるなんてな」

「そ・・・れより、はあっ、大丈夫か、篝？」

悠夜はさっきまで抱えていた篝を見た。篝は、

「篝？」

「プツシューー／／／／／」

ショートしていた。

「まあ、突然大勢の女子に追っかけられている俺たちをみたらそらびっくりするわな」

こんな解釈をするのだから悠夜はすごい。

「どっかに寝かしてやらないとな・・・」

「どっかってどこにだよ」

そのあと二人が寝かす場所を探していると山田先生から寮の部屋が決まったという報告を受け、一夏は箒と相部屋、悠夜は一人部屋だったので一夏は箒を連れ悠夜と別れ、その日は終わった。次の日から数日間、箒はお姫様だっこの恥ずかしさのあまり悠夜と話はおろか目すらも合わせない生活を送ったのは別の話。

## オリジナルIS設定(前書き)

アドバイスを募集しています。

## オリジナルIS設定

黒神（クンネ・カムイ）

世代：第四世代

製作者：悠夜

待機状態：黒いプレスレット

外見：黒を基調とした装甲。背中部分には、四枚一対の高出力推進翼があり、外側の推進翼にビット、内側の推進翼にプラズマ集束砲が備わっている。腰部には二つ折り式の電磁レール砲があり、腹部には大出力ビーム砲がある。（ガンダムSEEDのストライクフリーダムを黒くしたような感じ）

詳細：悠夜がコアから作った攻守ともに優秀でバランスのとれた全距離型IS。背部の推進翼を広角展開することで高速移動できる。

武装：高エネルギービームライフル【ストーム】・二丁のビームライフル。前後に連結することで、より高出力のロングレンジ・ビームライフルとしての使用も可能。

超高密度プラズマエネルギービーム砲【ストライクバースト】  
・胸の固定装備のため機体正面にしか撃てないが、本機の搭載する武装の中でも特に高い威力を有している。

低反動超電磁砲【クスイファイアス3】・基本は二つ折りにされていて背中のスラスタユニットとして機能しているが、展開し

たときは腰に移動し、威力はストライクバーストの次に大きい。

全方位エネルギーシールド・シールドエネルギーをあまり使わないのですぐ破られるが、自動で発動しダメージを軽減する。

半自律高機動遊撃砲塔【シューティング・ビット】・高出力推進翼の一部が分離し、目的を考えれば自動的に大型ビーム砲を発射し動いてくれる。数は四機

半自律高機動突撃砲塔【ファンク・ビット】・高出力推進翼の一部が分離し、目的を考えれば自動的にビーム砲を発射しけん制しながらビームサーベルを出した状態で突撃する。数は四機

中型ビームブレード【クレイモア】・片手で扱えるが、威力は大型ブレードよりも大きい二本のビームブレード。悠夜は基本二本同時に扱う。

単一仕様能力（ワンオフアビリティ）：トリアルレイヴ・高出力推進翼のビットを全てパージすることで発動できるこの機体の単一仕様能力。基部から青白い光の翼を放出し、超高速戦闘が可能となるしかし発動すると発動者の体力を奪うので悠夜はあまり使わない。（というか使わなくても十分早い）

アルカナストライク：ビット、クスイファイアス3、ストーム、ストライクバースト、すべての砲撃武器を同時に発射する単一仕様能力発動時のみに行える攻撃。攻撃範囲がとても広く、一気に多くの敵を破壊できる。しかしシールドエネルギーを大幅に消費する。

### 第三話 クラス代表決定（前書き）

あーあーあー疲れた。では始めます。

### 第三話 クラス代表決定

あれから数日、色々ありながらも悠夜たちは一夏にISの基本的な操作などを教えていった。そして今日はセシリア・オルコットとのクラス代表決定戦という名の決闘の日、順番は一夏とセシリアがまず最初に戦い、勝った方が悠夜と戦うといったものだった。そしてあと少しで試合開始時刻なのだが・・・

「まだなのかお前の専用機のISは!!」

「こうなったらこの学校の打鉄で・・・」

「落ち着け一夏!それじゃ専用機に勝てねえーよ!」

「じゃあどうすればいいんだよ!」

一夏のISがまだ届いてないことに焦っていた。  
すると、

「織斑君!織斑君!」

山田先生が悠夜たちのいるAピットに走ってきた。しかもなんだか  
転びそうで危なっかしい。

「どうしたんですか山田先生?まずは深呼吸してください。はい吸  
ってー」

「すうー」

「はいてー」

「はー」

「また吸ってー」

「すうー」

「はいそこで止める!?!」

「うっ、」

「……………」

「……………ぷはっ!!まつ、まだですか!?!」

「あはは、いやすみません。ちょっとからかいたくなって……グハツ!?!」

「お前は少しは年上に人に対する礼儀をしれ」

悠夜が山田先生で遊んでいると、千冬の出席簿アタックが悠夜の頭に炸裂した。

「つつっー!。すみません。それより、来たんですね」

「はい、来ました!ー夏君のIS、『白式』です!」

奥から真っ白ではない雪のような白をしたIS、『白式』が運ばれてきた。



「これが俺のISS・・・」

「お前は背中を預けるように座れ、今から初期化フォーマットを始めるが最適化フィッテ処理は時間がないから試合中にしろ。とは言っても全て自動的にするからお前は戦っていればそのうち一次移行（ファーストシフト）が完了するがな」

そして初期化だけが終わった白式に乗って、一夏がピットゲートに向かった。

「ああ、分かった。じゃあ行ってくる、悠夜、篝」

「行つて来い」

「負けんじゃねーぞ、一夏」

一夏 side

「それじゃ、いくぞ！」

そして俺はアリーナにでた。するとそこにはもうオルコットがブルー・ティアーズを展開させて待っていた。

「逃げたかと思いましたわ。それでは最後のチャンスを上げますわ」

「チャンス？」

「私が一方的な勝利を得るのは自明の理。今ここで謝るといふのなら許してあげないこともなくつてよ」

「一々むかつくやつだな。」

「そんなのチャンスって呼ばねーよ」

「そう、残念ですわ。それなら……」

そういつてブルー・ティアーズはその手に持っていたレーザーライフル『スターライトMK?』を構え、

「お別れですわね!!」

撃ってきた。

「うわっと!」

「なんですって!?!」

しかしなんとか体をくねらせ初弾をよけた。いける、悠夜たちが特訓してくれたお陰だ。

「くっ、まあいいですわ。さあ、踊りなさい!わたくしセシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲(ワルツ)で!」

そういつてオルコットは俺を的確に狙い撃つ。まだ手でガードしてるからいいが、このままではシールドエネルギーが尽きてしまう。

そして俺はさっき確認した白式唯一の近接武器を展開する。でもなかなか近づけない。そんなこんなで白式のシールドエネルギーはかなり削られた。

「このブルー・ティアーズを前にして初見でここまで耐えたのは貴方が初めてですわね。褒めて差し上げますわ」

「そりゃどうも」

オルコットは皮肉を言いながらも俺をねらい撃ち続ける。

「でも、そろそろファイナーレとまいりましょう！」

ブルー・ティアーズの羽のような部分が分離し、レーザーを放ちながら俺に襲いかかる。

「くっ」

俺は必死に避けるが幾つかのビームは当たってしまった。

「左足いただきましたわ！」

そう言つて『スターライトMK?』からビームが放たれる。それをなんとか剣で弾く。

「一か八かあー!!」

俺は向かってくるビームを避けながらオルコットに向かっていく。

「無茶苦茶しますわね！けれど無駄な足掻きですわ！」

オルコットは再度離れてビットを放つ。

今度は確実に避けながらビットを一機破壊した。

「はっ！」

オルコットはブルー・ティアーズを一機破壊され驚く。・・・そうか！

「分かったぜ！この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない。しかもお前はその時」

またビットを一機破壊した。

「それ以外の攻撃ができない」

見抜かれたことに驚くオルコット。いけるぜこれは！！

悠夜 side

「あー、やべーな」

「ああ、あの馬鹿浮かれているな」

「あのー、どうかしたんですか？」

今、俺たちはモニターで一夏の試合を見ていて、俺が言った言葉に千冬さんが同意した。その様子を見た山田先生が質問をしてきた。

「あいつ今左手を開いたり閉じたりしているでしょう。あいつは昔からあの癖が出るときは大抵簡単なミスをするんですよ」

「へー、そんなんですかー」

『残り二機!』

そう言って一夏は一機、もう一機とブルー・ティアーズを破壊していく。

『距離を詰めればこちらが有利!』

一夏が距離を一気に詰める。あの馬鹿。

『かかりましたわ!』

背部の円筒型の砲身が一夏の方へ向けられミサイルが発射される。やっぱり隠し兵装があったか。

『しまった!』

一夏は後方へ飛び回避しようとするがミサイルは的確に目標を追う。  
ドゴォー!

ミサイルが一夏に当たり爆発した。

「一夏!」

「はあっ!」

箒は叫び山田先生は目を見開く。一方俺と千冬さんは……

「ふ、機体に救われたなバカ者めが」

「やっと終了か」

そんな反応をしていたので山田先生が「えっ、えっ」といつている。すると煙の中から元の白式と似通った部分はあるものの白式とは違うIISが出現した。

『まさかファースト・シフト一次移行！あ、あなた、まさか今まで初期設定だけの機体で戦っていたというの！』

オルコットも驚いている。そりゃそうだ。未だに自分専用にしていなかった相手に本気で挑んでいたのだから。

そして一夏が右手に持った剣の刀身が開きビームの刃が形成される。

『雪片弑型・・・雪片つてたしか千冬姉の武器だよな・・・へっ、俺はどうやら世界で最高の姉さんを持ったよ。でもそろそろ、守られるだけの関係は終わりにしなくちゃな。これからは俺も俺の家族を守る』

『はあ？あなた何を言って・・・』

『とりあえずは千冬姉の名前を守るさ。弟が出来じゃ格好がつかないからな』

なんか今日の一夏キザっぱいな。

『ああもう！面倒ですわ！』

しびれを切らしたオルコットが合計4発のミサイルを飛ばしてくる。

『視える！』

一夏はトリッキーな動きをしてミサイルを全て切り裂いた。

『行ける!』

『はあああああ!』

雪片の刃がオルコットに到達する瞬間、白式のシールドエネルギーが尽き試合終了の音が鳴った。

『試合終了。勝者セシリア・オルコット!』

「は!?!」

アリーナで戦っていた二人が一番驚いていた。

「あーあ、やっぱりか」

「あの馬鹿者めが」

そうして一夏がピットに戻ってきた。

「くっそー、イケると思ったんだけどなー」

「ISの特徴よく理解してなかったんだろ? まあ、俺が勝てばいいだけさ」

俺はピットに向かいながら言う。

「そういえば悠夜のISまだ見てなかったな。どんなのなんだ?」

「見ればわかるさ……行くぜ、クンネ・カムイ黒神」

そして俺はクンネ・カムイを展開させ、アリーナに降りる。すぐに試合開始のブザーが鳴り、

「じゃあ行くうか。オルコット」

「さっきのようにはいきませんわよ!」

俺の一方通行(ワンサイドゲーム)が始まる。

三人称 *side*

試合が始まるとすぐにセシリアは距離をとりビットをパージシスターライトMK?で一斉攻撃を仕掛ける。

「何処を狙ってるんだ?オルコット?」

しかし悠夜はそれをいとも簡単によけていく。

「調子に乗らないでください!」

そういうセシリアだが彼女の攻撃は何一つ悠夜に傷をつけていない。

「その程度か。まあ、ISを起動させて間もない一夏に負けそうになるやつなんだからそんなもんか」

「しるわい!」



それでも悠夜にダメージを与られない。すると

「こっからは俺の攻撃にさせてもらう。いけ！」

悠夜のスラスタから半自律高機動遊撃砲塔【シューティング・ビット】と、半自律高機動突撃砲塔【フアング・ビット】が二機ずつパージされセシリアに迫っていく。セシリアは攻撃するの忘れ、必死によけているが何発かあたってしまふ。それでもセシリアはなんとか避けていた。だが、

「くっ、たしかに手ごわいですがそこまで避けられないわけでは、  
かかったな」なっ!？」

セシリアが逃げていた先には高エネルギービームライフル【ストーム】を連結させ、発射した悠夜がいた。

「キャアアーーーーー」よつと

セシリアは悠夜の攻撃を直撃。ISを強制解除された彼女は真つ逆さまに落ちていくが悠夜がそれをキャッチ、地面との激突をま逃れた。

「どうしてそんなに強いんですか？」

「強い？別に俺は強かないさ。俺はただ自分の心に誓ったことを貫き通したいだけさ」

「そうですか」

『試合終了。勝者……黒川悠夜君！』

『ワアアアーーーーー』

そうしてオルコットとの決闘は悠夜の勝利という形で終わった。

セシリア side

「はぁー」

現在私は今日の試合の後と言うことでシャワーを浴びている。しかし、

（最初の試合、なぜあのISのシールドエネルギーがゼロになってしまったのかは分かりませんが、勝ちには勝ちました。ですが……）

納得できない。私はいつも自身の勝利と自信に満ちていたはず。それなのに今日の二人との試合は違った。特に、

（黒川悠夜）

彼は私に圧倒的差で勝利した。はじめてだった。男の人に負けるなんて……。私の父は昔から母の顔ばかり伺って弱かった。だから私は情けない男とは結婚しないと決めていた。

『俺はただ自分の心に誓ったことを貫き通したいだけさ』

そして出会った。まるで父とは正反対、強くて勇ましい人。そんな男性を……

「黒川悠夜さん／＼／＼／」

いつのまにか私は彼のことをもっと知りたい。そう思うようになっていた。

悠夜 side

「と、言うわけでクラス代表は織斑一夏君となりましたー」

朝のSHR。山田先生が発した言葉に一夏だけに衝撃が走った。

「な、先生！俺って負けて最終的に悠夜がクラス代表になったんじゃないですか!？」

「あ、それは・・・」

「俺が辞退したからだ」

「悠夜・・・」

そして俺は席を立って言った。

「だいたい考えてみれば数回しかISを動かしていない一夏が勝つはずないし、それにクラス代表って生徒会やクラス代表選、委員会の会議への出席、ようはクラス長みてーなものだって聞いたぜ。そんな面倒なもんやってられっか」

「私もですわ。それに少し大人げなかったと思ひまして・・・」  
するとセシリアも席を立つ。お、分かってるな。でも俺を見るの

は何故だ？

「だけど俺はISをまだ2回しか起動させてないんだぞ？どうやってクラス代表選に勝って言うんだよ」

「それもそうですわね、なら“悠夜さん”と私であなたを鍛えるところはどうでしょう？」

一夏の質問にどうしようか考えているとオルコットがそんなことを言った。それはいい。あれ、ていうかあいつ俺のことを“悠夜さん”って呼んでたっけ。まあ、いいや。一科もその意見には賛成のようだ。

「お、それはあり「それはいい。」「…え、箒？」

箒がいきなり入りこんできた。

「すでに、悠夜は“私と一緒に”に一夏を鍛えろと言ったのだ。お前など不要！」

「あら、あなたのIS適合ランクはCのはずですわね、篠ノ之さん？」

「な、ランクなど関係ない」

「いいじゃないか、二人共で。箒が剣を、俺がIS理論を、それでオルコットさんがISの実戦。これなら完璧に上達するだろう。な、一夏？」

「ああ、これなら大丈夫だ」

「だそうだ。箒、オルコット」

「「え、」

一夏と俺の答えに二人が声をそろえて驚いたような声を上げる。こいつら仲がいいのか悪いのか。

「し、しかたありませんわね」

「そういうことにしといてやるう」

こうして約二人が不機嫌な顔だが1組のクラス代表は一夏に決定した。そして休み時間、オルコットが俺たちのとこにやってきた。

「よっ、オルコット」

「あ、は、はい。そ、その先日は随分と失礼を。昨日の勝負でよく分かりました。もう一度自己紹介をさせてくださってもよろしいでしょうか？」

「いいよな、一夏」

「ああ、勿論。」

「私、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットです。セシリアと呼んでください。」

そして一礼した、なんだちゃんと礼儀のある子だったな。

「えっと、織斑一夏だ。よろしく」

「俺は黒川悠夜だ。よろしく」

「はい、宜しくお願ひします。悠夜さん、一夏さん」

「にしても面倒なもんになつたなー、一夏」

「その面倒なもんを押し付けた本人に言われたかないよ」

「へっ、そうかい」

そうしてセシリアとの騒動は幕を閉じた。

### 第三話 クラス代表決定（後書き）

これでちょうどいいのかな？アドバイスを募集しています。

#### 第四話 二組の転校生（前書き）

やっと更新できた。これからはもっと早く更新するよう頑張ります。



## 第四話 二組の転校生

三人称 side

くグラウンドく

「では、これよりISの基本的な飛行操縦を行ってもらおう」  
今悠夜たちは鬼教官、もとい千冬の授業を受けている。

「織斑、オルコット、それに黒川、試しに飛んでみる」

「えー、俺いらなくないですか？」

「いいからさっさと飛べ！」

「分かりましたわ！」

「へーい」

そう言つて悠夜とセシリアはブルー・ティアーズとクンネ・カムイを展開させ一気に空へ上がる。

「よし俺も……ってあれ？」

「何をしている、早くしろ。熟練したIS操縦者は展開に一秒もかからないぞ」

「うっ、……集中………来い！白式！」

そうしてやっつと白式を展開させた一夏はよろめきながらも悠夜たちのもとへ上がる。

「何やってんだよ一夏」

「そう言われても・・・、自分の前方に角錐を作るイメージ・・・だっけ？わっかんねーんだよな」

「イメージはしょせんイメージ。自分に合った方法を模索する方が建設的ですよ」

「そうゆうこつた」

悠夜とオルコットが近づいて話しかける。

「だいたい空を飛ぶ感覚自体まだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ？これ」

「そういう話となれば結構かかるが、付き合うか？」

「いや、いい。遠慮しとく。なんかもう頭パンクしそうになった」

「はあく、まいいや。どうせ放課後特訓するんだから。今日は第三アリーナな。セシリア、今日も来るだろ？」

「あ、はい。いいのですか？」

「ああ、セシリアには狙撃回避の訓練をして欲しい。俺だとしても先読みして当てちまうんだ」

一夏に白式が来た翌日から悠夜達は特訓をし始めた。メンバーは悠夜と一夏と篝、そしていつも悠夜について回って篝とけんかしているオルコットだ。しかし最終的には篝とオルコットが悠夜をめぐってケンカし、お互い怒ったまま帰っていき、悠夜はなんでけんかになったのか分からなく、一夏は悠夜に呆れ特訓は終了するという形がほとんどだった。

「おい黒川、何時まで飛んでいるつもりだ。さっさと急降下と完全停止をやってみせろ」

「おー怖。じゃあな一夏、先行って待ってっから」

「では、お先に」

そう言うのと悠夜とオルコットはまたしても一気に急降下し、地面すれすれのところで完全停止をする。

「上手いもんだな。よし、俺も」

そして一夏も急降下を開始するが、

「えっ、うわあ、わあーーーーー!!!」

《ズガーーーーー》

「一夏!」

「一夏さん!」

「あんの馬鹿！」

三人はすぐさま一夏の元に駆け寄っていく。

「織斑君！？大丈夫ですか？」

篝とともに駆け寄ってきた山田先生も心配そうに一夏に聞く。

「痛ってー、死ぬかと思った」

「馬鹿者、グラウンドに穴をあけてどうする」

「すみません」

「情けないぞ一夏。俺が教えてやったことまだ覚えてねーのかよ」

「面目ない・・・」

「まあいい、織斑先生、もしものことを考えてこいつ保健室に連れてって行きまーす」

悠夜は一夏の手首をつかみ、速足でその場を出ようとする。

「まて黒川」

「ギクッ!!!」

「お前、織斑を利用して授業をサボろうとしてるんじゃないよな？」

「……ハハハ、サア、イコウカオリムラケン！！！！」

「うおー！！」

そう言うつと悠夜は一夏の手首を持ったまま全速力で走りだし、すでに姿は見えなくなっていた

「ちっ、逃げられたか」

「あつ、なら私も」

「わたくしも」

「お前たちは駄目だ」

「「えーーーーー」」

『バン！バン！』

「「……すみません……」」

しかし千冬は悠夜に付いていこうとした筈とオルコットは出席簿制裁で食い止めた。晴れた日のことだった。

く学園ゲート前く

「「ここがIS学園……」」

そこには微笑を浮かべている少女がいた。

『織斑君、クラス代表決定おめでとー!』

『『『おめでとー』』』』

クラツカーが鳴り、クラスの女子がパチパチと拍手する。

「なんで俺がクラス代表なんか」

「いいじゃねーか一夏。こうやって祝ってくれるんだからよ。あっ、そこのジュースとってもらっていい？」

「何度も言うが譲ってやってもいいんだぞ？」

「何度も言うがいいえ結構、わたくしはこれがあるから十分」

そう言っつて悠夜はお菓子のたくさんある手と口を見せる。

「はぁー！ー！『パシヤ』ん？」

すると人ごみの中から二年生らしき女子が出てきた。

「はいはい、新聞部の黛薫子です。噂のクラス代表とイケメン編入生を取材に来ましたー」

そう言うと黛薫子は一夏にボイスレコーダーを突き付けた。

「じゃあはい織斑君から、今の心境は？」

「えっと、頑張ります」

「捏造のし甲斐があるコメント頂戴よー。じゃあ次は黒川君、かつこいいのどうぞー！」

「あーっと、俺に近づくと火傷するぜ？みたいな？」

「いいねー。王道だけどいいねー。それじゃあ、ついでと言うかオルコットさんにも聞こうかな。なぜ、代表を辞退したのですか？」

「…ついでとついうのは、まあいいですでしょう。それではですね、私が」

「なんか、長くなりそうだからここは、黒川君に惚れたからってこと」

「なっつ！！！！！／／／／／」

「はい、じゃあ三人とも写真撮るから並んでー。あつ、握手とか

してるのもいいかもねー」

一人で赤くなっているセシリアを無視し黛薰子は三人を指示する。

「それでは $35 \times 51 \div 24$ は？」

「えーと、2？」

「74.375」

「はい、正解」

そして普通にシャッターが切られる。が、

「なんで全員入ってるんだよ！」

一夏が叫ぶ通り、写真には三人だけでなくそこにいた全員が入っていた。

「お前らなー」

「まあ、まあ、まあ」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょう」

その時セシリアが苦虫を噛むつぶしたかのような顔になっていたのは悠夜には見えなかった。



『もうすぐクラス対抗戦だねー』

『そういえば、二組のクラス代表が変更になったって話、黒川君知ってる?』

「二組の代表?」

もうすぐクラス対抗戦なのでクラスの話はそれ一色だ。悠夜も例外ではなくそんな話をしていた。

「おはよー」「」

「おっ、一夏に篤、お前ら二組の代表のこと知ってるか?」

そこに一夏と篤が入ってきた。

「代表?篤、何か知ってるか?」

「ああ、なんでもナントカって言う中国からの転校生に変わったらしいぞ」「

いくら古風でもやはり女の子らしい。噂には興味はあるようだ。

「転校生？こんな時期にか」

「どんなやつかな？強いのか？」

「まあ、一夏よりは強いな」

「なんだよそれ、俺だって強くなってるんだぜ？」

「いままで俺と戦って一撃も当てられなかったお前がか？」

「うっ」

「セシリアの狙撃をまともに避けられなかったお前がか？」

「がっ」

「雪片の扱い方を箒にならっても何時までも上達しないお前がか？」

「………グスン……」

ついに一夏がノックアウトした。

「ごめん、ごめん。言いすぎた。ま、今のところ専用機を持っているクラス代表はお前と四組だけだ。油断していなければやれるだろう」

「その情報、古いよ」

悠夜が机に突っ伏してべそをかいている一夏をなだめていると教室

の入り口から聞きなれない声が聞こえた。

「二組も専用機持ちのクラス代表になったの。そう簡単には優勝出来ないから」

そこには茶髪でツインテール、肩を出した改造制服で一夏と悠夜だけが知る顔があった。

「鈴？お前鈴か？」

「そうよ！中国代表候補制、鳳鈴音（ファン・リンイン）！今日は宣戦布告を言いに来たってわけ」

そう言つて鼻を鳴らす女の子、鳳鈴音は悠夜と一夏の幼馴染である。

「うおっ、鈴音（すずね）じゃねーか。何かっこつけてんだ、似合わないぞ」

悠夜がそうゆつと鈴音は目を丸くし顔を真っ赤にさせた。

「あ、あんた悠夜！？／＼／＼なんであんたがここに、て言うかその名前で呼ぶなって何回も言ってるでしょう！！」

「お、それでこそお前だ」

悠夜はケタケタ笑い、鈴音はさらに顔を真っ赤にさせて怒る。

「な、なんなのよあんた！昔っからいつつもあんたはそうやって、  
「おい、鈴」何よ一夏！私はこいつに・・・痛っ！？」

鈴が騒いでいると後ろからいきなり出席簿が鈴の頭めが落ちてきた。

「なにすんの！？って千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。もうSHRの時間だぞ、さっさと教室に戻れ邪魔だ」

「す、すみません」

そして鈴音は2組に帰って行ったが帰り際、

「またあとで説明してもらってからね。逃げないでよ悠夜！」

とって千冬に出席簿をもつ一発もらい頭を抱えながら帰って行った。

「鈴が代表候補生・・・」

「世の中不思議なこともあるんだな」

二人がそんな感想を言っているとまたしても出席簿が活躍し、授業が始まった。

「へー、そんなことがあったんだ」

「それにしてもびっくりしたぜ。まさか鈴が2組の転校生だなんて」

「まったくだ。連絡ぐらいすりゃよかったのに」

今悠夜たちは悠夜と一夏がこの学園にいる経緯を話し、食堂にいる頼んだものは鈴音がラーメンで一夏がと悠夜は普通のから揚げ定食というようだった。

「一夏は最近連絡したけどつながらないし、悠夜は悠夜で私がいなくなった後どっかに行っちゃって聞かなくて連絡したくてもできなかったのよ！」

「まあ、たしかに最近ゴタゴタして携帯なんて見てなかったからな」

「ああー、ごめんな」

「ふにゃ~~~~~／／／／」

そうやって悠夜は鈴音の頭をなでる。鈴音も箒と同じ悠夜に頭をなでられると顔が極限まで緩む人間だった。

「ふにゃ~~~~~・・・っは!!そうよ悠夜!あんた私がない間何処で何してたのよ!？」

「イヤー、キョウハイイテンキデスネ」

「片言で話逸らしてんじゃないわよー!!」

頭をなで続けている状態でそんなに怒られても正直言っただけで何一つ怖くない。しかし悠夜は鈴音までもがそんなことを聞くとは思わなかったので変な汗をかきながら一夏の時なんて言っただけと考えていると、

バン!!

「悠夜、そろそろ説明してほしいのだが」

「そうですね、悠夜さん。まさかこの方とつ、つ、付き合ったらっしやるの!?!」

さっきまで隣のテーブルにいた筈とセシリアがこっちの方が怖いんじゃないかというオーラで悠夜に迫ってきた。

「べっ、べべ、別にあたしは………//」

鈴音は一気に顔が赤くなりうろたえる。

「そっぞ。鈴音はただの幼馴染だ。なあ、一夏」

「ああ、中学の時筈と入れ違いで転入してきたんだ」

「さしずめ筈はファースト、鈴音はセカンド幼馴染ってとこだ」

「ファースト……//」

今度は筈が赤くなる。

「ふうん、そうなんだ。はじめましてこれからよろしく」

「ああ。よろしく」

「私のことを忘れてもらわれては困りますわ！私はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生で悠夜さんとは・・・」

「悠夜はISの操縦どれぐらいできるの？よかったら教えてあげようか？」

「いや、いや。俺は一夏の特訓してるから」

「そっか。なら仕方ないね。私もクラス代表選の準備しなきゃいけないから」

「って、聞いていますのー！」

悠夜たちが話している途中もずっと自己紹介をしていたセシリアがついに怒った。

「あー、ごめんごめん」

「じゃあ、私は先に行くから。一夏、クラス代表選、覚悟しときなさいよー」

そう言って鈴音は食堂を後にする。

「俺たちも早く食おうぜ」

「お、おう」

そして悠夜たちも食べ終え、食堂を出た。



#### 第四話 二組の転校生（後書き）

鈴と一夏の試合中に乱入してくる無人ISSって亡国機業のISSでし  
たっけ？答え募集します。

**第五話 良い予感はあるけど嫌な予感も当たるよ（前書き）**

前回言っていた「3話の無人ISは亡国機業のものなのか」という質問の答えがまだ1つも来ていません！次話にかかりますのでどうか早く答えを送ってください。

第五話 良い予感はあるけど嫌な予感も当たるよね

「おっし、じゃあ、始めっか」

今日も悠夜たちはアリーナで一夏の特訓を始めようとしていた。

「今日は何をしますの？」

セシリアは最初のうちは時々来るようだったが、今はもうこの特訓のレギュラーになっている。

「ああ、今日はなお前ら三人対俺って言うのはどうだ？」

「……………は？」

三人は心底驚いた。

「だから、俺がお前らを同時に相手してやるって言うんだよ」

「いやいや、無理だろ」

「そうですね。いくら悠夜さんがお強いからといっても」

「流石に三人同時とは……」

「うるせーなー。お前らと同時にやったって別に勝てるからいいんだよ。まさか勝てると思ってるのか？」

「……………む……………」



られず、逆に悠夜にかなりシールドエネルギーを削られた。

「おいおい、どうしたんだよ。倒せるんじゃないのか？」

「ちっ、くっそー！ー！ー！ー！」

そう言うと一夏は雪片式型を悠夜に振る。

「だから甘いって言ってんだよ！ー！」

しかし悠夜はそれをクレイモアで防ぎ、一夏の横腹に回し蹴りを入れる。

「がっつ・・・」

「一夏さん！ー！」よそ見してる暇があるのか？「くっ、くっ、」

セシリアにはシューティング・ビットとファンゲ・ビット二機ずつを向かわせ二丁のサイクロンで狙い撃つ。

「こんにゃろー！ー！ー！ー！」

「はぁあー！ー！ー！ー！ー！」

すると両サイドから一夏と篝が切りかかる。が、

「いい攻撃だが俺のビットは八機あるんだぜ？」

「づっづっ！ー！ー！」

「ぐわっ!」

悠夜の残りのビットが一夏たちを襲つ。

「やられてばっかだたまるかー!」

「なに!？」

だが一夏がビットに攻撃されながらも悠夜に切りかかり悠夜に隙が出来る。

「!?!?!」

「今だ!?!?!」

「いっけー!?!?!」

「一撃くらい当てて見せますわ!」

それを見付けたセシリアはスターライトMK?とブルーティアーズで一斉攻撃をし、一夏と篤は零落白夜を発動させた雪片式型と打鉄に装備されている刀で切りかかる。

「勝てる!?!」

一夏は叫んだ。だが、

「……トリアル・レイヴ、発動……」

『OK・condition clear・one of ab



「はい、悠夜。と、その他も」

「その他って……」

「お、サンキュー。て言うか鈴音、ずっと待っていてくれたのか？」

「まあね。ていうかその鈴音（すずね）って呼び方、もうなんか定着してきたわね……」

試合が終わった後、シャワーで汗を流し、全員アリーナのピットにいくと鈴音がスポーツドリンクを持って待っていた。

「そういえばさ、お前最後のあれ、何なんだ？」

「そうですね。いきなり消えたかと思ったら一気にシールドエネルギーがなくなつて……」

「抵抗すらできなかつたぞ」

しばらく雑談した後、ふいに一夏たちが悠夜に質問してきた。

「あー、あれか。あれは俺の単一仕様能力、ワンオフアビリティトリアル・レイヴンていうんだ。俺のビットを全てパージしないと発動できないけど、超高速で戦える。でも使用者の体力を削るからあんま使いたくないんだよ」

「あの後ぐったりだったもんな」

そう、あの後一夏たちがシャワーに行こうと悠夜を見ると、悠夜が地面にぐったりと倒れていて復活するのに20分かかった。



「ところでさ、悠夜」

「ん？どうした、鈴音？」

すると唐突にさっきまで話を聞いていた鈴音が悠夜に話しかけてきた。その様子は非常に珍しく顔を赤らめ視線は忙しく動いていた。

「約束・・・覚えてる？」

「約束？・・・ああ、昔の・・・あれだろ？お前の酔豚が上達したら・・・」

「そう！それ！！」

鈴音が目をキラキラさせ悠夜を見る。悠夜は思い出したような顔をし、言った。

「毎日おごってくれてるってやつじゃなかったっけ？」

「・・・・・・は？」

「いや、だからよ、毎日ただ飯食わしてくれるんだろ？いやー、ありがたい話だよな、一夏」

「おい、それは・・・」

「・・・・・・な」

「な？」



一夏わあわて、悠夜も自分が言ってしまった言葉の意味に気づく。刹那、強烈な爆裂音がし、遅れて廊下が揺れる。悠夜は鈴音を見た。鈴音は右腕にだけISを展開し、どす黒いオーラをまとっていた。

「ふーん、言っちゃうんだ。人が一番気にしてることを、一番傷つく言葉を……」

「う、うううう、ごめん！鈴音！今は、その……えっと……悠夜……」はっ、はい……」

あまりにも鈴音が怖いため、思わず悠夜は敬語になる。

「来週のクラス代表選、もし一夏が負けたら約束を思い出すプラス！悠夜が私の言うことを何でも聞く……これで許してあげるわ！」

「おっ、俺……!?」

「おう、いいぜ。でももし一夏がかったらお前の言う約束の意味、ちゃんと教えてもらうからな……」

「ゆっ、悠夜まで……!?」

二人は既にやる気だが、一夏にしてみればいい迷惑である。一夏は必死に抵抗した。

「待ってって！なんで俺がお前らのもめ事に巻き込まれなきゃいけないんだよ!?お前から模擬戦すりゃいいだろ!?」「うるさい!!一夏はすっこんでて(ろ)……!!」「……すみません」

しかし抵抗むなしく悠夜たちに押し込まれてしまった。

「じゃあ！来週の代表選で！！一夏、覚悟しときなさい！！！！」

そう言っつて鈴音はピットを出て行った。

「くっそー、何なんだ鈴音のやるー。なあ、一夏」

「なあじゃねーよ！！！！！！」

「うおっ！？」

悠夜はやつと嵐が過ぎたかと思い、一夏に話しかけるが、次は一夏が怒り出す。

「てめー、勝手に俺を使いやがって！うわー、絶対に鈴、全力で攻撃してくるー！！」

「わ、悪い。つい熱くなっちゃって・・・」

悠夜も流石に悪いと思ったのが、一夏に謝る。

「もういいさ・・・。クソーこうなったら何が何でも勝ってやる。じゃ、俺はもう寝るから」

「お、おう・・・。そうしてくれ。おやすみ・・・」

一夏はもう自棄のようで、そう言っつと自分の部屋に帰って行った。

「はあ、厄介なことになった」

「悠夜（さん）……」

悠夜がこれからのことを思いため息をついているとちつきまで空気が  
だったセシリアと箒がふいに悠夜に話しかけた。

「ん、なんだ？」

「馬に蹴られてしね！！！！」

「だからなんでなんだよ！？」

まったく理由が分からない悠夜であった。

そしてクラス対抗戦当日。

「一回戦から鈴が相手か……」

「まあ、勝ち進む手間が省けてよかったじゃねーか」

「お前にだけは言われたくない」

一夏は白式を展開させ悠夜たちと一緒にピットにいた。

「あちらのISは甲龍（シエロン）。織斑君の白式と同じ、近接格闘型です」

と、山田先生が甲龍の説明をする。

「わたくしの時とは勝手が違いますわよ。油断は禁物ですわ」

「硬くなるな。練習の時のようにやればいい」

「一夏、俺のことは抜きにして勝ってこい！」

「おう」

『それでは両者、既定の位置まで移動してください』

アナウンスが鳴ると前方のハッチがゆっくりと開く。

「じゃあ、行ってくる」

そして一夏はアリーナに飛び立った。

「さ、お前たちはモニター室に行け」

千冬はそう言ってモニターに向かって何かしている山田先生の方に行く。

「私たちも行きましょう」

続いてセシリアが出口に向かう。

「どうしたんだ？悠夜、行くぞ？」

セシリアに続いて箒が出て行こうとしたが、悠夜が何故か険しい顔でハッチの方を見ていたので箒が不審に思い悠夜に話しかけた。

「あ？ああ、いやな、なんだか嫌な予感がするんだ」

「嫌な予感？」

「ああ、俺の思い過ごしかもしれないがな。行こうぜ、箒」

そして悠夜たちもピットを出て行った。

『はあああああ！』

『ぐ！？』

始まって数分、試合は鈴音の方が押していた。

「押されてるな」

「そうだな・・・」

口ではそういうものの、悠夜はさっきからずっと何かを考えている様だった。

「どうした悠夜？またさっきの嫌な予感か？」

すると筈が悠夜に話しかけてきた。

「ああ、なんかこの感じどこかで感じたことあるんだよな」

「どこかで？」

「こつ、押しつぶされるような・・・まさか！！！！」

『はあああーーーーー！！！！』

悠夜の何かを思い出した声と一夏の鈴音の隙を突こうと迫る声が重なった瞬間、

ドゴーーーーン！！！！

アリーナの外部を覆っていた遮断シールドがいきなり割れ、巨大なビームが降り注ぎ、黒煙を舞いあがらせ、悠夜たちのいるモニター室までそのビームの衝撃が伝わってきた。

「ちっ！！」



「あつ！ちよつ、悠夜！？」

「な、なんですの！？」

悠夜はそれを見るや否や混乱する生徒をかきわけモニター室を出て行き、遅れて箒とセシリアが後を追った。

「もしもし！？織斑君、聞こえますか！？織斑くん！鳳さん！」

一方そのころピットではプライベートチャンネルを使い、山田先生が一夏と鈴音に呼び掛けていた。

「少し落ち着いたらどうだ？山田先生」

「これが落ち着いていられますか！？織斑君と鳳さんは自分たちで食い止めるって言ってるんですよ！？」

「別にいいんじゃないか？本人がそう言ってるんだから・・・」

落ち着いた様子で白い粉を入れる。

「取り敢えずコーヒーでも飲め。あなたに必要なのは落ち着くことよりも糖分だ」

「あの…それ塩ですよ？」

ピタリ、と千冬は止まり何事もなかったようにスプーンを容器に入れる。

「なんでこんなところに塩がある」

「さ、さあ？」

「千冬さん！！！！」

すると突然ピットの入り口が勢いよく開き、そこからは息を切らした悠夜と箒とセシリアがいた。

「俺に、俺にISの使用許可を！！」

「落ち着け馬鹿。そうしたいのは山々なんだが、あいにく侵入者のおかげで遮断シールドがレベル4に変更、しかも全扉がロック。これじゃどうしようも俺なら出来ます」・・・何？」

「俺なら扉とシールドを破壊して中に侵入出来ます」

「・・・やれるか？」

「はい」

悠夜の即答。そしてしばしの沈黙、ついに千冬が口を開いた。

「……………黒川悠夜にISの使用を許可する。山田先生、Bピット

の生徒を非難させてください。だがな黒川、危ないと感じたらすぐに引き返すんだぞ。

「ありがとうございます!!」

悠夜はそう言つと走つてピットを出て行つた。

「先生、わたくしも」お前はだめだ。オルコット「何故ですか!？」

セシリアも悠夜に続き許可を取ろうとしたが、千冬に拒否される。

「お前はまだ弱い。このままいくとただの黒川の足手まといだ。行つたところで何の役にも立たない。今はその時じゃない。分かるな?」

「くっ」

「お前もだ篠ノ之」

「.....」

セシリアと箒は血が出てくるほどの強さで拳を握り続けた。これほどまで自分の無力を呪つたことはなかった。

第五話 良い予感はあるけど嫌な予感も当たるよね（後書き）

本当をお願いします。あと、感想も。

## 第六話 乱入×乱入（前書き）

結局質問の答えはあまり返ってきませんでした（涙）。なので『分らない』という方向で行きます。あと悠夜が少し壊れます。

## 第六話 乱入×乱入

- Bピット -

「いくぜ」

悠夜はBピットに付くとすぐにクンネ・カムイを展開させ、背中にスラスターとして折りたたんで装備していた低反動超電磁砲 クスイファイアス3 を腰に移動、展開し、胸の超高密度プラズマエネルギービーム砲 ストライクバースト と同時に発射した。するとすぐに扉は破壊され、そのまま三本のビームは遮断シールドに直撃、それまで破壊した。

「なんだ!？」

「何だとは失礼だな。せつかく助けに来てやったのによ」

「悠夜!」

一夏は扉とシールドが破壊される音にびっくりし、音のする方向を見たが、そこには悠夜がいたので安堵の表情を見せた。

「よっ、助けに来たぜ。一夏」

「何だお前かよ。また遮断シールドが破られたから新手かと思ったぜ」

「あんたたち!そこで喋ってないで早く助けなさいよ!」

悠夜たちが軽口を叩いていると、その間も謎のISと戦っていた鈴音に怒鳴られた。

「悪い悪い。・・・あいつか」

「ああ」

悠夜は今も鈴音と戦っているISに目を向けた。

「ちっ、あいつらじゃないのか。でも新しいやつの可能性もある。死なない程度にいたぶるか」

「どうした？なんか目が怖いぞ・・・」

「ん？ああ、なんでも。さ、鈴音を助けに行くぞ。このままじゃあいつがやられちゃう」

「あ、ああ」

一夏は何かをぶつぶつ言っていた悠夜に少しばかり狂気のようなものを感じたので少し後ずさりしたが、そんなものはなかったかのよう悠夜が返してきたので一夏はさっきのは気のせいだと思った。

「くっ、図体がデカイ癖によく動く」

一方鈴音は一向に倒れる気配のない謎のISにいらつきを覚えていた。するとそのISの装備されている大型ビーム砲のうちの一門を鈴音の方に向けてきた。

「そんなもの！」

鈴音はいち早く反応しよけようとするが一向にISは撃つてくらず、逆にどんどん迫ってきた。

「なっ!？」

鈴音はそれには反応できず、ISに激突………  
・かと思っただが、

「俺の友達タチになに手え出してんだよ!！」

「大丈夫か!？鈴!！」

悠夜が直前でISを蹴り飛ばし、一夏が鈴音に近づいてくる。

「………遅いのよっ!このばか悠夜!！」

鈴音はそう言っているがその表情はどこか嬉しそうだ。

「ああ、後ごめんな。あんなこと言って」

「べっ、別にいいわよ。もう過ぎたことだし、こんなのが来ちゃ試合どころじゃなくなるし」

「そうだな。……さくってと、いつちよぶつ倒しますか!！」

そう言つて悠夜はクレイモア、一夏は雪片弐型、鈴音は二基の大型の青龍刀、双天牙月を構える。

「それでどうするんだ?何か作戦があるのか?」



「ああ、お前らはさっきの試合とかでシールドエネルギーが残り少ない。俺の援護に回ってくれ」

「でもそれじゃあ！」

鈴音は私も戦うと抗議する。

「大丈夫だ、俺ならやれる。お前らは隙を見つけて攻撃してくれ」

「……………分かった……………」

「よし、良い子だ」

そう言っつて悠夜は右手だけクンネ・カムイを解除し、その手を鈴音の頭に乗っける。

「それじゃあ今度こそ行くぜ、悠夜」

「ああ！」

真っ先に悠夜が謎のISに肉薄しクレイモアで切りつける。しかしそれは簡単に避けられる。

「ちっ、はあああああ！」

悠夜はクレイモアの一振りをサイクロンの一丁に瞬時に切り替え謎のISに向けて放つ。そして今回は直撃したが、何かに阻まれる。

「シールドみたいなやつか。だが、まだまだあ！」

今度はシュートティング・ビットとフアング・ビットを二基ずつパ  
ージし、謎のISのもとに向かわせる。

「ううおおおお！」

すると謎のISの背後から一夏が現れ、ISの背中を切りつける。  
ISは一夏の方を向き、ビーム砲を向けるが、

「じつちよー！」

今度は鈴音がISに切りつけ、ISを吹っ飛ばす。

「大丈夫？一夏」

「ああ、ところでさ、悠夜、鈴」

「どっした、一夏」

「何？」

一夏の呼びかけに二人がプライベート・チャンネルで答える。

「なんかさ、あのISの動きって機械じみてないか？」

「何言ってるのよ、ISは機械じゃない」

「確かにそうだな。俺たちが喋ってる間のほとんどがあいつは止ま  
っている。まるでこちらの話に興味があるみたいに」

一夏が言ったことに鈴音は何を言ってるんという風に返すが、悠夜はその話に賛成した。

「確かに・・・言われてみればそうね」

「じゃあ、本気でやれるってことだよな」

一夏は少し笑いながら言う。

「零落白夜か」

「ああ、あれでこいつを倒す」

「ま、お前の言う通りにしてやるよ。鈴音、一夏が合図したらあいつに向かって衝撃砲を最大で撃ってくれ」

悠夜も少し笑いながら言う。

「なによ二人して、気持ち悪いわね。いいけど当たらないわよ?」

鈴音は何が何だか分からないままそう返す。

「いいんだよ、当たらなくて。じゃあ・・・やれえ!!!」

そう言って一夏は鈴音と悠夜の前に行く。

「ばっ、何やってん」「いいから撃て鈴音!」「あーもう、どうなっても知らないからね!」

悠夜に言われた鈴音は衝撃砲を、悠夜はクスイファイアス3を一夏に

向けて放つ。すると一夏のエネルギーが無理やり入れられたことになり一夏のモニターに『零落白夜 使用可能』の文字が現れる。

「うおおおおおおお!!!!!!」

そして零落白夜を発動させた一夏がISに接近し、ISの左腕を切り落とす。しかし、

「ぐわ!?!」

ISは残りの右腕で一夏を殴り飛ばし、一夏に向かってビームを放とうとする。だが一夏は余裕の顔で、

「狙いは?」

「お前がちゃんとしてりゃ俺はこんな無駄なことしなかったんだぞ」  
刹那、ISの胸がビームで貫かれ、爆発もせずISは倒れた。そのISの後ろにはサイクロンを連結させたため息を吐いていた悠夜がいた。

「やっと終わったな」

「ま、ほとんど俺の活躍だな」

「なによー、私も頑張ったじゃない!」

三人が口々にそう言ってピットに戻ろうとした。その時、

『警告、敵ISを確認。ロックされています』





「夏はすぐに悠夜を助けに向かうが距離が遠く届かない。もつだめかと思っただが」

「やれやれ、うちのクラスはどうしてことう問題児が多いんだろうか」

「千冬姉！」

悠夜の落下地点には千冬がおり、見事に悠夜をキャッチした。

「お前はまだ追いかけていたのか・・・」

しかし千冬は腕の中で気を失っている少年の顔を曇った表情でみていた。

「悠夜、あんたに何があったのよ・・・」

夕方の病室。そこにはベッドの中で眠っている悠夜とその横の椅子に座っている鈴音の姿があった。

「あんな悠夜見たことない……」

鈴音は今までに悠夜のある怒りと殺気に溢れた悠夜を見たことがなく、悠夜が戦ってる間、ずっと体を震わせていた。

「悩みがあるんだっいたら少しは相談しなさいよ……」

そう言っつて鈴音は顔を悠夜の顔に近づける。

「う、ううん……」

「ひゃわっ!?!」

しかしあと数センチのところまで悠夜が目覚めます。

「何あわててるんだ、鈴音?」

「あっ、慌ててなんかないわよ!?!」

鈴音はさっきやるうとしていたことを思い出し、顔を真っ赤にさせて言っつ。

「? ま、いいや。それよりさ、鈴音」

「なっ、何よ」



「俺、思い出したんだ、お前がなんて言ったか。あの時お前、『料理が上手になつたら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる?』って言ったんだよな。俺はてっきりタダ飯を食わせてくれるとばっか思ってたから気付かなかったけど、もしかして違う意味だったのか?」  
と悠夜が聞くと、鈴音は慌てて否定した。

「ちっ、違わない違わない! だっ誰かに食べてもらったら料理って上達するじゃない?」

「そんなもんか。ま、頑張れよ」

そう言つて悠夜は鈴音の頭をなでる。すると、

「!!!! 《ボフィン!》 きゅーー 《バタン》」

「お、おい! 鈴音、大丈夫か?」

さっきのキス未遂と頭をなでもらつたので鈴音の頭はショートし、丁度悠夜に若干抱きつく感じでベットに倒れた。

「悠夜さーん、具合はどうですか? わたくしが看護にきて・・・あら」

運が良いのか悪いのか、セシリアが病室に入ってきた。

「なっ、なんで鈴音さんが悠夜さんに抱きついてますの! 悠夜さんが起きるまで抜け駆けはなしって言ったのに!」

「そういうお前も、私に隠れて抜け駆けしようよ・・・なんだこれは

!？」

さらに篤まで入ってきて自体が大きくなる。

「篤さんは黙っていてください！わたくしはこの方と少し話が、」

「黙っていとはなんだ！私だってこいつに話が！」

「だいたいあなたは……」

篤たちがけんかを始めどんどん収集がつかなくなって悠夜が困っている病室に一夏が入ってきた。

「おつす、悠夜。見舞いに……ってなんでこんなことになってるんだ？」

「俺にも何が何だか、助けてくれよ」

「……ああ、なるほど。……お前がどうにかしろ」

一夏は悠夜に若干抱きついたようになってる鈴音といまだにけんかをしている篤とセシリアを見るとこの原因に気付き悠夜を投げ放した。

「な、なんでだよ!？」

「うるさいリア充」

そう言っで一夏が病室を出て行ったあと、悠夜たちは病室で騒いでいた罰として反省文その他もろもろ20枚を千冬にプレゼントされ

た。

## 第六話 乱入×乱入（後書き）

次は私の一番好きなシャルロットです！やったね！でもなんか書きにくそう・・・

## 第七話 男！？（前書き）

だいぶ投稿に時間がかかった。もう生徒会がどうの部活がどうので大変でした。次はもうちょっと早く更新します。

## 第七話 男！？

「どうだったんだ？あいつ」

「だめだめ。まだ弱っちかった」

そう言ってロングヘアの女性の言葉に白髪の女性が答える。

「けっ、なんだせつかくぶつ潰そうと思ったのによー」

「だめよ、悠夜君はあたしが殺すんだから」

「ふん・・あいつの親友を殺してまで手に入れた機体であいつを殺すなんてお前も趣味が悪いな」

「なによ、エム。もうこれはあたしのなの」

「よく言っ」

エムと呼ばれた女性は鼻を鳴らしながら言う。

「それにこれはまだ未完成だからさ、完成したらまた悠夜君のところに行こうかな」

白髪の女性は左腕の赤いブレスレットを眺める。

「そんなときは俺もつれてけよー!!」

闇はゆっくりと動き出す。

カチカチッ！、カチッ！

「いつ、帰ってきたんだ……よ！」

カチッ！、カチッ！、カチカチッ！

「結構、前からだ……つと！」

「カーーーッ！また負けた！！もう一回やろーぜ！」

「いいぜ。次もコテンパンにしてやる」

「相変わらずすげー強さだな、悠夜。弾相手にノーダメって」

今悠夜たちは幼馴染の五反田 弾の家でゲームをしている。そして悠夜は今だ二人に負けた覚えがない。ちなみに実力は悠夜<弾<一夏という様である。

「それにしても、お前ら以外全員女子か。いい思いしてんだろうな。」

「してねえっつーの。」

悠夜はただ単純に女子が多くて気を使うという理由で、一夏は悠夜がどんどん女子にフラグを立てるのを見てるとむかつくという理由で、たがいに意味は違えど同じ言葉で弾に返す。

「嘘をつくな、嘘を。お前らのメールを見てるだけで楽園じゃねーか。招待券ねーの？あ！お前その技使うなっつただろ！」

「うるせーな、それにねーよ馬鹿。でも、鈴音が来てくれてほんとに助かったな。話し相手少なかったし。なあ一夏。」

「ああ、まあな。」

「ああ、鈴か、鈴ね・・・ダーーーーー！！ちくしょう、負けた！！」

三人がべらべらと雑談をしていると突然バンツと扉が開き、弾の妹の五反田 蘭が現れる。

「お兄い、ご飯出来たよ。さっさと食べに来なさ・・・ってゆ、悠夜さん！？それに一夏さん！」





「ああ、良い嫁さんになるんじゃないか？」

悠夜は蘭の頭をなでる。

「お、お嫁さん……ふにゃ〜」

「お〜い、どうした、蘭？」

蘭は顔を真っ赤にさせたまま固まった。

「悠夜って学校でもこんなだろ？どーせ……」

「まあな、お前来たいつて言ってたろ？連れてってやるつか？ときどきとてつもない殺意が芽生えるけど……」

「いや、遠慮しとく……」

「？ どうした二人とも？」

「「なんでもねーよ」「」

そう言っただけがわからないという顔をしている悠夜の横で一夏と弾はズズズとお茶をすすった。

『ねえ、あの噂聞いた?』

『なに?この間のI.Sのこと?』

『あれは、実験中だった機体が暴走したって話でしょ』

『じゃなくて、今月のトーナメントで勝つと』

『織斑くんか黒川くんと付き合えるんだって!』

『そうなの!』

『マジ!』

「あいつら何盛り上がってんだ?なんか俺と悠夜の名前が聞こえるけど、なんか知ってるか?悠夜?」

次の日の朝、悠夜たちが登校すると教室では女子たちが何かの話題で騒いでいた。普段悠夜たちより遅く来る生徒もいる。

「俺が知るかよ。あ、でも変わったことならあるぜ」

「変わったこと?」

「ああ、実はな・・・」





「俺はお前のその鈍感さにびっくりだぜ・・・」

「？」

いきなり机に突っ伏しぶつぶつ言っている一夏に悠夜がハテナマールクを浮かべていると教室の入り口から千冬と山田先生が入ってきた。

「SHRを始める。さっさと席に付け」

千冬がそう言っていると生徒はすぐに席に着く。

「今日はなんと！転校生を紹介します！」

「あ！」

「おっ！」

「なっ!？」

「そんな!？」

山田先生がそう言っているとカシユーと扉が開き四人は驚く。そこから出てきたのは、

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。みなさんよろしくお願ひします」

男だった。

『お、男?』

「はい。こちらに僕と似た境遇の人が二人いると聞いて本国より転入を・・・」

シャルロットがそう答えると今度は悠夜が話しかけた。

「デュノアだったらあのフランスで最も大きいIS関連企業の・・・」

「はい、僕はその社長の息子で・・・」

『き』

「あ、ちょっとその前に」

悠夜はそう言うと制服の中から耳栓を出し、自分の耳に付ける。

「「「「「きやあああー！ー！ー！！！！」」」」」

黄色い声が教室を超えて廊下にも響く。悠夜は耳栓をしてなんとか耐えているが一夏たちは耐えきれず耳を手でふさいで机に突っ伏した。

『男子！ 三人目の男子！』

『しかもうちのクラス！』

『美系！二人と違って守ってあげなくなる！』

どうしてこんなに騒げるのだろう。悠夜は頭を抱えた。

「騒ぐな、静かにしろ！」

千冬がそう言うとさっきの騒ぎが嘘のように鎮まる。

「今日は二組と合同でIS実習を行う。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。それから黒川、織斑」

「はい」

「デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子同士だ。では、解散！」

そしてクラスの女子は席を立ち、シャルルは悠夜の席に近づく。

「はじめまして、僕は……」

「ああ、それは後で、今は移動が先だ。一夏、行くぞ」

「ああ」

そう言うと悠夜はシャルルの手を取り一夏と教室を出る。

「俺たちはアリーナの更衣室で着替えるんだ。実習の度にこんなだから早めに慣れた方が『あ、噂の転校生発見！』ちっ、もう見つかったか」

悠夜の呆れたような目線の先には他のクラスの女子が集まっていた。

『聞いた！？こっちよー！』

『者共！出会え出会え！』

『織斑君と黒川君の黒髪もいいけど、金髪もいいわね』

すると他の女子も聞きつけてやってきた。

「はあ、行くぞ悠夜。こっちだ」

「ああ、ちよつとごめんな！」

「ふえ！？／＼な、何してるの！？」

一夏は走り、シャルルは悠夜に抱きかかえられ真っ赤になるが悠夜はそれを無視し一夏のあとを追う。

「うわわわわわわわー！！」

そして三人は階段を一気に駆け下り、そのままアリーナの更衣室に向かっていった。

「なんとか振り切ったみたいだなー」

「ああ、相変わらずあの女子共の体力には驚かされる・・・」

「ごめんね、いきなり迷惑かけちゃって・・・あと、降ろしてもら



っていいかな／＼／

悠夜たちはなんとか女子を振り切り、アリーナの更衣室に飛び込んだ。

「あ、ああ。ごめんごめん。それよりまだ自己紹介してなかったな。俺は黒川悠夜だ。悠夜って呼んでくれ」

「俺は織斑一夏。俺も一夏って呼んでくれ」

「うん、よろしく悠夜、一夏。僕のことシャルルでいいよ」

そう言っつて三人は笑いあつた。

「うわっ、時間やばいな！すぐに着替えちまおうぜ！」

「げっ！ほんとだ！早くしないとまた千冬さんの制裁を受けちまう！」

時計を見てそう言つた一夏と悠夜は服を脱ぎ始めた。

「うわっ！！／＼／」

すると何故かシャルルは顔を真っ赤にさせ後ろを向いた。

「どうしたんだ？早くしないと間に合わないぞ？うちの担任はそれはもう時間につるさい人で・・・」

「う、うん・・・」

悠夜の言葉にシャルルはそういう感じがいつころに着替えようとしな

「あの、その・・・着替えるから、あっち向いてて・・・」

「？」 あ、ああ分かった」

やっと出したシャルルの言葉に二人はそういうと後ろを向いた。

「何でもいいけど、急いだ方が・・・ってお前着替えるの早いな」

一夏が振り向くとそこにはもうスーツに着替えたシャルルがいた。

「な、何かな？」

「いや、着替えるのが早くなって・・・なんかコツでもあるのか？」

「い、いや！別に」

「お前が遅いだけだよ。ほら、さっさと着替える。俺たちは先に言  
ってるからな。行くぞ、シャルル」

「う、うん」

そう言って悠夜とシャルルは更衣室を出て行った。

「お、俺を見捨てないでくれー！！」

そのあと授業に遅れた一夏は千冬の制裁をくらった。

くグラウンドく

「本日から実習を開始する」

『『『はい！』』』

千冬の言葉にさつき授業に遅れた一人を除いた生徒は元気よく返事をする。

「まずは戦闘を実演してもらおう。鳳！オルコット！」

「はい！」

「専用機持ちならすぐに始められるだろう。前に出ろ」

「めんどいなあ〜なんであたしが・・・」

「は〜、なんかこういうのは見世物みたいで気が進みませんわね・・・」

「お前ら少しはやる気を出せ。あいつにいいところを見せられるぞ」

「はっ！」

千冬がそうつつぶやくと二人は目を見開く。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリアオルコット」

の出番ですわね!」

「実力の違いを見せるいい機会よね」

そしてやる気0から一気にMAXになる。その様子に皆少し引いている。

「それでお相手は？鈴さんとの勝負でもかまいませんが」

「ふん、こっちのセリフよ。返り打ちよ」

「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は・・・」

「きゃあああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！どいてくださー！ー！ー！ー！ー！」

鈴音たちの言葉に千冬が答えようとすると上から声が聞こえた。

「やつ、山田先生!？」

よく見ると山田先生がISを展開させてるのに何故かグラウンドに落下してくる。

「ちよつ、なんで俺んここに、ぎゃー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

そしてこれまた何故かピンポイントで悠夜のところに落下し、悠夜は先生を押し倒す格好で倒れた。

「うわっ！先生すみませ〜《チュン!》・・・え?・・・」

「うふふふふふ・・・。おかしいですわね・・・ちゃんと狙ったつも

りでしたのに」

悠夜が光のごとく先生から離れ謝ろうとするとセシリアが黒い笑顔を浮かべビームを打ってきた。

「セシリア！なんで……ってっわ！」

「悠夜……！」

今度は鈴音が双天牙月を連結させ、何の迷いもなく悠夜の首目掛けて投擲した。

「げっ、これは……」

流石の悠夜もISを展開させてない状態ではISには勝てない。悠夜は直撃を覚悟した。その時、

ダン！ダン！

銃声がした方向を皆を見るとアサルトライフルを構えた山田先生が的確に双天牙月の両端を撃ち抜いて軌道を変えた。

「大丈夫ですか？黒川君？」

「あ、はい……有り難うございます……」

そのあと鈴音たちが山田先生にボッコボコにされたあと、専用機持ちの生徒がグループリーダーになって実習をした。そして今は昼休み。授業の時に悠夜は筥に昼食に誘われていたので屋上にいる。しかし……

「で、何で皆がいるんだ」

箒は暗い顔で悠夜を睨んでいた。

「なんでって、大勢で食べたほうがうまいだろ？」

「それに、シャルルは転校してきたばっかで右も左も分からないしな」

「……それはそうだが……」

それでも箒は悠夜を睨む。

「ま、さっさと食おうぜ。食べた後即座にダッシュは正直きつい」

「ああ、そうだな。じゃあ……」

「……………いただきます」「……………」

そしてみんなは弁当箱を開いた。

「お、箒の弁当つまそうだな。ちょっと食っていいか？」

「い、いいけどでも取ってくれても……」

そう言っつて箒は悠夜に弁当箱を渡す。

「じゃあ、このから揚げを……んん！これうまいな！手が込んでる！」

「味付けはシヨウガと醤油、おろしニンニク、それにあらかじめシヨウを混ぜてある。隠し味には大根おろしが適量だな」

「へー凄いな」

「こ、これくらい普通だ」

そんなことを言っているがぶっきらぼうな口調の箸はてれてれと頬を赤くしている。

「あ、あれ、なんでそんなに怒ってるんだ？お前ら」

「知らない。（せつかく悠夜と二人つきりに食事かと思ったのに・・・）」

「なあ、なんでだ？」

「ま、考える（なよ）」

何故か怒っている二人に意味不明の言葉を言う一夏とシャルル。悠夜はもう何回出したかわからないハテナマークを頭に出した。

第七話 男！？（後書き）

ラウラとの戦いまでもう少しかかります。



## 第八話 シャルルの理由と悠夜の過去の一部（前書き）

なんとか出来た。シャルルの正体がばれるパートを早くしました。早くフラグを立てたかった。それじゃあ、始まります。

## 第八話 シャルルの理由と悠夜の過去の一部

「は、今日も疲れた」

悠夜は心底そう思って同じ部屋で緑茶をすすっているシャルルにそう言った。

「紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じ・・・でもおいしいよ」

「そうか。そいつはよかった」

悠夜もお茶をすする。

「悠夜はいつも放課後一夏の特訓してるって聞くけど本当なの？」

「ああ、あいつは他のみんなから遅れてるからな」

「僕も入れてもらっていいかな？専用機もあるから役に立つと思うんだけど・・・」

「ああ、是非頼む。・・・その男のフリをやめたらな」

「・・・え？」

悠夜は真剣な目でシャルルを見つめ、シャルルは目を見開き表情は固まる。

「な、何言ってるの？ぼ、僕は男だよ？変な冗談言わないでよ、あ

は、あははは……」

「なんで男のフリをしてたんだ」

悠夜はなおシャルルを真剣な目で見る。

「だ、だから僕は男だって、もう一度聞く。なんで男のフリをしてたんだ」……」

シャルルは固まったまま何も言わなくなった。

「……はあ、結構上手に男になれたと思ったんだけどな。……なんでわかったの？」

数分黙った後シャルルがついに口を開いた。

「お前を抱えたとき男の感じがしなかったし、反応が女の子だったし」

「言葉遣いとか仕草は練習したんだけど……」

シャルルはハハハと頬を掻く。

「ま、気づくのは俺ぐらいさ。一夏は気付いてないみたいだから安心しろ」

「うん、それで男装の理由だよね……実は親にそうしろって言われたんだ……」

「お前の親って言うと、デュノア社の……」

「そう。デュノア社社長直々の命令でね・・・」

「命令って・・・実の娘にか？」

「僕はね悠夜、社長の本妻の子じゃないんだよ」

「は？どういう・・・ああ、」

悠夜はシャルルの表情を見て察したのか苦虫を噛み潰したような顔をする。

「・・・愛人か・・・」

「うん。父とはずっと別々に暮らしてたんだけど、二年前に引き取られたんだ」

「母親は？」

「亡くなった。それでデュノア社の人を迎えに来てね、いろいろ検査を受ける過程でIS適性が高いことが分かった。非公式ではあるけどテストパイロットをやることになったんだ。でもね、父に会ったのはたったの二回だけ。話をした時間は一時間にも満たないかな・・・そして、」

「デュノア社の経済危機・・・」

シャルルはゆっくりうなずく。

「所詮リヴァイヴは第二世代、第三世代型の開発には着手している

んだけど、なかなか形にはならなくて……このままだと開発権が剥奪されちゃうんだ」

「そしてお前は男装してこの学園に入るよう命令された。……さしずめ広告か……」

「……それだけじゃないよ」

シャルルは言いにくそうな表情をしそのまま黙った。悠夜は多少予想はしていたのかシャルルが言うのであるう言葉を言う。

「俺の黒神と一夏の白式のデータを盗め……か」

「……本当にごめん……」

シャルルは頭を下げ、消え入りそうな声で謝罪をした。

「頭上げるよ、シャルル」

悠夜はシャルルの親に対する怒りを抑え、出来るだけ優しい声でシャルルに言う。

「……怒ってないの？」

シャルルは目に涙を浮かべ今にも泣きそうな声そう言い悠夜を見る。

「怒ってるさ。お前の親にな……それでお前はどうしたいんだ？」

「え、どうしたいって言われてもなあ……。悠夜にばれちゃった

から本国に戻されるのが落ちかな？　それで代表候補生も下ろされて、牢屋に入れられる・・・と思うよ」

シャルルは力なく笑う。しかしその言葉を聞いた悠夜は、

「あつそ。お前はそれでいいんだ」

とても冷たい目でシャルルを見た。

「え？」

「何『私は不幸です』みたいな顔してんだ。お前より不幸なやつはこの世にはたくさんいるんだよ。分かっただらさっさと出てけ。そして牢獄に入れられて惨めな生活をすりゃいいさ」

するとシャルルは突然悠夜を殴った。

「君に何がわかるってゆうんだよ！いきなり呼び出されてテストパイロットにされて、本妻の人に『泥棒猫の娘が！』って殴られて！父親にいきなり男になれて命令されて！それでも僕は生きるためには父親に命令されるしかなかったんだよ！それ以外に僕はどうすればよかったのさ！」

今まで抱え込んでいた感情を一気にさらけ出すようにシャルルは叫ぶ。

「何甘いこと言ってるんだよ！！！」

「！！！！！！！」

突然叫んだ悠夜にシャルルは驚く。

「なんでお前はお前の親父が用意した結末に従ってんだよ！抗えよ！抵抗しろよ！戦えよ！そんなんでも自分の人生を簡単に諦めるんじゃない！！」

悠夜は思いつきりシャルルの肩をつかみ怒鳴る。

「お前の命はお前のものだ！親父のもんじゃない！！！」

「うっ、うわああああああああ！！！！！」

悠夜が言い終わるとシャルルは悠夜に抱きつき大声で泣き始める。

「思いつきり泣けばいいさ。抱え込んでたもん全部、すつきりするまで」

そうしてしばらく悠夜はシャルルの頭をなでていた。

「落ち着いたか？」

「うん・・・ごめんね、制服汚しちゃって・・・」

「かまわないさ。俺もごめんな、怒鳴ったりして」

数十分シャルルは泣いた。悠夜はその間ずっとシャルルの頭をなでていた。

「いいよ。それよりどうしよう・・・戦ったってどうしたらいいか」

「ま、ゆっくり考えればいいさ」

悠夜はシャルルの頭をなでながら言う。

「ゆっくりって・・・そんな時間は」

「大丈夫。『特記事項二十一、IS学園に在学してる生徒には外部からの介入は原則として許可されていない』これでお前の親父はこの三年間は手出しできない。だからゆっくり考えろ。それでも駄目だったら俺がお前の居場所になってやるよ」

そう言っただけ悠夜はほほ笑んだ。

「ありがとう・・・でも、なんで僕にあんなこと言ってくれたの？」

シャルルがそう言っただけ悠夜は突然暗い顔になり天井を見た。

「・・・俺はさ、親友と親を殺された」

「・・・え？」

悠夜の言葉にシャルルは絶句した。自分も母親を亡くした。しかし病氣と殺害ではわけが違う。しかも両親に親友。今のシャルルでも



耐えられないことだった。

「犯人は亡国機業。目的はその時唯一ISを動かせた男の誘拐」

「それって……」

悠夜は無言でうなずく。

「そう、俺だ。でも俺は何もできなかった。だから俺をかばったみんなが殺された」

「（だから誓った。もう二度と『仲間には手出しをさせない』と……）」

悠夜は心の中でそうつぶやく。

「そんな……こと……」

シャルルは口に手を当て、目には涙を浮かべそういつ。

「な、なんでシャルルが泣くんだよ。そりゃあ、つらかったけど、俺から言わせりゃ一夏の方がよっぽどひどいぜ。ま、どうせ一夏は『悠夜の方がひどい！』っていうんだろうけどな……」

そう言っつて悠夜はパンパン！と手を叩いて席を立つ。

「さ！俺の話は終わり！シャルルまだ飯食ってないだろ？まだあるかどうかわからないけどもらってくる」

「え、悪いよ。僕が持ってくるよ」

シャルルはそう言い席を立つが悠夜によって無理やり座らせられる。

「お前は少し人に頼るってのを覚えろ。遠慮してばっかだと損するぜ？」

「そ、そう？ならお願いしようかな・・・」

「了解」

そして悠夜は部屋を出て行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・自分の命は自分の命のもの・・・か・・・」

悠夜が部屋を出た後シャルルは悠夜に言われたことを思い出す。

「何の恥ずかしげもなくそんなことが言えるからみんな惚れちゃうのかな・・・・・・・・僕みたいに／＼／＼」

シャルルは自分の顔に血液が集まるのが簡単に分かった。すると、

「た、ただいま・・・」

「お帰り・・・ってどうしたの悠夜？」

悠夜が少しげんなりして帰ってきた。

「ああ、ちよつとセシリアと篝がな・・・。それより飯もらってきたぜ。これしかなかったけどごめんな」

そう言っつて悠夜は机に魚の定食を置く。

「ありがとう。いただくよ。……うっ、」

早速食べようとしたシャルルだが定食を見ると一瞬にして固まった。

「どうした？」

「いつ、いや……」

シャルルは割り箸を割り、定食を食べようとしたがなかなか食べられない。

「箸苦手なのか？」

「練習してはいるんだけどね……」

そうは言ってるもののシャルルはまったく魚が食べられていない。

「悪いな。フークもってくる」

「あ、いいよ。頑張るから」

シャルルがまた遠慮したので悠夜は呆れたような声で言った。

「まーた遠慮してるな。お前は甘えることを覚える。まずは俺からだ」

「う、うん……それじゃあ、」

「ああ、行ってくる……ん？」

悠夜がフォークを取りに行こうとするとシャルルが何故か悠夜の服をつかみもじもじさせていた。

「あの……ゆ、悠夜が食べさせて／＼／＼」

「……へ？」

悠夜はいきなりのことに関抜けな声が出る。

「甘えていいって言うから……だめ／＼／＼？」

「うっ……」

いくら悠夜が破壊的な鈍感だからといっても男は男。こんなふうの上目づかいをされたら断る術はない。

「よ、よし！俺も男だ！二言はない！……えっと、それじゃあ、あ……ん」

「あ、あ……ん／＼／＼」

そして悠夜の運んだ魚がシャルルの口の中に入る。

「ど、どうだ？」

「うん、おいしいよ／＼次はご飯がいいな」

「よしてきた。あ……ん」

「あーーーーーん／／／」

そうして悠夜とシャルルのあーーーーーん合戦は食べ終わるまで続いた。

「えーっとー、き、今日もうれしいお知らせがあります。また一人、クラスに新しいお友達が加まりました。ドイツから来たラウラ・ヴォーデヴィツヒさんです」

朝、悠夜たちのクラスのSHRが始まり山田先生がそう言うと山田先生の隣にいた銀髪で片目が灼眼。片目は眼帯の少女が口を開いた。

「ラウラ・ヴォーデヴィツヒだ」

「い、以上ですか？」

あまりに短いので山田先生は少し困った顔で言った。

「異常だ。……貴様が！」

ラウラは一言そう答えると一夏を睨む。そして一夏に近づいて行き、突然一夏の頬をはたこうとした。・・・が、

パシッ！！

「ドイツじゃ初対面のやつ顔をぶてって教えられるのか？怖や怖や・  
・・・」

悠夜がギリギリのところで受け止めその手首をかなりの力で握る。

「っ！？、離せ！！！」

「っと。これはちょっとO H A N A S I Iしないといけないな・  
・・・」

ラウラは悠夜のほんの少しの殺気に一瞬びっくりしたような顔をしたがすぐに口をへの字に曲げて悠夜の手を払いのけようとするがなかなか離れない。

「やめておけ、黒川。面倒事に巻き込まれたいか」

「へ〜い」

千冬が席に座れとでも言いたそうなジェスチャーをしながらそう言ったので悠夜は素直にラウラの手首を話し席に座った。

「黒川？・・・！、お前黒川悠夜か！！！」

「？、なんでお前が俺の下の名前まで知ってたんだよ・・・」

悠夜はめんどくさそうな目でラウラを見たが、ラウラは逆に一夏の時よりも鋭い目つきで悠夜を睨む。

「私は認めない。貴様たちがあの人の弟と弟子であることを……  
・認めるものか!！」

「はぁーーーーー、また面倒なことになりそうだ……」

悠夜はため息をつきながらそう言い、朝のSHRは終了した。





第九話 盗み聞きはバレたらだめよ（前書き）

結構早く完成した。前回あとがきで出した「とにかくなんか話そうぜ」のコーナーは週一で出そうと思います。感想、意見、質問、募集します。

## 第九話 盗み聞きはバレたらだめよ

「こうズバー！つとやってから、ガキン、ドカーンというやつだ！」

「何となく分かるでしょー。感覚よ、感覚。はあ！？なんで分からないのよ馬鹿！」

「だからよー、俺と戦おうってー。そしたら分かるからさー」

「防御の時は右半身を斜め上、前方へ5度！回避の時は後方へ20度ですわ！」

「率直に言わせてもらおう・・・全然わからん！！悠夜は分かる分からない以前に戦ったら必ずコテンパンにされる！！」

今、一夏たちはグラウンドでISの実習で、一夏は悠夜たちにアドバイスをもらっているつもりなんだがまったくもって箒、鈴音、セシリアのアドバイスは役に立ってない。悠夜などアドバイスにもなっていない。

「なんだよー一夏ー。体で覚えたほうが早いだろー」

「お前と戦うと一方的すぎて勉強にならないんだよ！！」

そう、悠夜は手加減をしているつもりだがそれでも一夏には力の差がありすぎていつも最後はコテンパンにさしているのだ。

「お前が強くなりゃいいだろ」

「ひでえー」

「一夏、ちょっと相手してくれる？白式と戦ってみたいんだ」

悠夜と一夏がそんな漫才みたいなやり取りをしているとシャルルがいつもの男装の姿でオレンジ色のシャルル専用IS、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？を展開させ、こちらにやってきた。

「シャルル、分かった。というわけだから、またあとでな」

「ちっ、分かったよ。行くぞお前ら。ここじゃちょっと危ない」

「悠夜さんがそう言うならしかたありませんわね・・・」

「それじゃ行こっか」

「そうだな」

そう言っただけで悠夜たち四人はその場から離れて行った。そして一夏とシャルルの模擬戦が始まった。

「じゃあ、いくよ。一夏」

「おう。はあああー!!」

試合が始まるとすぐに一夏はシャルルに突っ込んでいった。しかしシャルルはそれをシールドで防ぎ上へ回避する。そしてシャルルはアサルトカノンを展開させ、一夏に撃つ。

「くっ!!」

一夏はそれをエネルギーシールドで防ぎ接近する。

「こんのー！ー！ー！！」

一夏はシャルルに一気に近寄り雪片で切りかかろうとするがシャルルは難なく避け、瞬時にアサルトカノンを連装ショットガンに変え、撃つ。

「うつ！、くつ！、」

一夏はなんとかシールドで防ぐが一夏のシールドエネルギーはどんどん削られる。そして・・・

「バーカ。あんなに直線的な攻撃、誰でも避けるっつーの」

「返す言葉もない・・・」

「あはは・・・それでね、一夏が勝てないのは単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

一夏はシャルルに負け、いまは悠夜とシャルルと一緒に反省会を行っている。

「うーん、分かってるつもりなんだけどなー」

「この白式って、後付装備イコシキイサがないんだよね」

「ああ、拡張領域バススロットが空いてないらしい」

「どーせワソフ・アビリティーに容量使ってるだろ」

「わんおふ？」

悠夜の言葉に一夏がなんだそれというような顔で繰り返した。

「ISと操縦者が最高状態の相性になったときに自然発生する能力のことだよ。一夏の白式で言うと零落白夜がそれかな」

一夏の疑問にシャルルが答える。

「はは〜ん。お前の説明って分かりやすいな」

「そんなことないよ」

一夏とシャルルがそんなことを話しているころ、セシリアたちは一夏の後ろの方に隠れていた。

「ふん、私のアドバイスは効かない癖に。(せっかく・・・)」

「あんなに分かりやすく教えてやったのに。(せっかく・・・)」

「わたくしの理論整然とした説明に何の不満があるんですの。(せっかく・・・)」

「(悠夜さん)にちゃんと教えられるんだってところを見せつけようと思ったのに いましたのに！！(！！)」

口では個々人違うことを言っているが、心の中では同じことを言っていた三人娘であった。すると、

『ねえ、ちよつとあれ・・・』

「ん？」

どこかの生徒が指さした方向を悠夜たちが見ると、そこにはラウラがラウラの専用IS、シュヴァルツエア・レーゲンを展開させ立っていた。

『うそ、ドイツの第三世代じゃない』

『まだ本国での実験段階だつて聞いていたけど・・・』

ラウラは口々にそんなことを言う生徒を無視し、悠夜と一夏の方を見る。

「織斑一夏、そして黒川悠夜。貴様らも専用機持ちだそうだな。ならば話が早い、私と戦え」

「いやだ。理由がねーよ」

「俺もパス。もうすぐクラスリーグマッチがあるから別に今じゃなくてもいいし」

「・・・ならば・・・」

するとラウラは右肩に装備してある大型レールカノンをいきなり二発それぞれに向けて発射した。

「おー、怖っえ。それにしてもいきなり大型レールガンをぶっ放すなんて……」

「ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね！」

しかしそれはシャルルが一夏の方をシールドで防ぎ、悠夜は自力で防ぐ。

「フランスの第二世代アンティークごときで、私の前に立ちふさがるとわな……

」

「いまだに量産化のめどが立たねー第三世代ルキーよりは動くだろ」

悠夜とラウラ。互いに殺気を出し合ってけん制していると、

『その生徒！ いったい何をしている！』

騒ぎを聞きつけた教師が駆け付けた。

「ふん、今日のところは引いてやる」

ラウラはそういうとISを解除してピットの方に消えていった。

「一体どういうことだ！？ 悠夜！」

「あの方とあなたにいったい何がありましたの！？」

篤とセシリアは悠夜に聞いたが、悠夜は無言でピットの方を見ている。

「大丈夫？悠夜・・・」

「ん？ああ、全然大丈夫」

授業が終わり、更衣室。悠夜たちは着替えようとしていた。

「そう。じゃあ、僕は先に部屋に戻ってるね」

「ああ」

「ちょっと待てよ。シャルルっていつつも部屋でシャワー浴びてるよな」

シャルルが更衣室を出て行こうと背を向けた時、一夏は今まで疑問に思ってたことを口にした。

「え！？そ、そんなことないと思うんだけどな」

「そんなことあるだろ。たまには一緒に着替えようぜ！」

そう言ってシャルルの肩を組む一夏。

「い、いや・・・」



「そう釣れないこと言うなっセ、イーアーナーズーアーマー  
ー、キーアーック!!!!」ギャアーアーアーッス!!!!」

ついには泣き出しそうになったシャルルを見て、悠夜は一夏に借金執事の技を使った。

「まったく。女に手を出すとは一夏も堕ちたな。さ、これで数分はこっちの方には戻ってこないだろうからさっさと部屋に戻るこつた」

「う、うん……ありがとう」

シャルルは蹴り飛ばされヒヨコが頭に舞っている一夏を少し心配しながら更衣室を出て行った。

「ってー。なんであいついきなり俺を蹴り飛ばしたんだ？」

寮への帰り道、一夏は先ほどの悠夜に蹴り飛ばされた理由を考えていたが。なにぶん一夏の知らないことが理由なので答えは出ず、考えるのをあきらめまっすぐ寮の方へ進んでいると、

「答えてください教官！何故こんなところで!？」

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。ただそれだけだ」

ラウラと千冬が何かを話していたので一夏は木の陰に隠れ、千冬たちの話を聞いた。

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！？お願いです教官、わがドイツで再びご指導を！ここではあなたの能力は半分も生かされません！！だいたいこの生徒は、「そこまでにしとけよ。小娘」・・・！」

「少し見ない間に偉くなつたな。15歳でもう選ばれた人間気取りか。恐れいる」

「わ、私は！「寮にに戻れ。私は忙しい」・・・くっ！」

そうしてラウラは寮の方に走って行った。

「・・・その男子！盗み聞きか。異常性癖は感心しないぞ」

「なんでそうなるんだよ！千冬姉え！「学校では織斑先生と呼べ」・・・はい・・・」

ラウラが走って行った数秒後、千冬は急に一夏の方をみて言った。

「下らんことをしてる暇があったら、自主訓練でもしろ。このままでは、来月の個人リーグでは初戦敗退だな」

「分かってるって。それより、あのラウラが言っていた俺のこと、千冬姉えの弟とは認めないって、あれってやっぱり、俺のせいで千冬姉えが二度目の優勝を逃したこと・・・「終わったことだ。気に病む必要はない」・・・でも」

「でもじゃない。お前も早く寮に戻れ。じゃあな」

そう言って千冬は自分の目的地に向かって行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・やはりお前も盗み聞きか。黒川・・・」

「あれー、気配は消したと思ったのになー」

しばらく千冬は歩いた後夕日でより一層暗くなっている木陰に向かってそう言つと、木陰から悠夜が気楽な声を出して出てきた。

「お前の気配に気付かない私だと思つたか？」

「へいへい、恐れ入りました。・・・で、一夏が嫌われてる理由は分かつた。第2回モンド・グロツソ。ISの世界大会。その決勝戦、一夏は何者かによってさらわれた。そして決勝戦をほっぽつた千冬さんが助けた。当然千冬さんは不戦敗。そして情報提供したドイツ軍に借りを返すため一年とちよと、軍のIS部隊の教官をした。そして中でも慕っていたラウラが千冬さんの唯一の汚点の原因、一夏を恨んだ。けど、なんで俺が嫌われてるんだ、千冬さん？」

悠夜は急にまじめな顔になりそう言った。

「それは私の責任だ。私が教官をしていたころ、ラウラにお前のことと言つたんだ」

「なに言つたんだよ。俺が恨まれるくらいのこと言つたんだろ？」

悠夜はさっきの真剣な顔とは打って変わって気楽そうな笑みを浮か

べる。

「それはラウラに聞くんだな。少なくとも私から言つつもりはない」

「ちえっ、まあいいや。トーナメントでラウラぶっ潰したらあいつに聞くぞ」

「ぶっ、したいようにすればいい」

そう言っただけはいつの間にか暗くなっていた道を歩いて行った。

「それは本当なんですの!？」

「嘘ついてるんじゃないでしょっね」

『ホントだつてば!この噂学園中でもちきりよ?今月の学年別トーナメントで優勝したら織斑くんか黒川くん、デュノアくと付き合えるらしいのよ!』

「「「そ、それは悠夜も承諾済みなの( )ですか( )か( )!？」」」

『それがね、本人たちはよくわからないらしいの』

「「「ぎゅじゅ」とっ」「」

『つまり女の子の中だけの取り決めて事らしいのよ』  
プシュー。

「「「おはよう」「」

「「「「「えっ！」「」

朝、悠夜と一夏とシャルル。三人がそろって教室に入ると、この前よりさらに騒がしい教室に悠夜が呆れた。

「まーたなんかの話で盛り上がってんなお前ら。いい加減教えるよー」

「仲間はずれはひどいよな」

「何の話してるの?」

「「「「いやー！」「」

悠夜、一夏、シャルルがこの話題に入ろうとすると女子たちは一斉に逃げに行った。

「じゃあ、あたし自分の教室にも戻るから」

「そ、そうですね。わたくしも自分の席に・・・」

そう言って鈴音とセシリアもその場から離れて行った。

「……僕、嫌われてるのかな……」

「それを言うなら俺たちも一緒だろ」

「なーんで隠すのかなー」

悠夜たちはその場に立ち尽くすのであった。

「（なぜだ……）」

屋上。そこには黒髪でポニーテイルの少女、箒がいた。

【わ、私が優勝したら………付き合ってもらおう………！  
！！】

「（という話がなぜ……）」

【今月の学年別トーナメントで優勝したら織斑くんか黒川くん、デ  
ユノアくん付き合えるらしいのよ！】

「（という噂になるのだ。しかも一夏とシャルルまで巻き込んでし  
まってるし………はぁー」

第は大きなため言いをついた。

「（優勝したら悠夜と付き合えるのは私だけのはずだ／＼！と、とにかくだ。私が優勝すれば問題ない。・・・優勝すれば・・・）」

くアリーナく

「あら？」

「ん？・・・早いわね」

「てつきりわたくしが一番のりだと思っていましたのに」

「あたしはこれから学年別トーナメント優勝に向けて特訓するんだけど」

鈴音は今ここに自分以外一人しかいない人間、セシリアに向けて少し怒気のかかった声で言う。

「わたくしも全く同じですわ」

しかしセシリアは全くひるまずに言葉を返していく。

「この際どっちが上かこの場ではつきりさせておくっても悪くないわね」

鈴音は腰に手をあて、仁王立ちで言う。

「よろしくってよ。どちらがより強く優雅であるか、この場で決着をつけてあげますわ」

セシリアはブルー・ティアーズを展開させながら言う。

「もちろん、あたしが上なのは分かり切ってることだけど」

鈴音も甲龍を展開する。

「うっふ。弱い犬ほどよく吠えると言うけれど、本当ですわね」

「どづいという意味よ」

「自分が上だつてわざわざ大きく見せよ言つとしているところなんか、典型的ですもの」

「その言葉、そっくりそのまま帰してあげる!!!」

そう言つて鈴音は双天牙月を構え、セシリアに突っ込もうとした。その時、

ドカーーン!!!

「!!!」

いきなり横からレールガンが放たれた。二人がその放った人物を見るとそれはシュヴァルツァ・レーゲンを展開させたラウラであった。



「ラウラ・ヴォーデヴィツヒ・・・」

「一体どういうつもり!?いきなりぶっ放してくるなんて、いい度胸してんじゃい!」

「お前らのようなやつが私と同じ第三世代の専用機持ちとわな・・・。数ぐらいしか能のない国と古いだけが取り柄の国は余ほど人材不足と見える」

「この人、スクラップがお望みみたいよ!!!」

鈴音は甲龍の最終安全装置を解除して言った。

「そのようですわね!」

セシリアもブルー・ティアーズの最終安全装置を解除した。

「ふん、二人ががかりで来たらどうだ。下らん種馬を取り合つような雌にこの私が負けるものか」

ラウラのその言葉に二人の怒りは限界を超えた。

「今何て言った!私!私の耳にはどうぞ好きなだけ殴って下さいって聞こえたけど!!!!」

「この場にいない人間の侮辱までするなんて、その軽口二度と叩けぬようにして差し上げますわ!!!!」

「ぶっ、とつとと来い」

「上等(ですわ)!!!!!!」

そう言っつてセシリアと鈴音はラウラに突っ込んで行った。

「悠夜、今日も一夏の特訓するんだよね？」

「ああ、今日は射撃の回避の特訓かな」

「うげえ、あれっつて難しんだよなー」

「弱音なんてはいてないで少しは努力し」第三アリーナで代表候補生三人が模擬戦やってるんだって!!」・・・三人？」

悠夜たちがアリーナに向かう途中話しているとどこかの生徒がそんなことを言った。悠夜は「三人」というところに引っ掛かり考え始めた。

「(三人?この場にはいない代表候補生は中国とイギリスの鈴音とセシリア。フランスのシャルルはここにいるしあとは・・・)」  
ドイツ!!!!!!」

「どうしたんだよ悠夜。いきなり大声出し」いくぞ一夏、シャルル!鈴音たちが危ねえ!!!」お、おう、分かった!!!」

そう言っつて悠夜たちは鈴音たちが戦っている第三アリーナへと走っ

て  
行っ  
た。

第十話 悠夜、若干キレる（前書き）

遅くなりました。すみません。

## 第十話 悠夜、若干キレる

「箒!」

「悠夜!何があつたのだ!？」

「話は後だ!行くぞ!!」

悠夜と一夏とシャルルは途中で箒と合流すると全速力でアリーナに走って行った。

「鈴音!セシリア!」

ドーーーーーン!!

「何してるんだあいつら!!」

四人がアリーナに着くときにはもうすでに二人はボロボロで首をワイヤーブレードが絞め、ラウラに殴り倒されていた。

「ひどい!あれじゃシールドエネルギーが持たないよ!」

「もしダメージが蓄積し、ISが強制解除されれば二人の命にかかわるぞ!」

その間も鈴音とセシリアはラウラに殴られ装甲が破壊されていた。

「やめろ、ラウラ！くそ！悠夜、なにか手は「なあ、一夏・・・」なんだよー！」

「あいつって、殺してもいいんだよな？」

「「「！！！！！！」」」

悠夜のその一言にその場の三人を凍りつけた。

「ま、止めても殺すけど」

悠夜は光の無い目でそう言つと黒神クンネ・カムイを展開させ遮断シールドを簡単に破壊しアリーナへ入って行った。

「おい悠夜！待ってて！！くそっ！！！」

一夏の言葉は悠夜には届かず一夏は悠夜のあとを追った。

「ふっ、こんなものか。やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツア・レーゲンの前では。「おい」！？、ガハ！！！！！」

ラウラは混乱した。なぜなら、まったく気配を感じず突然背後に悠夜が現れ殴り飛ばされたからだ。

「「悠夜（さん）！！」」

「よう、お前ら。無事か？」

「つかまれ！」

悠夜は二人に絡みついてしているワイヤーブレードを切り捨て、一夏が二人を安全な場所に運んだ。

「い、一夏……」

「ぶ、無様な姿をお見せしましたわね……」

「別にいいさ。それより良かった。意識はある」

「貴様あ！よくも」うるせーよ」「ぐっ！！」

殴り飛ばされたラウラは起き上がるがまたしても悠夜に殴り飛ばされる。

「てめえ、うちの友達ダチに手え出してただで済むと思うなよ」

「ふん、さつきは不意を突かれただけだ。いくらお前でもこのAI慣性停止の前では敵ではない」

「寝言は寝て言え」

そう言っつて悠夜はクレイモアを展開させラウラに突っ込むがラウラはAICを発動させ止まる。

「ふん、やはりお前もこの程だ」「ざけんじゃねーよ」「な！！」

しかし悠夜は一気にクレイモアを振りおろしAICを切り裂いた

「A I Cを切り裂いただと!? がっ!!」

ラウラは驚く暇もなく手足に悠夜のファンゲビットが突き刺さり自由を奪われる。

「終わりだ。……死ね……」

悠夜はクレイモアでとどめをさす。その時、

ガキーン!!!

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬さん。それは人間のすることじゃないよ」

千冬が打鉄の刀をISを展開させずに持ち、悠夜のクレイモアを防いだ。

「だまれ。模擬戦をやるのはかまわん。だが、アリーナのバリアまで破壊する事態にならねば教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントで付けてもらおうか」

「教官がそうおっしゃるのなら」

そう言ってラウラはISを解く。

「織斑、デュノア、それに黒川。お前たちもそれでいいな」

「は、はい」



「本当なら今すぐ殺してやりたいけど。命拾いしたな、ラウラ」

「ふん、お互いにな」

「では、学年別トーナメントまで、私闘を一切禁止する。解散!」  
そうしてこの戦いは学年別トーナメントまで持ち越しになった。

「別に助けられなくて良かったのに」

「あのまま続けていれば勝ってましたわ」

ここは保健室。鈴音とセシリアの二人はいたるところに包帯をしてベットに横になっていた。

「あのなあ、どこに首を絞められ、今にも負けそうなやつを助けない薄情な仲間がいるんだよ」

「まったくだ。お前はやりすぎだけだな」

「うるせ」

悠夜の言葉に一夏がつっこむ。

「そんな今にも負けそうだななんて！」

「全然そんなんじゃないわよ！」

「まあまあ、二人とも無理しちゃってー」

二人が悠夜にそう言っているとシャルルがお茶を持って来た。

「無理って？」

「二人とも、好きな人に恰好悪いとこ見せちゃって恥ずかしんだよね」

「「なな、ななな何を言ってるのか、全然わからないわね（わかりませんわ）／／／！！」」

シャルルは悠夜だけに聞こえない声でそう言うと二人は面白いように慌てた。

「ああ、なるほどな。さしずめ悠夜のこと侮辱されたから戦ったん、ダガツ！！！！」

シャルルの言葉が聞こえた一夏は戦うことになった理由を理解し言おうとしたが鈴音とセシリアがいきなり頭を殴ってきた。

「あなたはほんとに一言多いわよね！」

「そうですね！まったくです！」

「だからってなんで殴るんだよ！？」



ものとする……か。なんだこれ」

悠夜は呆れたようにそう言ったが彼女たちはまじめな目であった。

『とにかく、私と組もう。織斑君』

『黒川君は私と』

『あ、ずるーい。黒川君は私とよー』

『デュノア君、私と一緒に組もう』

「悪いな。俺はシャルルと一緒に組むことになってんだ。一夏は捧げるから」

一夏は目を見開いてこちらを見る。

「悠夜!？」

『じゃあ織斑君!』

『織斑君!!!』

「悠夜てめえ覚えてろよー!!!」

「さ、行くぞ。シャルル」

「う、うん」

一夏は女子の波に吞まれ悠夜とシャルルは保健室を出て行った。

「あ、あのね。悠夜」

「ん？」

寮への帰り道、悠夜はふいにシャルルに話しかけられた。

「どうした？シャルル」

「あの、遅くなっちゃったけど・・・助けてくれて、ありがとう」

「ん？俺って何かしたか？」

「ほら、保健室で・・・」

「ああ、あれか。お前が誰かと組んで女だつてばれたらおおごとだもんな」

悠夜は保健室での出来事を思いだし、笑いながら言う。

「でも、あの時すごくうれしかったんだ。悠夜って優しいね」

「そうか？」

「うん！」

シャルルは笑顔で言った。

「そういやシャルル、別に俺と二人っきりのときは男の口調じゃなくていいんだぞ？」

悠夜は部屋に帰るとシャルルにそう言った。

「うん。でもここに来る前男の口調とか仕草とか徹底的に教え込まれたからなかなか抜けないんだ。でも、悠夜が言うなら女口調にするけど……」

「いや、無理してでもすることないさ。それに男口調でもシャルルは十分可愛いさ」

悠夜の言葉にシャルルの顔が一気に赤くなる。

「か、可愛い／＼／！？僕が？うそついてない？」

「お前にうそついてどうするんだよ。ほら、さっさと着替えるよ。俺は部屋出ておくから」

悠夜はそう言って部屋を出ようとするがシャルルが服をつかみ部屋を出れない。

「あー、シャルルさん？何をしてらっしゃるんでせうか？」

「い、いや。悠夜はここにいて。ほら、男同士が着替えるのに一々部屋を出るのは怪しいと思われるから……ね？」

「そうだけど……その……」

「悠夜は後ろ向いてて。その間に着替えるから気にしないで」

「いや、そう言われても気にするんでせうが……」

「も、もういいから早く後ろ向く……」

「は、はいっ！」

悠夜はそう言って後ろを向き着替え始める。まあ、お互い相手を見ないし大丈夫か。悠夜はそう思った。しかし、

「うわ……」

「どうした！？シャツ／＼！！！！！！」

見てしまった。シャルルのピンク色の下着を。

「いたた、足引っ掛かっちゃった……はっ……」

「み、みみみ、見てないぞ……何にも見てない……」

「嘘だ……」

「ひぐらしみたいにするな！俺は何にも見てない！」

「下着の色は……」

「ピンク……しまった！！！！！！」

悠夜は錆びたブリキの擦れるような音を奏でらがらゆっくりとシャルルの方を向くと、そこには真っ黒いオーラをまとったシャルルがいた。

「ふふふふふふふ、悠夜は少し O H A N A S I I しないといけないね」

「い、いいい……」

イヤ――――！！！！！！

悠夜の叫び声は寮中に響いた。

「まったく……悠夜ったら」

夜。もうすでに寝ている悠夜のベットにシャルルは座って悠夜の寝顔を見ていた。

「うう、ゴメンネサイゴメンナサイゴメンナサイ……」



「うわっ、寝言で謝ってる……そんなに怖かったのかな。ごめんね。ちゃんと言ってくれたら……僕は……別に……／＼／＼／」

そう言うとシャルルは顔を真っ赤にさせ自分のベットにもぐりこんだがしばらくした後またベットから出て悠夜の方に向かい、

「おやすみ。悠夜」

悠夜の額にキスをし寝た。

「一夏、早く着替えるよ」

「分かってるって」

学年別トーナメント当日、悠夜とシャルルは準備万端。一夏はまだ着替えていた。ちなみに結局箒と組むことになった。

「それにしても凄いなこりゃ」

一夏はモニターを見て着替えながらもそういう。

「三年はスカウト、二年は一年間の成果の確認、一年は有能な操縦者のマーク。そりゃあもうお偉いさんがぞろぞろとご苦労なこつた」  
悠夜もモニターを見る。

「悠夜と一夏はヴォーデヴィツヒさんとの対戦だけが気になるみたいだね」

「まあな、一夏、どっちが当たっても恨みっこなしだからな」

「当然」

そう言つて二人は笑いあう。

「あ、対戦相手が決まったみたいだよ！」

するとシャルルが言った通りモニターにはトーナメントの対戦相手が表示されてあつた。

「え！」

「な!？」

「悪いな一夏、あいつは俺が叩きのめすぜ」

偶然かそれとも千冬のせいか【一回戦、黒川悠夜：シャルル・デュノアペア対ラウラ・ヴォーデヴィツヒ：名無しさんペア】と。

「ほう、一回戦であいつと戦えるなんてな」

「一回戦はあいつと対戦か・・・」

女子の更衣室ではラウラが、男子の更衣室では悠夜が不敵に笑っていた。

「黒川悠夜（ラウラ・ヴォーデヴィヒ）、お前は必ず・・・ぶっ潰す!!!」

二人の戦いは始まった。

## 第十話 悠夜、若干キレる（後書き）

次の『とにかくなんか話そうぜ』のコーナーは4月4日～7日の間です。感想、意見、質問、どんどん募集しています。

## 第十一話 ラウラVS悠夜（前書き）

新しく『ロスト・メモリー』世界を渡るもの』を連載しました！主人公の神坂帝が自分の正体を探すため、キーブレードを片手に世界を旅します！どうぞ見てください！！

## 第十一話 ラウラVS悠夜

「まさか一戦目で貴様と当たるとわな。待つ手間が省けたというものだ」

アリーナ。ラウラはISを展開させた悠夜とシャルルを同じくISを展開させて二人を睨んでいた。

「そりゃあよかったな。こっちも同じ気持ちだぜ」

悠夜もラウラを睨む。そして試合開始のカウントダウンが始まった。

5・4・3・2・1・

「叩きのめす!」

0!!

「シャルル、お前はあの女子を頼む!」

「うん!」

「うおおおおおー!」

試合開始のブザーが鳴ると同時に、シャルルはラウラのペアの女子の方へむかい、悠夜はクレイモアでラウラに切りつかかる。しかし悠夜はラウラのAICによって止められる。

「ふん、この間のようにAICは切り裂けんようだな」

「ふっ、だからどうした？」

「強がりを!!」

そう言つてラウラは大型レールカノンを構え悠夜に放つ。が、

「なに!？」

悠夜は自身のスラスターを広げ瞬間加速をし、レールカノンから逃れる。

「ほら、どうした？その程度の速さじゃ俺には当てられないぞ」

悠夜はラウラを挑発しながら流星のように向かってくるレールカノンとワイヤーブレードを避ける。

「くっ、ちょこまかと!」

ラウラはだんだん苛立っていく。それがいけなかった。

「ふっ、かかったな」

するとラウラの背後にファングビットが現れた。その数は四基。

「いつの間に!？」

「左右からの同時攻撃はAICじゃ防ぎきれねーだろ!!」







ラウラはほとんど自棄になって悠夜にワイヤーブレードを放つ。しかしまったく狙いの定まっていなかった攻撃に悠夜は倒せない。悠夜はラウラのワイヤーブレードをつかみ、ブレードをつないでいるワイヤーを切り裂いた。そしてダランと力なく垂れるブレードを意地悪く見せつけ、ラウラの大形レールカノンを指さす。

「それで、最後だな」

ラウラの中の何かが壊れた。

「舐めるなああああああ！！！！」

ラウラは瞬間加速で悠夜に接近し、レールカノンを放とうとする。  
だが、悠夜も瞬間加速を使いラウラの背後に回り込む。そしてクレイモアで砲身を切断。数秒後に爆発した。

「E i n s c h w a r z e s K a n i n c h e n . ( 終 わ り だ 、  
黒ウサギ ) 」

悠夜はそう言うつとラウラのシールドエネルギーを全て刈り取った。

「あー疲れた。早くシャワー浴びたいぜ」

「その前に一夏の試合を見ないと」

「ハイハイ」

ISを強制解除され、アリーナの床に横たわるラウラを一瞥し、悠夜はISを解除した。

「ま、あいつなら勝てるだろ。それより早くシャワーに」ああああああああああああああああ！！！！」「なんだ!？」

その時異変が起きた。

「（ここで私は負けるのか？こんな、こんなやつに……）」

「EinschwarzesKaninchen」（終わりだ、黒ウサギ）」

別れの言葉と同時に表示される『戦闘不可能』の文字。そしてこの上ない敗北感。

「（私は……私は負けられない!!）」

ラウラは消えていく自分のISの中、昔のことを思い出していた。

闘うために鉄の子宮から産み出された存在。遺伝子強化試験体C-0037。それがラウラ・ボーデヴィツヒと言う存在だ。どうすれ

ば人体を効率よく破壊できるか、どうすれば時間をかけずに敵軍を撃破できるか。それだけを覚えて生きてきた。彼女は優秀だった。それは彼女の戦闘訓練の記録が証明している。だが、ISという兵器の出現により、彼女は深い闇へと叩き落とされた。ISが全てを変えた。

『ヴォーダン・オージエ』

簡単な概要はこうだ。肉眼にナノマシンを移植して視覚信号伝達の速度向上、動体反射の強化。その処理を施された目は『越界の瞳』と呼ばれる。理論上では一切の危険を含まない、はずだった。だが、彼女の目は常に『越界の瞳』を発動した状態に陥ってしまった。そんな彼女を突き付けられたのは『出来損ない』の烙印。それが彼女をより深い闇へと引きずり込んでいった。そんな中、突然光は彼女に降り注いだ。

「今日からこの部隊の教官となった織斑千冬だ。言っておくが下らない理由で弱いままでいられるほど、私の訓練は易しくないから覚悟しろ」

織斑千冬という光。その光がラウラを部隊最強に変えた。

憧れた。尊敬した。敬愛した。ラウラの中で千冬は無くてはならない存在になった。

「どうして、そこまで強いのですか？どうすれば、強くなれますか？」

そんなある日、ラウラは千冬にそんなことを聞いた。しかし千冬の答えはラウラが期待していたものではなかった。

「私には弟がいる。それと弟子だ。弟の方はまだまだだが、弟子の方は私と互角。いや、今は私以上かもしれん」

「弟子が、師匠よりもですか？」

「ああ、今は何処をほつつき歩いているか知らんがな。あいつを見ていると、強さとはどうあるべきか、どう使うべきかがよくわかる」

「強さ……ですか……」

「今は分からなくていい。精々悩め。日本に来る機会があったらあいつに会うといい。そのころには帰ってきてるだろう。あと、弟子の方は惚れるなよ？ライバル多いぞ」

千冬はラウラがこれまで見たことがないような優しい顔でラウラに言う。しかしラウラは千冬とは逆に暗い顔をしていた。

「（違う。どうしてそんな優しい顔をするのですか。そんなのは私の尊敬する教官ではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのに……）」

だから認めない。許さない。教官をあんな風に変える存在を。そして自分が最もあこがれている存在が、自分よりも強いと言った存在を……。

「（私は、ここで倒れるわけにはいかないのだ。この手で黒川悠夜を叩きのめし、あの人が最強ということを証明するまで！）」

その時ラウラの中で何かがざわめいた。

「……願うか……汝、より強い力を、比類なき最強を……」

「（当然。あいつを倒すためなら、たとえこの命すらくれてやる。だから……力を、よこせ!!!）」

D a m a g e L e v e l . . . . . D

M i n d C o n d i t i o n . . . . . U p l i f t

C e r t i f i c a t i o n . . . . . C l e a r

boot  
《Valkyrie Trace System》  
……



「悠夜!!」

「来るんじゃないねえ!.....ゆるさねえ.....」

駆け寄るシャルルを制し、悠夜は怒気を放ちながらラウラだったものを押し返す。すると、

「離せ!今すぐあいつをぶっ飛ばす!!あれは、あの技は千冬姉えだけのものなんだ!!」

一夏がアリーナのピットまでやってきて今にもこちらに殴りこんで来そうなのを、篝やセシリア、鈴音が止めていた。

「落ち着け!一夏!」

「あんたが行っても足手まといになるだけよ!」

「うるせえ!とにかく一発殴らないと気が済まねえ!!」

悠夜はいまだに抵抗をしている一夏にプライベート・チャンネルで話しかける。

《その役目、俺に譲っちゃくれねーか?》

「悠夜!」

突然聞こえた悠夜の声に一夏は一瞬驚くが、すぐにまた抵抗を始める。

《あいつをぶん殴る役目、俺にやらせてくれねーか?》



「悠夜！俺は『やらなきゃいけない』をしに行くんじゃない。『俺がやりたい』ことをやりに行くんだ。こればかりは譲れない！！お前は悔しくないのかよ！！！！」

「悔しいに決まってるだろ！！！！」

「『『『『『！！！！』』』』』」

悠夜のいる位置と、一夏のいるピットの間がかなりあいているのもかわらず大音量で聞こえる悠夜の肉声にその場にいた全員が驚いた。

《お前の分までぶちかましてやるから、な？》

再び聞こえるプライベート・チャンネルでの悠夜の声。その声に隠れた悠夜の怒りが見てとれた一夏は、すっと抵抗をやめ、悠夜に話しかけた。

「……………思いっきりやれ」

《了解！》

そして一夏たちはピットからモニタールームへと帰って行った。

一夏が帰って行くのを確認し、悠夜はもう一度ラウラだったものを見た。

「こんなものが……」

悠夜の歯ぎしりの音が聞こえる。こんなものが千冬に似せたもの、それだけで腹が立つ。これは千冬の動きと武器を真似ただけもの。そこに意志はない。意志のない攻撃などただの暴力。贗作だ。そして何より、

「こんなものがお前の憧れた人の強さなのか！ラウラ・ヴォーデヴィツヒ！！」

その贗作に操られているラウラにも腹が立った。悠夜はビットを全てパージ。8基とも贗作に向かわせ、サイクロンを連結させた状態で撃つ。ラウラだったものはビットは避けるが、悠夜が撃ったビットはよけきれず腹部に直撃。

「贗作が調子に乗ってんじゃねー！！！」

腹部に亀裂が走り、瞬間加速で接近した悠夜がクレイモアでその亀裂を切り裂いた。一瞬だけ、ラウラだったものは動きが止まり、黒い装甲が切り裂かれる。

「あーあ、これじゃ殴れねーな。ま、一夏もこの状況なら殴れねーだろーし、いつか」

黒い装甲から出てきたラウラをかかえ、悠夜は困ったように笑った。

・・・どうしてお前は強い？

『強い？俺見たいのが強かったら千冬さんは化け物、いや、モンス  
ターか・・・』

・・・だが教官は自分よりお前の方が強いと言っていたぞ？

『げ、千冬さんそんなこと言ったんだ。別に俺は千冬さんみたいに  
強くないさ。だけど、』

・・・だけど？

『千冬さんを越える自信ならある』

・・・その自信はどこから来るんだ？その自信がお前の強さの源  
なのか？

『いや、違うね。俺には心に誓ったことがある』

・・・誓ったこと？

『「もう二度と自分せいで他人が傷つくのを見たくない」。これが俺の千冬さんを越える理由と俺の強さの源』

．．．自分のせいで他人が傷つくのを．．．

『だからこの黒神クンネ・カムイで誰かを守る。俺の全てを使って、俺の大切なものの全てを守る』

．．．それは、まるで．．．あの人のようだ。

『そうか？あ、お前に言うことがあったんだ』

．．．なんだ？

『俺の大切なもの、その中にお前も入ったからな』

．．．その瞬間、私の胸が熱くなった。

『俺が守ってやる。ラウラ・ヴォーデヴィツヒ』

．．．教官、あなたのおっしゃったこと、守れそうにありません。

これは．．．惚れます。

## 第十一話 ラウラVS悠夜（後書き）

悠「悠夜と！」

一「一夏の！」

悠「一「」とにかくなんか話そうぜ！」のコーナー！」

一「さあ！やってきました、このコーナー！」

悠「ノリノリだな・・・」

風「お前のテンションが低いだけだよ」

悠「うるせーよ、作者」

一「さ、気を取り直して、今回のゲストは、俺たち二人のファースト幼馴染！篠ノ之箒だ！」

箒「うむ、宜しく頼む」

一「箒は俺たちの中で唯一専用機持ちじゃないんだよな」

箒「う、うるさい！私だってそのうち専用機が・・・」

風「ま、そのうちな・・・」

悠「ん？なんか言ったか？」

風「いや、なんでも。それより感想が一つ来てるぞ」

一「お、そうだった。ペンネーム『ゆや』さん、スツゴく面白かったです。更新楽しみにしてるので頑張ってください。私的には千冬が好きなのでヒロインに入れて欲しいです。だそうだ。どうだ？作者？」

風「うーん少し難しいが、考えてみるか・・・」

一「だそうです。ゆやさん、有り難うございました！これからも、

感想・意見、などなど募集しています！どんどん送ってください！」

悠「じゃ、今日はこれくらいで、」

悠「一・箒」さよーならー！」

箒「・・・って、私今日来た意味あったのか？」

第十二話 シャルルの決意（前書き）

今回はちょっと文がおかしい・・・

## 第十二話 シャルルの決意

「……………ここは……………」

「やっと気づいたか」

保健室。ラウラはベットの横にいる千冬に気付いた。

「まったく、何か行事があると必ず誰かが保健室送りになる。あいつらにも困ったもんだ」

「……………何が……………あつたのですか……………」

ラウラは何かに力を欲したのは覚えている。しかしそこからは全く覚えておらず、唯一覚えているのは悠夜のあの言葉、

『俺が守ってやる。ラウラ・ヴォーデヴィツヒ』

あの言葉を思い出しただけでラウラの顔は赤くなり、鼓動が速くなる。

「？ どうした？」

「い、いえ、なんでも。それより……………」

「ああ、いちお重要案件である上に、機密事項なのだな。『VTシステム』は知っているな？」

「……………はい…」

『VTシステム』。正式には『ヴァルキリー・トレース・システム』。過去のモンド・グロツソの受賞者ヴァルキリーの武装・動きを複製するシステムトレース。今ではIS条約によって全ての機関がその研究・開発・使用の一切を禁止している。

「それがお前のISに何故か積まれていた」

「……………」

「精神状態に蓄積ダメージ。そして何より、操縦者の意志。いや、願望か……………それらがそろると発動する仕組みだったらしい」

ラウラは千冬の話は聞いているが、視線はずっとシートを握りしめている両手にある。

「ラウラ・ヴォーデヴィツヒ！」

「は、はい！」

突然大声で千冬に呼ばれ、ラウラは驚いて視線を千冬に向ける。

「お前はだれだ？」

「私……………私は……………」

「答えられないのなら丁度いい。お前は今日から『ラウラ・ヴォーデヴィツヒ』だ」



「え？」

ラウラはわけがわからないというような顔をする。

「お前は私にはなれない。ならお前はお前になれ。少なくともあと三年はこの学園に在籍しなきゃいけないんだ。しっかり悩めよ。小娘」

そう言っつて千冬は立ちあがり、保健室を出ようとする。

「それから、」

扉に手をかけた時、千冬は振りかえり、言った。

「お前、黒川に惚れたな？」

「な！？／＼／＼」

「ま、頑張れよ」

顔を真っ赤にさせるラウラを見て、ふっ、と千冬は笑い、今度こそ保健室を出て行った。

「結局、トーナメントは中止だった」

「まあ、あの騒ぎだったらな」

悠夜と一夏、シャルルの三人は今、食堂で夕飯を食べている。

「ただ、個人データは取りたいそうだから、一回戦は全部やるそう  
だぜ」

「ふーん。あれ、一夏ってもう試合したのか？」

悠夜は一夏と同じラーメンをすすりながら言う。

「ひでー、もちろん勝ったぜ。いやー、俺と篤のコンビネーション  
を見せてやりたかったぜ」

「言つとけ……ん？」

悠夜が一夏を適当にあしらっていると、むこうの方で、女子たちが  
何か騒いでいた。

『優勝、チャンス、消えた……』

『交際、無効……』

『『『うわーん!!』『』『』』

「ったく。いつも元気だな」

「（その元凶はお前だろうに……）」

その時一夏とシャルルはまったく同じことを思ったのであった。す

ると、箒が悠夜のほづにやってきた。

「悠夜……」

「ん？箒か。あー、先月の約束の件だけだな」

「え！？」

「付き合ってもいいぞ」

「なに！／＼／＼本当か！？」

箒は悠夜の胸倉をつかみ、顔を赤くさせて言う。

「あ、ああ、付き合うさ。買い物くらグワツハ！！！」

しかし、悠夜の口から『買い物』という単語が出てくると、箒の顔が一気に怖くなり、拳が悠夜の顔を綺麗にとらえた。

「どうせそんな事だろうと思ったわ！！ふん！！！」

「グエツ！！！」

箒は倒れる悠夜の腹を思いっきり蹴飛ばし、まだ怒りが残る様子で帰って行った。

「今のは結構飛んだなー」

「悠夜って、わざとやってるんじゃないかって思う時があるよねー」

「み、身に覚えがない……」

「黒川君とデュノア君、それに織斑くん！」

悠夜はなぜ箒に蹴られたのかが分からず考え、一夏とシャルルはそれぞれコメントをしていると、山田先生が何か用があるようで、こっちにやってきた。

「どうしたんですか？山田先生？」

「三人とも、朗報です！今日は大変でしたね。でも！三人の苦勞をねぎらう素晴らしい場所が、今日から解禁になったのです！」

「素晴らしい、」

「場所？」

「男子の、大浴場です……！」

「ほ、本当ですか……？」

山田先生の言葉に一夏は喜ぶ。しかし、悠夜とシャルルは『ゲツ』という顔をしていた。

「（どうしよう、悠夜……）」

悠夜とシャルルの二人はアイコンタクトで会話を始めた。

「（まずいな。一夏をどうにかするしか……よし、俺に任せろ）」

「（え！？どうするの！？）」

「（大浴場で待ってる）」

そうして三人は一旦解散した。

「あれ？黒川君、織斑君はどうしたんですか？」

悠夜が向かった大浴場の入り口には、山田先生が立っていた。

「一夏なら後で来るって言ってましたよ？」

「そうですか。じゃあ先に入ってください。あっ、先にデュノア君が入って行きましたよ」

「分かりました」

そう言っつて悠夜は大浴場に入って行った。

「一夏は？」

大浴場に入ると、真っ先にシャルルが一夏のことを聞いてきた。

「一夏なら俺がちょっと眠らせた。あれだったら明日まで起きないだろ」

一夏はあの後悠夜に呼び出され、突然首に衝撃が走ったかと思っただらなんだか意識が遠のいて行き、今は悠夜の部屋でのびている。

「ゆ、悠夜って結構やるね・・・」

「そうか？　じゃあ、俺から入っていいか？　俺今日ちょっとクタクタ・・・」

「はは、いいよ。僕待ってるから」

そう言ってシャルルは悠夜の着替えを見ないように移動する。

「ありがとな」

悠夜も服を脱ぎ、風呂に入ってしまった。

「ふう〜。いい湯ーだーなーっと」

悠夜が大浴場に入って数分。突然大浴場の扉が開き、そこからはなんとシャルルが入ってきた。

「お、おじゃましまーす・・・／／／／」

「シャ、シャルル！？なんで入ってきたんだよ！？」

あまりの驚きに思わず声が上がずり、顔が赤くなる悠夜。シャルルも顔を真っ赤にさせている。

「僕が一緒だと、イヤ？」

そう言っつて湯船に入ってくるシャルルにさらに慌てる悠夜。

「い、いやいやいやいやそう言っつんじゃなくてだな……」

「迷惑ならあがるよ？」

「お、俺が上がる！まだシャルルは入ったばっかだろ！」

「ま、まっつて！」

悠夜は湯船から上がって大浴場を出ようとする。しかしそれをシャルルが呼びとめた。

「だ、大事な話があるんだ……」

「大事な話？」

「その……この前の話なんだけど……」

「この前……あー、学園に残るっつて話しか」

シャルルが学園に残る話。悠夜は少し落ち着いてきた。

「うん。僕ね、ここにしようと思うんだ。僕はまだ、ここが自分の居場所だっと思って思える所が見つけれられていないし、それに……」

「……それに？」

「悠夜が僕の命は僕のものだって教えてくれた。悠夜がいるから、僕はここにいたいっておもえるんだよ」

背中あわせに座る二人。シャルルは悠夜の手に分自分の手を重ねる。

「そっか」

悠夜は嬉しそうにそう言った。自分の言ったことでシャルルの決断を手伝った。嬉しくないはずがない。

「それにね、もう一つ決めたんだ」

「もうひとつ？」

「僕の在り方」

「シャルルの在り方……」

「そう。これから僕のこと、シャルロットって呼んでくれないかな？二人っきりの時だけでいいからさ」

「シャルロット？それって……」

「僕の名前。お母さんが付けてくれた、本当の名前」



「ああ、わかった。シャルロット」

「うん」

とても嬉しそうに返事を返すシャルロット。悠夜は改めてシャルロットを守ると思った。

「お、おはようございます・・・」

朝、悠夜たちは何故か元気がない山田先生のあいさつでSHRが始まった。

「ん？悠夜、シャルルはどうしたんだ？」

SHRの中、一夏はシャルルがいないことに気付く。

「あれ、食堂までは一緒だったんだけどな・・・」

悠夜たちがそう話していると山田先生が話し始めた。

「今日ですね、転校生を紹介します。いや、転校生というか、もう自己紹介はすんでるというか・・・入ってください・・・」

「失礼します」

妙に聞きなれた声がきこえる。次の瞬間、教室は凍りつく。

「シャルロット・デュノアです。改めてよろしくお願ひします」

丁寧に頭を下げるシャルロット。あまりの出来事にみんな言葉が出ない。

「一夏」

「お、おう・・・」

すると誰よりも早くフリーズ状態から回復した悠夜は顔を青ざめ一夏の方を見る。

「俺、今日死ぬかも」

「ああ、死ぬな」

「えーっと、『デュノア君』は『デュノアさん』ということでした。はー、また部屋割を考えなければいけません」

大きなため息を吐く山田先生。しかしクラスの生徒はそんな言葉など全く入っていないかった。

「え？ デュノア君って女？」

『おかしいと思った！美少年じゃなくて、美少女だったのね！』



「「「「んな!?!?!」」」」

「? ? ? ?」

「おー、やるなーラウラ」

大声を上げ目を見開く筈とセシリアと鈴音とシャルロット。悠夜は目を白黒させ、一夏は完全に傍観者を決め込んでいる。

「お前は私の嫁だ!!これは決定事項。異論は認めん!!」

「い、いや、嫁じゃなくて婿じゃねーか?」

「やばい、悠夜が混乱しすぎて突っ込みどころを間違っている」

「一夏がそんなことを言っていると一夏は周りから悠夜に向けての四つのだす黒い殺気を感じ取る。」

「「「「フフフフフフフフフフ」」」」

「お、お前ら……これは不可抗力……」

悠夜も四つの殺気に気付いたのか真っ蒼な顔をさらに青くさせる。

「悠夜さん、ちょっとこちらに来てお話をさせていただけませんか?」

「悠夜、やっぱりあんた死になさい!!」

「逃げるが勝ち!!」

鈴音の衝撃砲と、セシリアのスターライトMK?の砲口がこちらに向いているのに気付き、悠夜は一刻も早くこの場から脱出するためドアに向かって走る。

「死ね!!悠夜!!」

「そおい!!!」

しかし向かい側からいきなり箒が刀で悠夜に切りかかってきたので悠夜は体を大きく反らせて避ける。

「箒!!そりゃ真剣じゃねーか!!」

「当たり前だ。これならお前を殺せるからな!!」

「くっ!!」

またも切りかかる箒。それを避けようとする悠夜だが不意をつかれ壁に飛ばされ誰かにぶつかる。それはとつても素敵な笑顔でとつても怖いアーマーを展開しているシャルロットだった。

「まさか悠夜が他の女の子の前でキスするなんてびっくりしちゃったよ」

「シャ、シャルロット?その笑顔にその武装はちょっと似合わないですわよ……」

「ごめん。今悠夜が何言ってるのか分からないんだ」

「「悠夜（さん）！……！」」

ついに囲まれた悠夜。最後の頼みとして一夏に助けを求めようと悠夜は一夏を見るが、一夏は他の生徒と一緒に合掌していた。

「一夏の裏切りも………ん……！」

そうして轟音が学園中に響いた。

## 第十二話 シャルルの決意（後書き）

ちよつとロスト・メモリーの方を続けますので更新が遅くなると思いますがご了承ください。

第十三話 さらにハチャメチャな予感（前書き）

更新遅れましたすみません！今回はオリキャラが登場します！



### 第十三話 さらにハチャメチャな予感

タンタラ タンタン タンタララン

「ム！この着信音は！」

ピ！

「もすもすヒネモス〜 ハ〜イ、みんなのアイドル篠ノ之束ちゃんだよ〜」

頭の大きなウサギ耳を立たせ篠ノ之箒の姉、篠ノ之束は元気よくそういうが、電話の相手の箒はあまりの軽さに自分が電話をかけたにもかかわらず切ろうとしている。

「って！待って待って！切らないで箒ちゃん！」

「……姉さん……」

「やあやあやあ我が妹よ〜。ゆうくんは元気かな〜？うんうん、用件は分かっているよ〜。欲しいんだよね〜、君だけの専用機が！もちろん用意してあるよ〜」

「！」

箒はいきなり核心を突かれ、驚いた顔をする。

「最高性能にして規格外。そして黒までにはいかないけど白には並び立つ者。その機体の名は………赤椿！！」

束は後ろの赤色のISを見ながらそう言った。

ピュピュピュッ！ーピュピュピュッ！ーピュピュピュッ！ー

「うーん・・・」

ピュピュピュッ！ーピュピュピュッ！ーピュピュピュッ！ー

「あーもううるせえ！ー！」

ガッツ！ー！

朝。一つの機械の命と引き換えに眠りから覚める悠夜。これで目覚まし時計の着せ死者は三ヶ夕突入。流石にこの癖は直さなくてはと思う悠夜は自分の足が奇妙なこと気付く。

「ん？足が四本・・・まさか！」

自分の頭に浮かんだ可能性を確かめるため悠夜はすぐさま自分の布団をめくるが、その中身を見た瞬間迅速の早さで布団を下ろし、数

秒思考が止まる。

「……………いやいやいやそんなことはない。見間違いだ、きつとそうだろう。もう一度確認しよう。そうすれば見間違いつてことが分かる」

悠夜はそう自分に言い聞かせもう一回布団をめくるが、その中身はさっきと変わらなかった。

「なんでお前がいんだよラウラ」

うなだれるようにそう言う悠夜の横には、素っ裸のラウラがいた。

「んー？なんだもう朝か。おはよう悠夜」

「ああ、おはよう……………じゃなくて……………」

目をこすりながら言うラウラ。あまりに普通の挨拶だったので、普通に返したしまった悠夜は我に戻る。

「なんでお前が俺のベットにいる!」

「……………夫婦とは互いに包み隠さなぬものだ」と聞いたぞ。ましてお前は私の嫁……………」

「なんでお前が俺の部屋にいて、しかも俺のベットに裸で入って、いきなり嫁とか言われて、あ……………もう! ツッコミどころが多くてなにがなんだか!」

ウガーーと言い、頭を抱えている悠夜。

「日本では気に言った相手を『俺の嫁』とか『自分の嫁』と言うそ  
うだが・・・」

「お前に間違った知識を吹き込んだやつを今すぐ出せ。叩きのめし  
てやる」

「とにかく私の嫁になれ！そして私に誓いのキスを！！」

突然わけのわからないことを言うラウラは悠夜に飛びかかりキスを  
しようとする。

「二度もされてたまるか！ていうかおとなしくしろ！」

悠夜は飛びかかってきたラウラを受け流し抑えかかる。

「なんの！..！」

しかしラウラも軍人。悠夜を投げ飛ばす。

「何としてもお前の唇を奪う！」

「なんでか知らねーけど奪われてたまっか！」（注意・悠夜は鈍感  
です）

そして二人の戦いは途中で悠夜の部屋に入ってきて悠夜とラウラの  
姿を見たシャルロット、鈴音、セシリア、篝たちのフルバーストを  
悠夜がくらくらという形で収まった。

「はぁー！。なんで俺だけが痛い目に合わなくちゃいけないんだよ」

「ハハハハ・・・だからごめんって」

朝の騒動からしばらく。悠夜はシャルロットと水着を買ったためにモノレールに乗っていた。

「と、ところでさ、悠夜。どうして僕のことだけ誘ってくれたの？」

「ん？ああ、もうすぐ臨海学校だろ？一夏を誘おうと思ったんだけどなんか『面倒なことになるからパス』って言って断られてさー。なんか携帯持って誰かと話してたけどなんなんだろうな」

「（一夏ナイス！！これはもうデートだよデート！！）」

見た目は普通に座って悠夜の話をしているシャルロットだが、心の中ではお祭り騒ぎである。しかし次の悠夜の一言でそのお祭りが粉碎する。

「そしたらお前男で学園入ったから女子用の水着持ってねーんじゃねーかって思ってさー、ついになって」

「っ、っいで……ま、そんなことだろうと思ったけど……」  
さっきのお祭り騒ぎは何処へ行ったのか。シャルロットはガクツと肩を落とす。

「？ どうした？ シャル？」

「別になんでも……って、シャル？」

いきなり呼ばれた自分のニックネームのような呼び名に反応してシャルロットは首をかしげる。

「そう。シャル。もうみんなお前が女だっことは知ってるんだし、シャルロットって呼び方普通だなって思って。ダメだったか？ ダメならやめるけど……」

「ダメじゃない！！いい！すごくいいよ悠夜！！」

突然大きな声を上げるシャルロットことシャルに、悠夜は少したじろぐ。

「あ、ああそりゃ良かった。（こんなに反応してくれるなんて。よっぽど気にいったのか）」

「（シャル。シャルかー。これって、ちょっと特別な存在ってことだよね）」

そんなこんなで駅に着いた悠夜たち二人は目的の水着をかうため街へ向かった。

悠夜とシャルと一緒に街を歩いている中、その二人をあらかじめス  
トーキングしている四つの影があった。

「ねえ……」

「何ですの……」

「ああ……」

「なんだ？」

何時も通りに返事をするラウラとは逆に、鈴音とセシリアと箒の三  
人は何やら光がともっていない目で、手を繋いで歩く二人の後ろ姿  
を見ている。

「あれってさあ……手え握ってない？」

「握ってますわね」

「握っているな・・・」

「さっきデュノアが悠夜に何か言っていたからな。どうせ悠夜に手をつないでくれと頼んだのだろう」

上から鈴音、セシリア、箒、ラウラの順で四人は言った。ラウラ以外の三人からは閻魔大王もびっくりの黒いオーラを出し、箒は真剣を構えてさえいる。

「そっか、やっぱりそっか。私の見間違いでもなく、白昼夢でもなく現実か・・・よし殺そう！」

「お手伝いしますわ！」

「私も！」

「止めんかバカ共」

ISを展開して砲撃を始めようとした二人と、真剣を抜いて殺す気満々の一人の襟首を掴んでラウラはため息を出す。

「まったく、何をしているんだ。お前らはそこにいる。私は行く」

「行くつてどこによ？」

「決まってる。私も交ざってくる」

「待てい」

三人を放り投げすたと歩いていくラウラの頭に三人はげんこつ



を落とし、襟首を掴んで引き寄せた。

「交ざるなんてなにやってんのよ！あんた！」

「そうですね！ここはまず追跡の後、二人の関係がどんな状態にあるのか見極めるべきですわ！」

「それにお前だって悠夜と二人きりの時邪魔されるのは嫌だろう！」

「ふむ。一理あるな。なら・・・」

「」「」「よし！」「」「」

そうしてこの一代表候補生三人＋一般生徒一人（馬鹿四人）は悠夜とシャルの距離を探るべく二人をストーキングするのであった。

「じゃあ、シャルはシャルの水着。俺は俺の水着を買ってからここで一旦別行動だな」

「あ・・・うん。分かった」

つないでいた手を話すとき少し残念な顔をしたシャルだったが、そんなことを鈍感の悠夜が気付くはずもなく女性用水着売り場とは逆の男性用水着売り場に歩いて行った。

「……はぁー。ここまで鈍感だとアタックしてるこっちが恥ずかしくなるよ。……僕も水着買いに行こう」

シャルはもう一度大きなため息を吐くと女性用水着売り場に歩いて行った。一方代表（省略。ようするに馬鹿共）は、

「くそ！見失った！」

「なにしてんのよ！ラウラがこっちだって言ったんじゃない！」

「言い争ってる暇なんてありませんわよ！」

「もう見つかってもいいから悠夜たちを見つけてるぞ！」

完全に当初の目的を完全に忘れていた。



ドーーーーーン!!!

「ゴツツツツハツツツ!!!」

まさにその瞬間はスローモーション。謎の地響きが近づいてくるにつれ血の気がサーーと引いていく悠夜の腹に地響きとともにやってきた緑色の髪をした少女の頭がクリーンヒットし、二人ともゴロゴロと転がって待ち合わせの像にぶつかり、少女は悠夜に馬乗りになり思いつきり抱きついた。

「センセ!センセ!センセ!久しぶりー、会いたかったでー!まさかウチのこと忘れてへんやるなー!」

「ひ、ひなまり雛鞠、苦しい・・・」

悠夜の声もむなしく雛鞠と呼ばれた少女はさらに力を強くする。

「やっぱり覚えててくれたんやー!うれしいわー。やっぱりウチとセンセは結ばれる運命なんやー!」

「だ、だから・・・苦し・・・」

「そつや!センセに伝えたいことがあってん!・・・って、センセ聞いている?おーい、センセー?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・(チーーーーーン)」

「悠夜ごめんねー。ちょっとたくさんあったから迷っちゃ・・・  
て・・・・・・・・」

「『『悠夜（さん）！やっと見つ……け……た……』」  
水着の袋以外色々と何か買っているシャルに、さっきまで悠夜たちを探していた四人。さらに顔を真っ蒼にし気絶している悠夜。極めつけはその悠夜にまたがつている謎の少女。シャルたち五人は数秒固まった後、やっと絞り出した言葉は、

「『『『何この状況？』』』」

「たははは、はじめまして」

これだけだった。

第十三話 さらに八チャメチャな予感（後書き）

悠「悠夜とー！」

ー「一夏のー！」

悠「ー「」とにかなんか話そうぜ！」のコーナー！」

（BGM・《SUPER STREAM》

悠「おい作者、いったい何してたんか」

い、いや、これにはれっきとしたわけが……

悠「ほーう。お前が余計にパソコンを扱いきたせいで親に制限されたのがれっきとしたわけか……」

……すんません！！！！

ー「まあまあ、作者だってこうやって土下座しているんだし」

悠「ちつ、まあいい。今回は何か来ていないのか？」

それがまだ感想をチェックしてなくて……

悠「死ね」

ぎゃああああああああ！！！！

ー「おー、飛んだなー」

悠「まったく……。すみません感想をくれた方。この後あの馬鹿に感想一覧をみせてまた次回に紹介しますのでこれからも宜しくお願ひします」

ー「では、さようなら」

テメーさつさと感想見ろよ！！

すみませーん！！！！

ー「やれやれ」

第十四話 鈴原雛鞠、登場や!! (前書き)

お知らせです。ちょっとなんだか不定期更新になりそうです。ちょっとやめて!石とか投げるのやめて!

## 第十四話 鈴原雛鞠、登場や！！

「・・・と、いうわけで、今日はまた新しいお友達を紹介しまーす。また部屋割りを考えないといけないけど慣れたからもういいや！」

山田先生が半ばやけくそ気味に「どうぞ！」と言つと扉から一人の少女が入つて来て悠夜たちの前に立った。

「大阪から来ました。鈴原雛鞠すずはらひなまりです。一応、専用機持ちで、まだここに来て慣れてないので、どうかよろしゅうおねがいます。愛してるでー、センサー」

関西弁で自己紹介をし、悠夜に手を振る雛鞠。何を隠そうこの少女は、この前のショッピングの時、悠夜の腹に頭から突進し、抱きついてきた張本人である。そしてその突進&抱きつきの被害者である悠夜は、

「はあー。なんでこんなことになつてるんだろ・・・」

キヤアキヤアとはしゃぐ女子たちの中、後ろにいる四人の刺すような視線に怯えていた。



「……………」

時は戻って数日前。シャルたちと雛鞠、そしてまだ頭に星が回っている悠夜たち七人は近くのファミレスで周辺の人が近寄りがたいほどのオーラを放ちながら睨みあいを繰り返していた。ちなみに、シャルたち五人は右からシャル、ラウラ、箒、セシリア、鈴音の順番で悠夜の向かい側のイスから雛鞠を睨み、雛鞠はまだ気絶している悠夜の腕に抱きついたままの状態でシャルたち五人を睨んでいた。

「……………アンタ、いい加減悠夜から離れなさいよ」

他の女が自分が好きな人の腕に抱きついている様子を見て気分のいい五人ではない。長いにらみ合いのなか、鈴音が完全に敵意むき出しの声で雛鞠に言う。しかし、雛鞠は一切離れる気はないらしく、さらに悠夜の腕を強く抱きしめる。

「うるさいなー。いいやる別に、減るもんやあらへんし」

「そついう問題じゃないでしょう!」

ついに我慢の限界に達したのかテーブルをバン!と叩いて怒る鈴音。しかし雛鞠はまったく動じず逆に小悪魔のような笑みを浮かべて鈴音に言う。

「あ、もしかして嫉妬?自分が出来へんからって八つ当たりはあかんわー。そない言うなら自分もやってみればええやないか」

「なっ!?!?!?!」

雛鞠の突然の提案にうろたえる鈴音。それを見て雛鞠はさらに追い討ちをかける。

「気持ちええでー、センセの腕は。大きいし、あたたかいし。言う事無しや」

「え……そんなに言うんなら………／＼／＼」

「……「鈴音<sup>さん</sup>!!!」「」「」

だんだんと雛鞠の誘いに乗っていく鈴音。それを慌てて止めようとする鈴音以外の四人。そしてその様子を楽しそうに眺める雛鞠。そんな若干カオスな光景のなか、やっと悠夜が目覚めます。

「う、うー……ん……ここは?……ゲッ!!ヒナ!!!」

「センセ!起きたんや!!!いやー、昔のあだ名まで覚えててくれるとは流石センセやわー」

「うおっ」

「……悠夜(さん)!!!!!!」「」「」

「うおっ!?!」

雛鞠が悠夜の腕から体に抱きつくのを変更した中、悠夜に向かって五人は身をのり出す。

「この人とはどういう関係なの!?!」

「貴様は私の嫁だと言っているだろう！」

「幼馴染である私だって知らないぞ！」

「まさか突然消えたというあのころに知り合っただのですか!？」

「なんですって!!悠夜!はつきりしなさいよ!!！」

「だぁー!ーもー!ーうるせ!!お前ら少しは落ち着け!それとヒナ!お前もいい加減離れろ!!！」

さすがに騒ぎすぎだと思ったのか五人は素直に追求をあきらめ、まだイヤイヤ言っている雛鞠は悠夜が無理やりひきはがす。

「はぁー!ー!。で、こいつのことか?こいつは・・・」

「鈴原雛鞠16歳!大阪生まれの大阪育ち!幼馴染のセンセのお嫁さんや!ー!」

「「「「「なあああにいいいい!!!!」「」「」「」

しばらくは静かになった五人だったが、雛鞠の言葉を聞いてまたもや騒ぎだす。

「悠夜!幼馴染とはどういうことだ!私はファースト幼馴染ではないのか!？」

「それよりお嫁さんってどういうことなの!？」

「悠夜！ちゃんと僕たちに説明して！」

「だからうるせえって！……あのなあ、お嫁さんってのはヒナが勝手に言ってることで、俺は別に承諾してねーぞ」

「なら、幼馴染とはどういう意味だ？」

「そうよ。悠夜の幼馴染ってあたしと筈だけじゃなかったの？」

他の三人が『なんだー』と言っている中、悠夜のファースト・セカンド幼馴染である筈と鈴音が悠夜に聞いた。

「ああ、ヒナとは幼馴染っていうか、物心ついたころからこいつといたからファーストって言っよりゼロ幼馴染って感じだな……」

「ゼロ……」

自分たちよりかなり前からの幼馴染の存在に二人は落胆する。

「どや、まいったか」

勝ち誇ったような顔をする雛鞠の頭に悠夜が手刀を落とす。

「痛っ！なにすんねんセンセ！叩くことないやろ！」

「うるせ。なに威張ってんだよ。それより何しにこっち来たんだ？お前大阪の高校に行くんじゃないか」

悠夜が雛鞠にあっけからずと気になっていた疑問を雛鞠に言うと、雛鞠はまたもや小悪魔のような笑みを浮かべる。

「そう思ってたんやけどな、なんかウチのIS適性が高いことが分かってな、センセと同じIS学園に入ることになってん」

「「「「「はああああああ!?!?!?!?!」」」」」

あははははと楽しそうに笑う雛鞠の衝撃的報告に五人はおろか悠夜までも大声を出して驚く。

「いつ!?!?」

「何日か後」

「何処に!?!?」

「IS学園に」

「なんで!?!?」

「IS適性が高かったから」

「なんでだよおおおー!?!?!」

頭を抱えてテーブルに突っ伏す。

「ああ、あの時一夏が言っていた『面倒なことになるから』ってそういう意味か……」

一夏は、かなり前から悠夜に雛鞠のことを聞かされていて、最近は連絡を取っているらしい。おそらく一夏だけにはこちらに来ること

を知らしていたのだろう。

「うれしいわー。まさかセンスがIS学園におったなんて。また毎日センスに会えるわー」

「なにが『会えるわー』だよ。お前のせいでどれだけ俺大変な目になったか分かってんのか？」

悠夜は昔、雛鞠にそのころから好かれていたのでしょっちゅう抱きつかれたり拳句にはキスをさせられたりしていた。そんなことを、近所でも評判のかわいさだった雛鞠がしていたらいくら子供でも嫉妬はする。悠夜はほぼ毎日嫉妬の炎に燃えた男たちに追われていた。

「まあまあいいやんか。IS学園はセンスと一夏以外は女なんやし、ここにいる篠ノ之さんやデュノアさんと学園生活をエンジョイしよや」

雛鞠が悠夜の肩を組みながらそう言つと篝やシャルたちが驚いた顔をする。

「え、僕たち名前言つてないけど・・・」

「センスから聞いたんや。デュノアさんにヴォーデヴィツヒさんに鳳さん。それに篠ノ之さんとオルコットさん。いろんなこと聞いてるぞ」

「「「「悠夜（さん）が、私たちのことを・・・／＼／＼／＼／＼／＼」」」」

「ん？どうしたお前ら？おーい」

「センセはその鈍感のとは治ってないんやね〜」

「なんか言ったか？」

「ベーツにー」

そんな風に二人がやり取りをしているとしばらくほおけていた五人が『ハッ!』と言って意識を戻し、セシリアが咳払いをした。

「そ、それではこれからわたくしのごとは『セシリア』と呼んで下さい。わたくしも『雛鞠さん』とお呼びしますから」

「私も『箒』と呼んでくれ」

「僕も」

「私も」

「仕方ないから呼ばしてあげる」

みんながそう言つと雛鞠は笑顔を浮かべた。

「分かった。ウチのことは『ヒナ』でええよ。『雛鞠』って名前言いにくいやろ。これからよろしゅうな」

そうしてみんな仲良くなつてめでたしめでたしかと悠夜は思ったのだが、何故か次の日雛鞠以外の五人は不機嫌な様子で登校してきた。理由は簡単。雛鞠は帰り際、

「センセとキスしたの、一回だけのラウラだけじゃないんやでー」

と言ってしまったのでこんな状況になっている。もちろんそんな会話が聞こえる悠夜ではない。なんでみんな不機嫌なのか頭を悩ましていた。

「よ、会つのは初めてだったよな。俺が織斑一夏だ。一夏って呼んでくれ」

「あんたが一夏か。ウチが鈴原雛鞠や。ヒナって呼んでーな」

SHR後、悠夜はまだ怒っている四人をなだめ始め、一夏は他の生徒が集まっている雛森の席に行った。



『えー、織斑くんって鈴原さんと知り合いなのー？』

「いや、顔を見るのは初めてだ。メル友ってのが正しいな」

『鈴原さんと黒川くんは幼馴染ってホント？』

「そや。ゼロ幼馴染や」

「だーーーーー!!!」

すると、色々と質問に答えていた雛鞠の席に突然悠夜が飛んできた。悠夜たちが飛んできた方向を見るとそこには腕だけISを展開させ、フンツ！と鼻を鳴らして教室を出ている鈴音やラウラ達の姿があった。さしずめ悠夜が彼女たちの怒りをさかなで、殴られたのだろう。しかし幸か不幸かだんだんと慣れてしまった悠夜には、そこまでダメージはなかったのでイテテと言いながら起き上った。

「そういえばヒナって専用機持ちだったんだな。今度一回模擬戦しようぜ」

「ええよ。その代わりに、ウチは強いぞー。少なくとも一夏よりは強いなー」

「しかたねーだろ。俺はみんなより長くISを扱ってないんだから」  
「だから俺たちが訓練してんだろーが」

そんな風に三人が話していると、突然教室のスピーカーからキーンと甲高い音が聞こえ、そのあと悠夜や一夏が聞き覚えのあ

る声が聞こえた。

『イエー！ー！ー！お姉さんからのお知らせだよー！ー！ー！一年一組の篝ちゃん・いつくん・ゆーくん。今すぐ屋上に来なさいー！！あと五分以内に来ないと、大変なことになるよー じゃあ、スタート！ー！』

放送が終わると、悠夜と一夏の二人はいきなり全速力で走りだした。突然のことに驚き雛鞠は悠夜たちを追いかける。

「センサー！今の放送なんやったのー！？」

雛鞠は大声で悠夜に話しかけるが、悠夜たちの耳には全く入っていない。

「おい悠夜、あの声ってまさか」

「言つな！！ それより走れ！ あの人はやると言ったらやる人だ！！」

「悠夜！！」

すると悠夜たちの後ろから篝が走ってきた。よく見ると篝の後ろには突然走りだした篝を追ってきたであろう四人がいる。

「ちょっとー、どういふことか説明しなさいよー！！」

「後から説明するからお前らは後で追ってこい！！」

言うが早いか悠夜たち三人は鈴音たちを置いて先に屋上へ走って行

った。

「オラア!!」

バンツ!と屋上の扉を蹴り開け、悠夜たちが屋上に着くと、そこにはピンクの髪にウサギ耳を付けた女性が立っていた。

「4分08秒!うんうん、早くなったねーユークんに篝ちゃんにいつくん!」

「何やってんですか!東さん!」

悠夜は目の前にいる篠ノ之東にそう言った。

第十四話 鈴原雛鞠、登場や!! (後書き)

次回は雛鞠と等のISが激突します!お楽しみに!

## 第十五話 紅椿VS緑神(前書き)

やっぱりシリアス難しい。もう少ししたら雛鞠のキャラ設定とIS設定を出します。

## 第十五話 紅椿VS緑神

「何してんですか東さん！」

「やあやあ我が愛しのゆうくん。それに篝ちゃんにいつくん。元気にしてたかい？」

「お、お久しぶりです。東さん……」

「……どうも……」

悠夜たちの目の前でニコニコとしながら言う篠ノ之束。後から追いついた鈴音たちは束の存在に驚いている。

「え！？ 束ってまさか篠ノ之束！？」

「天才科学者にしてIS開発者……！」

「そして篝の姉……か」

「なんや。篝のねーちゃんってISつくった人だったんかいな」

上から鈴音・シャル・ラウラ・雛鞠の順でそう言っていると、

「はあー。やはりお前か……」

扉のほうからため息混じりに千冬が現れた。その瞬間、束が千冬に飛び込んだ。

「ちーーーーーちゅうわーーーーん!!」

「フン!!」

「ダブ!!」

しかし千冬は慌てた様子もなくスムーズな動きで束の頭を拳がとらえ、地面にたたきつけた。

「ぐふ、あ、相変わらず容赦のない拳だね・・・ちーちゃん・・・」

「お前も相変わらずで何よりだ。で？一体何しにここに来た？まさか遊びに来たなんて言うんじゃないだろーな」

「ひ、酷いなちーちゃん。それじゃあたしがいつも遊んでるみたいじゃないかー」

「いつも遊んでばかりいただろう」

「ガーン!! 篝ちゃん! いくくん! ちーちゃんがいじめるー!」

「「分かりましたからさっさと用件を言ってください」」

「さらにガーン!! 篝ちゃんたちまで!」

「束さん」

「ゆーくん・・・」

うつうつとした瞳で悠夜を見つめる束。それを悠夜は笑顔で言った。

「諦めましょう(笑)」

「orz」

完全にorz状態の束。しかし数秒たつとケロツとしていた。

「まあ、遊びはこれくらいにして・・・」

「・・・結局遊びかよ」「」

「もちろんちゃんと用事があつてここに来たんだよー。パンパカパインー！なんと！今日は篝ちゃんにプレゼントがあつてやってきました！さあ！大空をご覧あれ！！」

すると、ズドン！と上空から『何か』が落ちてきた。悠夜たちがその『何か』を確認するため落ちた先を見ると、そこには銀色の箱らしきものがあつた。

「じゃじゃーん！これぞ篝ちゃん専用IS！『紅椿』！」

束が言い終わると同時に銀色の箱が消滅し、そのIS、『紅椿』はその名にふさわしい紅色の装甲を身につけそこに現れた。

「全スペックがゆーくんが作ったコア以外のコアの現行ISを上回る束さんお手製の第四世代ISだよー」

「俺の黒神クンネ・カムイは自分で作ったからな」

「これが・・・紅椿・・・」



「そいじゃ、早速フィッティングとパーソライズを始めよつか。この天才東ちゃんがるんだからすぐ終わっちゃうよー。篝ちゃん、こっちきてー」

そして篝は紅椿に乗り、それを確認した東が空中にディスプレイを開いて作業を始めた。

「それにしてもスゲーなー」

一夏が思わず感嘆の声を出す。

「ああ、でも東さんはすぐに出来たって……!!」

その瞬間、悠夜の目には紅椿があれにダブって見えた。すると、悠夜の心の奥底から懐かしさや温かさ。そしてそれに勝る憎悪や怒り、冷たさなどの感情が一気に込みあがってきた。

「? どうした悠夜?」

一夏が何かを言っているが今は全く耳に入らない。

「……東さん……これって……」

やっとのこと出した声はいつもより低く、暗かった。しかし東は全く気にせずいつもの調子で答える。

「あ!気付いた?うん。これはあれの後継機だよ!って言っても、あれがまだ未完成の時のデータをもとにして作ったから今じゃどっちが強いかわからないけどねん」

「……………そうか……………」

一言そう答えると、悠夜は出口の方を向き、歩き出した。

「お、おい悠夜。何処行くんだよ？」

「わりい、なんか気分悪いから先に部屋戻るわ」

「大丈夫ですの？悠夜さん……………」

心配そうに見つめるセシリア。悠夜は今自分が出る精一杯の作り笑顔で答える。

「大丈夫。ちょっと寝ればすぐ良くなるって」

「……………そうですか……………」

心配すんな。そう悠夜は言つと屋上を出て行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もう何時間いるんだろう。悠夜は自分の部屋のベットにあおむけになり見慣れた天井を見ていた。もうここにはシャルはいない。シャルが女として転校してきた次の日に別の部屋に移されたのだ。今シャルと相部屋なのは雛鞠である。

「・・・・・・・・吹っ切れたと思ったんだけどな・・・・・・・・」

一人になった二人部屋。そこで悠夜はポツリとつぶやく。数時間前、紅椿を見たときに湧き上がってきた正と負がないまぜになっている。この感情は今もなお残っていた。

少しずつ筈たちといえるなかで薄れてきた感情。しかし決して忘れることは出来ない感情。その感情は鈴音と一夏のクラス代表戦のときから徐々に膨張と収縮を繰り返し、時々少女のような声が聞こえる。

『・・・・・・・・が・・・・・・・・い？』

『や・・・・・・・・だ・・・・・・・・さ・・・・・・・・』

この声は何を言っているのかは分からない。しかし何か良くないものなのは何となく分かる。悠夜が声を振り払うように頭を振っているとコンコンとドアをノックする音が聞こえた。

「センセ？ おる？」

ドアの奥から聞こえたのは雛鞠の声だった。悠夜はドアノブに手をかけずゆっくりとドアに背中を傾ける。

「すまん・・・・・・・・今は誰とも会いたくない・・・・・・・・」

「皮肉やね」

ドアの向こうで雛鞠は話し続ける。

「自分が殺さなあかん相手のISの後継機を守るなんて」

「……………」

雛鞠は全てを知っている。なぜ悠夜がこんな風になっているのか。その原因の悠夜の過去も。するとふと悠夜が口を開く。

「俺、あのままあそこにいたら紅椿を攻撃していたかもしれない。……幕が乗ったまま……」

「……………」

「だんだんと自分で自分を抑えきれなくなってる。そんな俺が情けない……………」

「センセのせいじゃないよ」

「もしかしたら俺は紅椿を……幕を……殺すかもしれない……………」

悠夜の声が震えている。ドア越しでも分かるほどに。そんな悠夜に雛鞠は元気な声で言う。

「なーにゆーてんの！センセはセンセやろ！自分の心の闇くらい自分で何とか出来る！センセはそういう人や！」

「ヒナ……」

「だから、そない悲しげな声出さんといて。センセがそないやったらみんな心配するで」

「……」

しばらく悠夜が黙った後、ゆっくりとドアが開き悠夜が本物の笑顔で雛鞠の頭をなでた。

「サンキューな。ヒナ」

「それでこそウチの夫や！」

「夫じゃねーよ」

そうして二人は笑いあった。

「オッス！今日も騒がしいな」

次の日、悠夜は普通に登校した。教室にはもうシャル達が一夏の机の周りに集まって話をしていた。

「悠夜さん。昨日は大丈夫でしたの？」

「ああ、言っただろ？少し寝ればよくなるって」

「悠夜！あんた何あたしたちに黙って部屋戻ったのよ！」

「そうだ。嫁であるお前が、何故私に言わない」

「ちょっとまった！センセはウチの夫やで！」

「ふん。お前のようなじゃじゃ馬に悠夜を任せられるか」

「なんやてー！この貧乳！」

「ちょっと！貧乳を馬鹿にすんじゃないわよ！」

「あーもーけんかすんなよお前ら」

「……一夏は黙って……」

「はい！」

そんなこんなで話していると話題は昨日、悠夜が去った後のこととなった。

「へー。ヒナと篤が試合したのか」

「センスにウチの戦いぶり見せたかったわー」

「私だって見事な戦いだっただぞ！」

「わーったわーった。だから早く話聞かせろよ」

「あ、ああ……」

「はい！フィッティング終了！チョー早いねさっすがあたし！って、あれ？ゆーくんは？」

悠夜が屋上を出た数秒後。フィッティングを終えた東は悠夜がいないことに気づき、きよるきよると周りを見る。一夏とセシリア以外のみんなも、きよるきよると周りを見ている。

「悠夜なら、なんか気分悪いつて部屋に戻りましたけど……」

「えー！折角フィッティングが終わった後いっくんの白式と一緒にゆーくんの黒神のデータクシネ・カムイをもらおうと思ったのにー！うー、

「じゃあいつくん。ちよつと白式を展開してみてちょ」

「あ、はい」

紅椿が自動的にパーソライズをしている間、束は展開した白式の装甲にプラグを刺し、空中のディスプレイに表示されたデータを見る。

「おんやあ……。不思議なプラグメントマップを構成してるね。何さんしょ、いつくんが男だからかな？」

「あの……まったくもって分からないんですけど……」

「いつくんは分からなくていいよ……。うん！もう解除していいよいつくん」

束がそう言ったので一夏が白式を解除すると、同時に紅椿のパーソライズも終わった。屋上というせまい場所では何もできないので一行はアリーナへと移り、幕の試運転が始まった。まずは飛ぶようにと束に言われ幕が意識を集中すると、紅椿は凄まじい勢いで上空に舞い上がった。あまりの速さに他のみんなは呆気にとられている。

「どうどう？幕ちゃんが思った以上に動くでしょう」

「ええ、まあ……」

動かしている本人の幕までもがこの機体の性能に驚き、若干生返事になってる。そうしてそのあと、紅椿の武器、打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を連射する『雨月』と、斬撃に合わせて攻性エネルギーをぶつける『空裂』の凄さにも驚いていると、離鞠がある



提案をする。

「なあ箒？　ウチとちよつと模擬戦やってみーひん？」

「模擬戦？」

「ウチな、いちお専用機持ちなんやけどまだいっぺんも戦ったことないんよ。せやから頼むわ！」

顔の前で手を合わせ箒に頼む雛鞠。その様子に箒は笑いながら言う。

「ああ、いいぞ。相手してやる。ただし私は強いぞ？」

箒がそう言うのと雛鞠の顔がパアと明るくなる。

「ホンマ！？じゃあ、箒と紅椿の実力、試させてもらうで！」

雛鞠は右手に付けている緑色のブレスレットをつきだすと、そこから光が放たれISが展開される。そして最初に目についたのは緑色の装甲だった。だがこの学園にあるラファールのような緑ではない。それはまるで春に芽吹く葉のような緑だった。そしてその両手にはそれぞれ装甲と同じ色をした槍が握られており、雛鞠のまわりには同じものがあと四本宙に浮かんでいる。

「それがお前のISか・・・」

「そつや。名前は『シウリン・カムイ緑神』。油断しおつたら、ケガするで！！」

そう言うといきなり雛鞠は瞬間加速をし、両手の槍で箒に切りかかる。しかし箒はその攻撃を雨月と空裂で防ぎ押し返した。

「いきなり私の懐に入ってくるとは・・・さすがだな！」

押し返された勢いで上空に上がった雛鞠を追いかけて、今度は箒が瞬間加速ツシヨクン・ブラスをする。すると、箒は一瞬で雛鞠に追いついた。

「なんやと!？」

「はあ!!」

そして振り下ろされる雨月。雛鞠はなんとか槍で防いだが、エネルギー刃までは防ぎきれず何発かあたってしまった。

「くつ! 流石は第四世代ってことだけあるなあ。でも、まだまだやで!」

「来い!!」

そう言い構える箒。そこに雛鞠が突っ込んでいき、握っている二本だけではなく、宙に浮いている四本の槍も含めて計六本の槍が箒を襲った。

「そらそらそらー!!」

上下左右。さまざまなところから繰り出される薙ぎ払いや突き。いくら高性能でも六本に二振りはきつい。現に少しずつではあるがシールドエネルギーが削られていて残り70%ほどであった。これ以上は危険と思ったのか、箒は一旦雛鞠から距離を置く。そして今度は空裂を使い、攻性エネルギーを雛鞠にぶつけようとするが雛鞠に難なく避けられた。

「ちっ！」

「背中がガラ空きやで！」

「なんの！」

いつの間にか箒の背後にいた雛鞠が箒の背中を突こうとしていた。だが、箒は腰に付けてあった二基のビットをパージし、雛鞠を吹き飛ばした。

「つつー……。げっ！？普通一撃でこない削られる！？」

「まだだ！」

たった一撃でかなりのシールドエネルギーを奪われ焦る雛鞠に追い打ちをかけるように箒がこちらに突っ込んできた。

「あー！ーもー！、ならこれでどうやー！」

ガキン！！

勝利を確信した箒。しかし箒の攻撃は何かを防がれた。それは、先ほどの槍が作り出した六角形のビームシールドだった。

「！！。なんだこれは！？」

すると六本の槍はバラバラになって先端部分にビームブレードを形成し、箒に襲いかかってきた。箒はなんとかそれらを防ぎ雛鞠から距離を取った。

「……守式まもりしき参ノ型、椿……」

そう呟きながら雛鞠は立ち、六本のうちの一本を持って箒に肉薄した。

「やっぱり出し惜しみはアカンなー」

「くっ！それがお前の単一仕様ワンオフ・ナビリティー能力か？」

「ちゃうで。これがウチの『楓かえで』の本当の姿や」

そう言つて雛鞠は箒を押し飛ばし六本の楓の内的一本を持つと残りの五本の楓が一本の先端に集まりランスのような形をつくる。

「攻式こうしき式ノ型、牡丹ぼたん。終わりや」

「な!？」

箒は防御する暇もなく雛鞠の楓に貫かれ、シールドエネルギーをすべて奪われた。

「へー。そんなことがあったのか」

一通り話し終わり、悠夜はそんな感想を言った。

「すごかったぜ！ 箒とヒナの模擬戦！」

「むう。今度は負けないからな！」

「よしゃ！ かかってこいや！」

なんか勝手に熱くなっている二人は置いて置いてシャルがふと疑問に思ったことを言う。

「あ、でも紅椿は現行ISの中では最強なんだよね。じゃあその紅椿に勝った緑神はなんなのかな？」

「あー、それは・・・それはこの緑神はセンセが作ったからや！」  
・・・ってことだ」

「……………なにー！ー！ー！？」

いきなり騒ぐ一夏たち。悠夜はすこし引き、雛鞠は耳をふさぐのが間に合わず目を回している。

「悠夜がつくったISって黒神だけじゃないの！？」

「しかもなんでヒナが持ってるのよ！？」

「ちゃんと説明しろ！悠夜！」

次々と質問を浴びせる一夏たち。すると突然一夏たちの頭に鉄槌が浴びせられた。

「うるさいぞお前ら。もうSHRの時間だ」

「……………はい……………」

そう言っ頭を押さえながら帰っていく一夏たち。去り際、『お前のせいだ！』と六人はプライベートチャンネルで言ってきたが、『知るか』と返し朝のSHRが始まった。

第十六話 一軌(きし)み(前書き)

やっとここまで来たって感じですか。はい。

## 第十六話 一軌(きし)み

「悠夜！ おい起きろ！ 悠夜！」

「んあー？ なんだよ一夏。折角もう少しでココア麵にココアスープ。チャーシューの代わりに板チョコ、メンマの代わりにポツ〇ーをトッピングし、極めつけはチョコレートアイスを乗つけた特製チョコラーメンを食べれたのよー」

「甘！？ 想像しただけで糖尿病になるわ！ ったく。ほら、見えただぞ」

「ん……おおお！！」

「「海だー！ー！ー！！！」」

悠夜と雛鞠が叫んでいるのはバスの中。今日は待ちに待った臨海学校である。悠夜たち以外の生徒も海を見て興奮している。しかしラウラと篤は『こんな恥ずかしい水着、悠夜に見せられるわけ……』『や』いや、でも海では悠夜と遊びたいし……』など何やら思いつめた表情でぶつぶつと呟いている。シャルはそんな二人を放っておき、悠夜と雛鞠はさらにテンションを上げる。

「センセセンセ！ 海！ 海やで！」

「ああ！ すっげー綺麗だな！」

「旅館に着いたらしばらくは海で自由行動みただよ」



「マジでかシャル！ 一夏、後で競争しようぜ！」

「いいぜ！ 中学の水泳では一回もタイムで勝ったことがないからな。今回は負けないぜ！」

「ふっ。今年も俺に勝てるかな!？」

「なにお!！」

ハハハと笑う悠夜。ふとセシリアがなにやらモジモジしているのに気付く。

「ん？ どうしたセシリア？ どこが悪いのか？」

「い、いえ！ あ、あの……悠夜さん」

「どうした？」

「う、海で……」

「海で？」

「サ、ササササ、サンオイルを塗っていただけませんか!?!?! / / / /」

「いいぜ」

「……へ？」

あまりにもあっさりと了解した悠夜。想像の反応とは180度違ったのでセシリアは間の抜けた声を出す。

「サンオイルだろ？ 別にいいぜ。背中とか手が届かないからな」

「そ、そうですね。・・（ま、まさかこんなにあっさりと・・もしやわたくしを女として見ていないのでは!?!）」

受け入れてくれたのは嬉しい。しかし女として見てもらえないのは困る。セシリアが複雑な顔をしていると、隣に座っていた一夏がポンとセシリアの肩にてを置く。

「セシリア、諦める。悠夜は1や2からじゃなくて飛んで5くらいまで行かないと気付かないんだよ」

「はははは・・・そうでしたわね・・・」

同情するように一夏がそう言うとセシリアはうなだれるように頭を伏せた。

「何うなだれてんだよ。やっぱ気分悪いのか？」

「なんでもありませんわ!」

「?」

突然サンオイルを塗ってくれと頼みに来たかと思えばいきなり頬を膨らませ怒りだすセシリアに悠夜はハテナマークを出していた。

「今日から世話になる花月荘だ。従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

『『宜しく願います』』』

旅館に着いた悠夜たちは織斑先生の言葉に続いていつもお世話になっているとのこと、女将さんに全員で挨拶をする。

「はい、みなさんよろしく願います。今回の一年生の皆さんは元気のよい方ばかりで。」

そして全員が旅館に入っていく中、女将さんの視線と悠夜と一夏の視線があった。

「あら、あなた方が」

「ええ、今回初めての男子となります。お前ら挨拶をしろ」

「初めまして、織斑一夏です」

そう言うと一夏は女将さんに向かってお辞儀をする。

「あらら、弟さんですよな？」

「ええ、まあ出来ない弟ですがね」

「うふふ、千冬さんは弟さんには厳しいのね。しっかりしてるように見えるのに。それで、そちらのかたは？」

女将さんが悠夜に視線を移すと今度は悠夜が挨拶をする。

「どうも、黒川悠夜です。これから三日間よろしくお願いします」

「あらあら、ご丁寧にどうも」

女将さんとの挨拶がすむと、悠夜と一夏はそのまま織斑先生に連れられて部屋に向かうことになった。というより、しおりでは悠夜と一夏の部屋だけが記載されないので悠夜たちはどこに自分たちの部屋があるのか分からなかった。そしてついたのは

「教員用の隣？」

教員用と書いてある隣の部屋であった。

「最初はお前らだけでの部屋を用意していたのだが、それをすれば確実に消灯時間を過ぎた馬鹿どもが押し寄せる事を考えて、私の部屋の隣と言っわけだ。ちなみに山田先生は上の教員用を使っている、簡単に言えば私がここの理由は貴様らのボディガードだと思え、わ

「かつたな？」

「了解」

「へーい」

「それでは部屋の確認が終了した、お前らは今日一日遊んで来い！」

「ウツス！！」

そして今は自由時間。生徒全員おもしろいきりはしゃいでいる。

「今11時です！夕方までは自由行動。夕食に遅れないように旅館に戻ることに。いいですね！？」

『『『はー！ー！ー！ー！ー！ー！』』』』

「ヒナ！一夏との対戦前にお前で肩慣らしだ！」

「ふっふっふ。ウチも舐められたもんやな。・・・水泳トップだったウチがセンセに負けたあの屈辱！今年こそ晴らさせてもらうぞ！……！」

「うおおおおおおお！！」

「あいつら元気だなー」

もちろん悠夜も例外ではなく、一夏は海に上がる二本の水柱を見ながらそう言った。ちなみに雛鞠はフリルのついた緑色のビキニ。悠夜は黒のトランクスタイルの水着で、一夏は青のトランクスタイル

の水着である。

「あんなにはしゃぐ悠夜見たことないなー」

すると一夏の隣にセパレートとワンピースの中間のようなオレンジ色の水着のシャルがやってきた。しかし一夏はその隣にいるものに目が行く。

「お、シャルか。・・って、何やってんだラウラ？バスタオルなんか巻いて」

シャルの隣にいるもの。それは体にバスタオルをぐるぐるに巻き、もはや髪の毛と眼帯しか見えないラウラであった。ラウラにはいつもの堂々とした雰囲気はなく、弱弱しい雰囲気を放っていた。

「ラウラは悠夜に水着を見せるのが恥ずかしいんだよねー」

「う、うう、うるさい！私は・・その・・」

「大丈夫だって。悠夜がお前の水着を見てダサいなんて言うと思うか？」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める。そ、それに心の準備というものが・・・」

一夏とシャルはため息をつき、どうにかしてラウラのバスタオルをはがそうとしていると悠夜と雛鞠が競争から帰ってきた。

「勝った！」

「負けた！くうく、来年は勝つで！！」

「やってみな！・・・っと、お前ラウラか？」

悠夜がバスタオルお化け状態のラウラに話しかけるとラウラはさらに硬直する。

「ゆ、悠夜！？」

「なーにやってんだよ。ラウラも海で遊ぼうぜ！」

「い、いや・・・」

ラウラがどもっている、シャルがラウラに耳打ちをした。

「だったら、僕たちだけで悠夜と海で遊んじゃうけど、いいのかなー？」

「よ、よくはない！・・・ええい！脱げばいいんだろ脱げば！」

そしてラウラは完全にやけくそ気味にバスタオルを投げ捨て、ラウラの姿があらわになった。

「わ、笑いたければ笑うがいい・・・」

それは、ふんだんにレースがあしらわれた黒の水着で、髪は普段のように伸ばしたままではなく、鈴音のように頭の両サイドで纏めていて、十分似合っていた。

「なんだよ。笑うとこなんかねーじゃねーか。可愛いと思っぜ」

「かつ、可愛い!?! 私か!?!」

悠夜の『可愛い』発言によって、あまり可愛いと言われたことのないラウラは顔を真っ赤にさせ、脱兎のごとく逃げ去って行った。

「お、おいラウラ! 何処行くんだよー! なあー夏、追いかけたほうがいいか?」

「いや、いいだろ」

「そんなことよりあっちでビーチバレーをしようよ」

「あり? そんなことでいいんだ。ま、いいか」

変なところで納得するのが悠夜クオリティー。一夏たち三人は同じクラスの女子たちと一緒にビーチバレーをして自由時間を過ごした。

「あつ!?! 悠夜テーマ俺の刺身取ったな!?!」

「へっ、よそ見してんのが悪・・・ヒナ! お前何勝手に俺の鍋の具



取ってんだよ！」

「よそ見してるセンスが悪いんやー」

楽しい時間は過ぎるのが早い。時間は既に夕飯時で、浴衣に着替えた悠夜たちは大宴会場という名の決闘場で、食つか食われるかのサバイバル（夕飯）が繰り広げられていた。

「上等じゃねーか！ 後で泣いてもしらねーぞ！」

「その言葉！ そっくりそのまま返したるわ！」

「何やってんの悠夜。そんなことしてたらまた織斑先生に……ちよつとセシリア！ 僕のおかず取らないでくれるかな！」

「おほほほ。世界は弱肉強食ですわよ」

「……僕がセシリアごときに負けると思ってるの!？」

『オラア!!!』

『なんの!』

『あつ!』

『刺身頂きー!』

もはやここには静かに夕飯を食べている者はいない。皆食べ物を奪ったり奪われたりの大騒ぎである。そこにこの大乱闘を鎮める唯一の人間が現れた。

「お前たちは静かに食事をする事が出来んのか!？」

『『『『お、織斑先生……』』』』

そう。織斑千冬である。千冬の鶴の一声により大宴会場は一瞬で静かになった。

「まったく。黒川、お前は後でここの掃除だ」

「えっ！俺だけ!？ ちょっと待って千ふよ「五月蠅い」ガハッ!？」

「とにかく、次から静かに食べないところなるからな」

『『『『はい……』』』』

そして千冬がふすまを閉めた後には、茫然と立ち尽くす皆と無残に散らかった食べ物と。そして腹を抱えうずくまる悠夜だけが残った。

「ちょっと抵抗しただけでボディーブローか……」

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

改めて千冬の恐ろしさを知った生徒たちであった。

「よし、全員そろったな」

臨海学校二日目。悠夜・セシリア・鈴音・一夏・ラウラ・篤・雛鞠の専用機持ち七名は突然大座敷に召集された。

「織斑先生、何があつたんですか？」

「まずはこれを見る」

シャルの質問に千冬がそう言うと、悠夜たちの中心に空中投影のディスプレイが浮かび上がってきた。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ、イスラエルの共同開発の第三代型軍用IS、『銀の福音』シルハリオ・ゴスベルが軍の制御下を離れて暴走、監視空域より離脱したとの連絡があつた」

その瞬間、一夏以外の悠夜たちの表情が真剣なものとなる。

「その後、衛星による追跡の結果、福音と終焉はここから二キロ先の空域を通過することが分かった。予想接触時間は五十分後、学園上層部の通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

淡々と続く千冬の言葉。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、今作戦の要は専用機持ちに担当して貰う」

「ようは俺たちがその暴走ISを止めろってことか」

「そつだ」

悠夜の言葉に答える千冬。すると今度はセシリアが口を開く。

「目標IS二機の詳細なスペックデータを要求します」

「よし。だが、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。口外した場合、諸君等には査問会の裁判と監視が待っているからそのつもりで」

「わかりましたわ」

すると座敷の中央で映っていた空中投影ディスプレイが二枚に分かれ、『銀の福音』シルバリオ・ユスベルのスペックを映し出す。悠夜たちは一斉にそれを見た。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型、攻撃と機動に特化した無人IS。セシリアのブルー・ティアーズ同様、オールレンジ攻撃が可能。特殊武装、及び格闘性能は不明。尚、現在この機体は超音速飛行を続けている。アプローチは一回が限界……か」

「この情報からすると、アプローチが一回しか出来ない以上、一撃必殺の攻撃力が必要となるな」

「なら、一夏の零落白夜か」

「センスのアルカナ・バーストやな・・・」

すると千冬が悠夜の方を見て言った。

「今回の作戦には黒川は外れてもらう」

「なんでだ？」

悠夜が聞くと、銀の福音シルバリオ・ゴスベルのスペックを映し出していたディスプレイが別のISのディスプレイにかわる。

「銀の福音シルバリオ・ゴスベルが軍の制御下を離れて監視空域より離脱した数分後、他の地点から別のISが確認された。こちらは有人のようだが装備がいささか強力なため、敵だった時のために黒川と鈴原に行ってもらいたい」

「「分かった（了解や）」」

「なら福音は一夏か」

「エネルギーは零落白夜で使っちゃうから誰かが運ばないといけな  
いね・・・」

「なら、この中で現在最高速度の出せるISは「ちよ〜と待った  
〜!」・・・はあ」

するとどこか聞き覚えのある声が上の方から聞こえてきた。

「またお前か・・・」

一夏たちが声のする方向を見ると、そこにはニコニコ顔の束が天井から生えていた。

「ちーちゃんちーちゃん！ もつと言い作戦が私の頭の中にナウ・フリーティング！」

「出ていけ」

「聞いて聞いて！ ここは断然紅椿の出番なんだよ！」

「なに？」

ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ

歯車がきしみ始めた。

第十六話 一軌(きし)み(後書き)

—「一夏と!」

悠「悠夜の!」

—悠「とにかくなんか話そうぜ!のコーナー!」

(BGM・《SUPER STREAM》)

—「俺なんであんな強いそうなやつと戦わなきゃいけないんだよ!」

悠「うるせー。どうせ俺の方のISも敵だつてーの」

風「お、勘が鋭いな」

悠「黙れ作者」

—「でもよく考えると連載始めてもう一カ月過ぎてんだよな」

悠「ほんとだな。話は全く進んでねーけど」

風「お、俺だつて頑張つてんだぞ!」

悠「ならさらに頑張れ。血反吐を吐くほどに」

風「ひどっ!」

—「まあまあ。さて、次回のIS インフィニット・ストラトス

漆黒のIS は俺と篤が福音と戦闘!」

悠「それと同時に悠夜も謎のISとの戦闘を始める」

—「そしてまさかの悠夜が暴走!」

悠「—「お楽しみに—」」

第十七話 狂い（前書き）

今回はちょっと短いな。それでは始めます。



## 第十七話 狂い

「さて、そろそろ敵さんも近づいてるころだろ。俺たちも行きましか」

悠夜を合図に、悠夜・雛鞠・一夏・箒の四人はISを展開させそれぞれの場所に飛んで行った。

何故ここに箒がいるのかと言うと、束曰く『箒ちゃんの紅椿は即時<sup>リアルタイム</sup>・マルチロール・アクトレス<sup>△</sup>万能対応機の展開装甲だからパッケージなんか無くても超高速機動が出来るんだよ〜』らしい。なので一夏を福音のところまで運ぶ役は箒に決定したのである。すると全員に千冬から通信が入った。

「もう一度作戦の説明をする。まず福音は織斑が篠ノ之の背中に乗って一気に接近、零落白夜を叩き込む。万が一失敗した場合は一度撤退。それが無理ならば戦闘に入っのヴォーデヴィツヒたち待機組の救援の到着を待つ。悠夜と鈴原は未確認のISの確認。もし敵だった場合は捕縛を最優先に戦闘をしる。分かったな？」

「「「「はい「「「「」

千冬が通信を切ると一夏のもとに今度は悠夜からプライベートチャネルで通信が入った。

『一夏』

『ん？ どうしたんだ悠夜？』

『どうしたじゃねえ。お前も気づいてるだろ？ 箒のやつ自分専用』

のISをもらった嬉しさかもしねーがあの日からずっと浮かれてやがる』

『ああ』

そう。箒は浮かれている。束から専用機をもらったあの日から箒は雛鞠には負けたものを、私はセシリアたちなどには負けない。強いのだ。と、口癖のように言っており、いつもの冷静さは今の箒には見えなかった。

『気持ちは分からなくはねーがへたしたらあいつ・・・死ぬぞ』

『大丈夫。箒が危なくなったら俺が体張って守るさ』

『ああ、頼んだぜ』

悠夜はそういうとプライベートチャンネルを切り、一刻も早く一夏たちの応援に行こうとスピードを上げて行つた。そしてしばらく海と空の青が続く中、ついに目標のISが見えた。

「！ あいつか。止まれ！」

するとISは素直に悠夜たちの前に止まった。そのISは暗い灰色の装甲をしており左手には大きな黒い盾、右手には大きな黒い鎌を持っていた。そしてそれに乗っているのはISの装甲と同じ灰色の髪で悠夜たちと同じくらいの年の少女であった。

「お前は誰だ？」

「おー。あいつの言う通りホントに来たよ。すごいな」

悠夜は質問をするが少女は完全に無視している。

「はよ質問に答えろや」

「うーん、でも緑が来たのは予想外だったなー。あとであいつに文句言っておこう」

「おい、聞いてんのか」

その瞬間、少女からとてつもない殺気が放たれた。

「うるさいなー、ちょっと黙っててよ」

強大な殺気。とっさに悠夜たちは武器を構える。すると少女からの殺気は収まった。

「ま、あたしも無視したのは悪かったかな？　じゃあ教えてあげる。

あたしの名前はトレス・ラビール」

「トレス・ラビール……」

「『ファントム・タスク亡国機業』っていえば分かるかな？」

ガキン！！！！

ファントム・タスク亡国機業。その言葉がトレスの口から出た瞬間、悠夜と雛鞠はトレスに切りつけた。だがトレスはそれを鎌と盾で防ぐ。

「『あいつ』のこと知ってたんだな？」

「洗いざらい吐いてもらおか」

「おお、怖い怖い。そんなに食ってかかってくるとは。ニーナのやつ相当なことしたんだな」

「黙れ！」

悠夜は一気にビットを八基全部パージし、そのすべてをトレスに向かわせる。雛鞠も六本の槍『椿』をすべて使い攻撃をする。

「軽い攻撃だなー」

しかしトレスは雛鞠の攻撃を一寸の狂いもなく避けながら一気に悠夜のビットを四基破壊した。

「くっ！」

「攻式壱ノ型・薔薇！」

そう言うと雛鞠は楓を二振りのビームブレードに形成にし、トレスに向かって振る。トレスは雛鞠の攻撃を盾で防ぎ、雛鞠の横腹を思いつき蹴った。海面に打ちつけられた雛鞠は大きな水柱を立てる。

「オラァ！」

雛鞠がやられている隙に背後に回った悠夜はクレイモアを横に払うようにして切りつける。だがこれもトレスにはお見通しのようでこちらを見ずに鎌で防いだ。そしてトレスは黒い盾から悠夜のクスイフィアス3を上回るビームを発射し悠夜も海面に叩きつけられた。

しかし悠夜は怯まず水中でクスイファイアス3とサイクロン・ロングモードをトレスに向けて連射した。流石にこれは予想外だったらしいトレスは悠夜の攻撃をもろに受け、黒煙を巻き上げた。

「まだや！」

「なに！？ クツ！」

黒煙を振り払い悠夜にまたビームを放とうとしたトレスは楓を攻式式ノ型・牡丹ぼたんにし、突撃してきた雛鞠ひなまきにいち早く気づき、盾で防いぐ。しかし勢いは殺せず十数メートル吹き飛ばされた。そしてそこには悠夜があり、クレイモアを構えていた。

「……終わりだ……グッ！」

『あたし……りな……』

いままさに切ろうとしたその時、悠夜の頭の中から時々聞こえる少女の声と頭痛が一瞬の隙を作った。それを見逃さないトレスではない。悠夜はその隙を突かれ、飛ばされた勢いに乗せたトレスのタックルをくらった。

「センス！ どないしたん！？」

「なんでもない。それより集中しろ」

そう言うと悠夜はもう一度クレイモアを構えトレスに向かっていた。しかしまた襲う少女の声と頭痛。それをこらえて悠夜はクレイモアを振る。だが逆に悠夜は弾き飛ばされてしまう。

「グッ！」

「へー。もう覚醒し始めてんだ。早いね」

「な……んのことだ……」

「えー、ニーナから聞いてないのー？ まあ、この状態だともうすぐだからあたしも教えてあげない」

「ふざ……けるな！」

「ほら、あなたの覚醒を助ける出来事がまた起こったよ」

そう言うとトレスは一瞬にしてその場から消えた。

「……！ 待て！」

「一夏……！」

悠夜がトレスを追いかけてしまったその時、雛鞠の音が響きその方向を向く。そして見てしまった。福音を追っていたはずの一夏が福音の攻撃から筭をかばって落ちて行く姿を。

「……！！！」

炎・血・エレベーター・倒れる人・甲高い笑い・赤・白。フラッシュバックする映像が悠夜の頭を支配する。そして聞こえるはつきりした少女の声。

『あたしと代わりなよ。全部壊してあげるからさ』



す。それが自分の血だと気付いた時には箒は紅椿を強制解除され海に向かって落ちていた。

「箒！」

海に落ちる直前、なんとか雛鞠が箒をキャッチし助けるが一夏の方は海に落ちてしまったようだ。すると白い黒神をまとった悠夜が雛鞠の方にクスイフィアス3を放ちながら接近してきた。

「センス！ やめて！ あいつなんか支配されんで！」

雛鞠の言葉が届かないのか悠夜は止まる気配を見せない。

「くっ！ 守式参ノ型・椿！」

悠夜と雛鞠の間に六角形のビームシールドが現れる。しかし悠夜はそれをたった一振りで破壊した。

「守式伍ノ型・紫陽花！」

「守式六ノ型・薄！」

「守式八ノ型・洞庭藍！」

ことごとく破壊されていく雛鞠の技。ついに楓はボロボロになりあと一回しか技を出せないものとなった。

「くっ、もうこれしかない。ちょっと我慢しーや、センス」

そう言つと雛鞠は構える。



「特式七ノ型・冬葵<sup>ふゆあおい</sup>」

すると悠夜の周りを六本の楓が囲み、一斉に悠夜に刺さった。

「ガア!？」

そして一気に黒神のシールドエネルギーが0になり黒神は強制解除された。

「おい! どうなっている! 黒川たちはどうした!？」

「ダメです! オープンチャンネルもプライベートチャンネルもつながりません!」

「もういい! 私は行くぞ!」

「何を言ってるんですのラウラさん! 今悠夜さんたちがどうなっているのかすら分からないのに!」

悠夜の叫び声が千冬たちがいる大座敷に響いた後、悠夜たちの通信が突然切れた。ラウラは悠夜たちを助けるために大座敷を出ようと

しているがセシリアたちに止められている。

「離せ！ お前たちは悠夜たちがどうなってもいいのか!？」

「いいわけないじゃない!! あたしだって今すぐここを飛び出したいわよ!!」

「織斑先生！ 僕たちに出撃の許可を!!」

「くっ！ これよりお前たちに黒川他四名の搜索を依頼する！ 今から五分後、海岸に集合。そして……ドーーーーー！！！！！！」

その場にいた全員が驚き音のした方へ行くとそこには一夏と箒と悠夜を背負ったボロボロの雛鞠がいた。

「ハ……ハハ……。ちょっと……休ませてくれへんかな……」

「ヒナ!!」

「早く救護班を！」

「は、はい！」

「一人は軽い軽傷だが残り三人は命すら危ない状況だ。急げ！」

「悠夜！ なんであんな髪の色白くなってんのよ!？」

「そんなこと今はどうでもいいでしょう！ 鈴音さんは一夏さんを

運んでください！ わたくしは尊さんを！」

そうして四人は病室に運ばれていった。

## オリキャラ設定2（前書き）

第十六話の『軋み』の後、こおりさんからキツイアドバイスを頂きました！ そのアドバイスを参考にしこれからもがんばっていきますのでどんどん意見やアドバイスをください！

## オリキャラ設定2

鈴原 雛鞠（すずはら ひなまり）

・女

・17歳

・緑色の髪に緑色の目をした超美少女（自称<sup>スーパービジュアル</sup>）。容姿は『魔法少女リリカルなのは』の八神はやて。

・大阪生まれの大阪育ちで悠夜のゼロ幼馴染。悠夜のことを『センセ』と言う。ISの適性が高いことが分かり大阪からIS学園にやってくる。大阪弁を使い、性格は無駄に明るいがやる時はやる悠夜たちのムードメーカー。悠夜と同じように一夏と鈴音のクラスマツチで乱入してきた真紅のISを憎んでいる。

緑神（シウニン・カムイ）

・第三世代

・所有者：鈴原雛鞠

・子供の頃悠夜にもらったIS。若葉のような緑色の装甲をしており、遠距離装備はなく装甲と同じ色の六本の槍、『楓』（キングダムハーツのザルディンの槍）を使って戦う。楓は基本先端にビームブレードを出しているが攻式・守式・特式などを使うことにより、楓が連結し、さまざまな能力を発揮する。型は現在それぞれ八型ま

である。

・攻式

壱ノ型：薔薇（ばら） 一本の楓のエネルギーを他の一本に移すことでビームブレードの大きさを倍にする。本数が多ければ多いほどビームブレードは倍になる。

弐ノ型：牡丹（ぼたん） 一本の楓の先端に残りすべての楓が集まり、一本のランスを形成する。

参ノ型：?????

四ノ型：百合（ゆり） 楓を何本か縦につなげ先端にエネルギーの斧を作り上げる。楓をつなげればつなげるほど斧は巨大になる。

伍ノ型：?????

・守式

壱ノ型・弐ノ型：?????

参ノ型：椿（つばき） 六本の槍で正六角形のビームシールドを作る攻撃を捨てた防御。

四ノ型：?????

伍ノ型：紫陽花（あじさい） 二本の楓を交差させ交点から円状のビームシールドを形成する。

六ノ型：薄（すすき） 楓を振ると、振った場所にシールドが出来る。何度もその場で振れば何重にでも張れる。

七ノ型：?????

八ノ型：洞庭蘭（とうていらん） 楓のエネルギーを使い自分の周りに半径三メートルの球体シールドを張る。その間は自分も攻撃できない。

・特式

壱ノ型了六・八ノ型：?????

七ノ型：冬葵（ふゆあおい） 六本の楓のエネルギーを全て使い相手の動きをしばらく封じる。この型は悠夜のために作られた。

・ワンオフ・アビリティ単一仕様能力：?????

トレス・ラビール

・女

・16歳

・『亡国機業』の一員。臨海学校の時悠夜と雛鞠の前に現れる。悠夜の頭に響く少女の声に付いて何か知っている様。実力はかなり

のようでまだ謎が多い。

???

・ 第三世代

・ 所有者：トレス・ラビール

・ 暗い灰色の装甲のトレスが使っているIS。大きな鎌と攻撃力の高いビームの放てる盾をいつも持っており物々しい雰囲気を持っている。

・ ワンオフ・アビリティ 単一仕様能力：???



第十八話 仲間（前書き）

なんか変なところで終わった……。では始めます。

## 第十八話 仲間

……ここは……どこだ？

白い空間。そして浮遊感。自分が今上を向いているのか下を向いているのか、立っているのか寝そべっているのか。頭がボーっとして分からない。

……俺、死んだのかな……

悠夜がそう思っているとだんだんと白い空間が大海原へと変わっていく。何処までも続く海。悠夜はゆっくりと海の上に降り立った。

「なんで俺こんなところにいんだろ」

「ここはあなたの精神世界」

すると悠夜の背後から何故か聞き覚えのある声が聞こえた。

「久しぶりね。悠夜」

「誰だ？ あんた」

「ふふ。『あなた』って言った方がしっくりくるでしょうね」

「う、アイタタタタ……」

「『『『ヒナ（さん）！！』』』」

「ん？ あれ、ウチ、何が……」

旅館の医療室。悠夜たちが寝ているなか雛鞠だけが目を覚ました。

「ヒナはボロボロの状態で悠夜と箒と一夏。三人を抱えて戻ってきたんだ」

「ああ、そやったな……」

「ねえヒナ、悠夜に何があったの？」

鈴音がそう言うと雛鞠は今も箒たちと同様に眠っている悠夜の方を見ながら暗い顔になる。

「少し、昔の話していいか？」

雛鞠には二人の幼馴染がいた。一人目は黒川悠夜。そして二人目は外国から来たというシオン・アルフォードだった。シオンは才色兼備という言葉をそのまま人にしたような子供で、一度読んだものはどんなに日にちがたっても暗唱ができ、運動神経も二・三歳年上の子とでも圧倒的差で勝ってしまう。当時何をやっても一番だった悠夜に初めて苦汁を味あわせたのも彼女であった。そんなシオンは家が近かったせいも雛鞠と悠夜と特に仲良くなった。そんなある日、事件が起きた。

「はあっ、はあっ、はあっ」

雛鞠は悠夜の父と母がISの研究をしている研究所に向かって走っていた。研究所が何者かによって襲われていて、悠夜もその研究所にいるのだ。シオンは前から悠夜にもらっていた試作品の真紅のISを展開させ先に研究所に向かって行った。世間には公になつてないがそのころから悠夜もISを動かすことができ、雛鞠だけがISを展開できなかった。雛鞠はそんな自分が悔しかった。

「はあっ、はあっ、．．．着いた．．．」

そうしてやっと着いた悠夜の両親の研究所は黒い煙がところどころ上がっており、炎まで出ている。しかし敵の気配は全くしなかった。

「これ、全部シオンがやったんかな．．．」

研究所に入るとISの残骸と一緒にここを襲ったであろう人たちが血を流して何人も倒れていた。雛鞠はその人たちの横を通り過ぎる





「!!!!!!」

少女の言葉とは思えないような言葉に雛鞠はたじろぐ。

「ま、あたしたちの目的は手に入ったんだし。あたしは帰るわ。いいもんも拾ったし」

元の口調でそう言うと少女はシオンのISのまま上空へ飛んで行った。

「待ち!!」

雛鞠は追いかけてよとすると相手がはるか上空。追いかけてよにも追いかけれなかった。すると今度は悠夜のISをまとった少女が口を開いた。

「ヒナ」

「……あなたに『ヒナ』って呼ばれる筋合いはないわ」

「あら？　あたしはあなたがベタ惚れの人なのにな？」

「あなたがセンセなわけないやろ!!」

「ふふ。別に後で信じざるを得ないからいいけど。じゃあねヒナまたどこかで会えるかもしれないわね」

するとISが解除する時の光が放たれそこから現れたのはさっきの少女ではなく傷だらけの悠夜であった。

「センセ!？」

雛鞠は悠夜のもとに駆け込み息があるかどうかを確認すると突然頭の中からさっきの少女の声が聞こえた。

『あたしはいつも悠夜の中にいる』

『悠夜に心の際があれば何時でもあたしは悠夜の体に乗っ取るわ』

『そうならないように精々悠夜を抑えてみなさい』

「……………やったる……………」

そう言うとスツと立つ雛鞠。

「ウチがセンセを抑えたる。アンタにもう出番はないで」

『ふふ。楽しみにしてるわ』

そして研究室には血の匂いだけが残った。



「けど、結局は何度も乗っ取られかけてもーた。そして今回も。センセがその間の記憶がないことがせめてもの救いやった。ウチはセンセが暴走するたんびに酷いことをしたんや」

一通り話した雛鞠は悲しそうな目で自分に掛けてある掛け布団を見つめる。

「でもそれは仕方のないことで・・・」

「仕方のないことやないよ。暴走の原因はほとんどウチがシオンのことを思い出させたことなんやから」

「」「」「」「」「」「」

「織斑先生はこのことは？」

「知ってるで。なんでか知らんけどな」

雛鞠がそう言うとしばらくその場は沈黙に包まれた。今ある音は悠夜と一夏と篝の心電図の音だけである。するとラウラがいきなり立ち上がり、雛鞠の手首を掴んで部屋から引っ張り出した。

「ちょ、ラウラさん!？」

「どいどいくのー!？」

「待ちなさいよ!！」

ラウラは鈴音たちを無視し、中庭まで行き雛鞠をそこに放りだした。

「つつ、何すんねん!！」

「なんで今まで話さなかった」

「え?」

「なんで今まで私たちにそのことを話さなかったと言っているんだ」

「だって……これはウチら……ウチの問題やから……」

雛鞠がそう言った瞬間ラウラは雛鞠の胸倉をつかみ殴り飛ばした。

「私たちは仲間じゃなかったのか!？」

「「「「!」「」」」」

その言葉にその場にいた全員が動きを止める。

「なんでお前は一人で背負ってるんだ。なんで一人で落ち込んでいるんだ。今までは一人だったかもしれないが今は違うだろう!？ 私たちがいるじゃないか!！」

「ラ……ウラ……」

「そうよ! ようは私たちが負けないでそのシオンって子のことを思い出させなきゃいいんでしょ!！」

「僕たちなら出来るよ！」

「もし暴走してもわたくしたちが止めて見せますわ！」

「みんな……」

セシリアたちの言葉に雛鞠の目頭が熱くなる。雛鞠はなんとかそれをこらえニツと笑う。

「ラウラたちに来るか？　ウチの役割」

「あつたりまえよ！　あたしたちを誰だと思ってるの！？」

「国の代表候補制だよ？」

「それよりもヒナさんの仕事を全て取ってしまわないか心配ですわ」  
「！」

「やってみい」

そう言って笑いあう五人。しかししばらくするとその顔は真剣なものとなる。

「ラウラ、福音は？」

「確認済みだ。ここから30km離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたがどうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見した」

「さっすがドイツ軍特殊部隊！ やるわね」

「ラウラたちはもう準備は出来とるん？」

雛鞠の質問にラウラたちは当然といったような顔をする。

「何言ってるのよ。もうあたしは甲龍シエンロンの攻撃特化パッケージをインストール済みよ」

「こちらでも完了していますわ」

「僕も準備オツケーだよ。何時でも行ける」

「よっしゃ。じゃあ行くで」

「フツ。完全に命令違反だがな」

「気にしな―い気にしな―い」

そして五人が中庭から海岸まで行こうとしたその時悠夜たちの部屋から誰かが出てきた。

「ま、待ってくれ・・・」

それは壁にもたれかかりながら雛鞠たちのところへ行こうとしている筈だった。浴衣で外側からは見えないが悠夜に斬られた傷はひどく、今も痛むのか時々顔をしかめている。

「筈!」

「寝てないとダメじゃない！」

「私は・・・密航者を見殺しにしようとした。だが一夏は守った。そして私までも守ろうとして落とされた。力の赴くままに暴力をふるっていた私は悠夜に斬られて当然だったのだ。だから私はもう一度戦いたい。『暴力』ではなく、れっきとした『力』で・・・」  
箒の言葉を聞いたシャルたちはニツと笑う。

「よし。じゃあ箒も行くか」

「そのかわり傷口が開かない程度にやりなさいよ」

「また箒さんに包帯を巻きたくはありませんことよ」

「当然だ」

そう返す箒もニツと笑う。

「よし。じゃあ今度こそ行くぞ!!」

「「「「「はいうっしや（うん）（おう）（ええ）!!!!!!」」」」」

そうしてラウラたち六人は旅館を出ていった。しかしその姿を遠くから見つめる二つの人影があった。

「・・・行っちゃいましたね」

「そつだな」

それは千冬と山田先生だった。二人はラウラ達が騒ぎ始めたころからずっとその現場を眺めていた。

「あいつらは黒川の傷をいやせると思うか？」

ふと千冬が山田先生に聞く。

「黒川君の心の傷がどれほどのものかは私には分かりませんが、彼女たちなら出来るんじゃないんですか？」

「フツ、そうだといいたがな」

そういつて二人は姿が見えなくなるまで走っていく六人を見つめていた。

「『あなた』？ 俺ってことか？」

悠夜は目の前にいる白髪に黒いワンピースを着ている少女に言った。

「そう。私はあなた。でもあなたは私じゃない」

「わけ分からねーな」

少女曰く、自分は自分の精神世界とやらにいるらしい。

「んー、そーねー、じゃあ今から私は『ユウヤ』ってことでいいかしら」

「女なのにか？」

「だって私はあなたなのよ？」

埒が明かない。悠夜はそうつぶやくとハァーと盛大なため息を吐き真剣な顔をした。

「じゃあ本題に入らせてもらうが、俺の体に乗っ取ってんのはお前か？」

ドスのきいた声。しかしそれにひるむことなくユウヤはほほ笑みながら答える。

「ふふ、ひどいわねー。ヒナちゃん、あなたには暴走中の記憶はないと思ってるわよ？」

「あいつにはそれでいいんだよ。記憶があると知ったらあいつはもつと落ち込むだろーが。それよりもさっさと質問に答えろ」

すこし殺気を強くして言う悠夜。しかしユウヤのは変わらずほほ笑んでいた。

「そうよ。でもあとちょっとのところできっつも邪魔されるのよねー。ヒナちゃんに。いっそのこと殺しちゃおうかしら」

「てめえー……」

「なーんて。冗談よ。じょ・う・だ・ん。なにもしないわよ」

やーねと手を振りながら言うユウヤだが悠夜は変わらず険しい顔をしている。

「本当だろーな」

「ええ本当よ。心配性ね。……でも」

でも。その言葉に悠夜は眉をひそめる。

「でも？」

「私はいつでもあなたの体をねらってるのよ」

「なんか表現が卑猥な感じだぞ」

「あら？ 興味があるの？」

「あるわけねーだろ」

「残念」



冗談交じりにそう言うユウヤはクルツと後ろを向き歩きだした。

「おい、どこに行くんだよ」

「今回はあなたと話したかっただけだからもういいわ。十分話した」

「俺は聞きたいことがたくさんあるんだけどな」

「あなたの都合なんて関係ないわよ。じゃあね」

そう言ってユウヤは歩き出すが数メートル歩いたあと何かを思い出したように突然振りかえる。

「あ、そうそう………」

第十八話 仲間（後書き）

夏休み篇らへんにオリジナルストーリーを入れたいと思いますがどうでしょうか？ご意見お願いします。

第十九話 Fight on horizon(前書き)

よくよく考えたら雛鞠の型の名前書いてなかった。雛鞠の設定ちゃんとあってねー!!! 誰か良い名前を考えついたならどんどん送ってきてください!! あと雛鞠は15歳じゃなくて17歳です。

## 第十九話 Fight on horizon

「……………いた!! あそこ!」

シャルが指さす方向を他の五人が見ると確かにそこには夜の海に浮かぶ銀色、福音がいた。福音はこちらの存在に気付いている様子ですでに戦闘態勢に入っている。

「ウチと箒と鈴は接近戦、ラウラとセシリアとシャルはウチらの援護! さー、さっきやられた分を百倍にして返したるで!!」

「……………おお!!」

シャル達がそう言うのと六人は一気に散開しそれぞれの役目に徹する。

「……………はあああああ!!」

雛鞠、箒、鈴音の同時攻撃。しかし福音はそれをいとも簡単に避けてみせ、全36門の福音の主砲、『銀の鐘<sup>シルバベル</sup>』を放つ。そのあまりの多さに箒と雛鞠以外の四人は目を見開く。

「ちょっと! これは多すぎなんじゃないの!？」

「くっ、やはりデータだけでは実物を測れんか!」

「来るで!!」

全速力で避けるシャルたち。しかしこれでは攻撃が出来ない。雛鞠

は直撃覚悟で福音に向かって行った。

「ヒナさん!!」

「守式伍ノ型・紫陽花！ 攻式四ノ型・百合！」

雛鞠がそう言うのと二本の楓が交差し円状のシールドを作り上げ、残りの楓のうち三本を縦につなぎ合わせその先端から巨大なエネルギーの鎌を出現させる。そして福音の攻撃を最小限紫陽花で防ぎ自分の間合いまで接近し、雛鞠は百合を使いシールドバリアを破壊。福音の胴体に深い傷を付けた。

「!! 絶対防御が発動されていない!？」

「やはりこいつは無人機のような」

「ヒナ！ 危ない!!」

福音に攻撃を入れた喜びもつかの間、胴体に傷を付けたぐらいでは倒れない福音は雛鞠に回し蹴りをくらし海に叩きつけられまだあの時のダメージが残っていたのである。雛鞠のISが強制解除された。箒たちは海に浮かぶ雛鞠を助けに行こうとするが福音がそれを許さない。セシリアのスターライトMK?とラウラのレールカノンの狙撃を華麗に避けて箒たちの邪魔をする。

「くっ、邪魔だ！」

箒も雨月でレーザーを放出し攻撃をするがそれすらも避ける。そして福音は箒の雨月と空裂を掴みゼロ距離でシルバーベルを放とうとした。するといきなり福音の背中が爆発した。

「僕たちのことも」

「忘れてもらったら困るのよ!」

「すまない。鈴、シャル」

それは機能増幅パッケージ『崩山』ほうざんで破壊力が格段に強化された龍砲と連装ショットガン『レイン・オブ・サタデイ』を放った鈴とシャルであった。攻撃を受けた福音は一旦距離を置き、シルバーベルを放った。

「ウザったいわねこの攻撃!.....!!」

鈴音が愚痴っていると何時の間に接近していたのである。福音が突然目の前に現れ至近距離でシルバーベルを放ち甲龍のシールドエネルギーをゼロにした。

「鈴!」

落ちて行く鈴音をシャルが助けに行こうとするがまた福音に邪魔される。しかし今度はラウラが福音の羽に自身のワイヤーブレードを絡みつかせて動きを封じた。

「シャル! 今のうちに鈴音を!」

「うん!」

シャルはそう言うと急降下しなんとか鈴音を受け止めた。その直後、福音はラウラのワイヤーを引きちぎりワイヤーでラウラを引き寄せ

蹴り飛ばした。

「ぐっ、今だ!!! 箒!!!」

しかしラウラは自分が蹴り飛ばされるのは計算の内だった。ラウラが叫ぶと福音の上から雨月と空裂を持った箒が福音めがけて急降下し福音の翼を切り離した。しかし切り離したのは片方だけ。福音が箒に片方だけの翼でシルバーベルを放とうとしたその時、福音の翼に何か突き刺さりシルバーベルの発射を防いだ。それは緑神シウニフ・カムイの楓だった。

「これがウチの最後の攻撃や! やったれ箒————!!!」

「はあああああああ!!!」

そして箒は刺さったままの楓を掴みそのまま切り上げ残りの片方の翼も斬り落とした。浮かぶ力を失った福音は重力に従い海へと吸い込まれていった。

「……………やったのか?……………」

「……………いや! まだだ!!!」

その瞬間、巨大な水柱を立て海から福音が再び姿を現した。

「まずい!!! 第二形態移行だ!!!」  
セカンド・シフト

第二形態移行して全身からエネルギーの翼のようなものを生やした福音はさつきよりも数倍の速さでシャルのところまで接近しエネルギーの翼でシャルを包み込んだ。

「シャル!!!」

「きゃああああああああああ!!!」

福音がシャルを解放するとすでにシャルは気絶しており海へと落下していった。箒たちはシャルを助ける暇もなくさらに激しくなった福音の攻撃を必死になって避けている。しかしセシリアは福音の攻撃を避けきれず直撃し、先ほど海へ落下していった。そして今、箒は福音に首を掴まれていた。

「ぐっ……が……」

「箒を離せ!!!」

ラウラは箒を福音から離そうとして福音に攻撃をするが簡単にあしらわれる。そして福音は頭上にエネルギーを溜め始めた。箒はなんとか抵抗をしようとするが福音の握力にはかなわない。死を覚悟したその時箒の頭の中に愛しい人の顔が浮かんで消えていった。

「た……すけ……て………悠夜!!!!!!」

『呼んだか?』



ガキン！！！！！！

何者かの二つの斬撃に福音は箒の首を絞めていた手を離し翼で防いだ。解放された箒はISを強制解除され海へ落ちようとするが誰かが箒の手首をつかみ抱き上げた。箒はうっすらと目を開けるとそこには小さいころから現在まで一度も忘れたことのない人物がいた。

「ゆ……うや……」

「おーおー、ずいぶんとボロボロじゃねーか。どうするー夏？」

「死刑だな」

「よっしゃ、じゃあ即座に刑執行だ！！」

そう言つて第二形態移行した白式をまとつた一夏と白く大きなブレードを持った悠夜は福音を睨んだ。

「・・・なんだ？」

広大な海の上、去り際に振りかえったユウヤに悠夜は聞いた。

「あなたに聞きたいことがあったのを忘れてたわ」

ユウヤはそう言うところらに向き直り悠夜を見る。

「あなたは何のために力を欲すの？」

「力を？」

「そう。何のために・・・」

「そんなの決まってる。『もう二度と自分せいで他人が傷つくのを見たくない』だから俺は力を欲するんだ」

「本当にそれがあなたの理由？」

「何？」

ユウヤの言葉に悠夜が眉をひそめる。

「あなたはシオンを殺したあの『ニーナ』という女性を憎んでいる。

殺したいと思っっている。『シオンを殺したニーナを殺す』。これがあなたが力を欲す本当の・・・「違う!!!」

悠夜はユウヤの言葉をさえぎる。

「確かに俺はあのニーナってやつを殺したい。だけどそれだけのために俺は強くなりたいんじゃない!!!」

「ふふ。どうだか」

「黙れ!!!」

そしてしばらく間が空いた後ユウヤが口を開く。

「まあいいわ。聞きたいことはそれだけだし。そうね・・・ここまで来てくれたお礼に私の力を少しあなたに分けてあげる」

「・・・力を？」

「そう。その力であなたは皆を守る鬼となるか、皆を破壊する鬼となるか・・・楽しみね。じゃあ、今度こそさようなら」

ユウヤがそう言うと悠夜の体が急に浮いた感覚になり意識が薄れていった。

「ハッ！！！」

悠夜が気がついたとき、日が半分沈んだ頃だろうか外は薄暗くなっ  
てきていた。悠夜は自分がここに運ばれたことを理解し周りを見る  
とこの間の入り口に千冬がふすまにもたれかかりながら立っていた。

「あいつに会ってきたのか？」

「！！ 千冬さんは俺の中にいるあいつについて何か知ってるん  
ですか？」

「ふっ、さあな」

「千冬さん……あなたは……」う、ううん……「一夏？」

悠夜が一夏の方を見ると一夏も目を覚ましたようだった。

「あ、あれ？ 悠夜に千冬姉え、なんでここに……ていうかあ  
いつらは？」

「あいつら？ シャル達のことか？」

「いや、なんか浜辺みたいなところでワンピースを着た女の子と鎧を  
着た女の人が『力を欲するか』って聞いてきたんだよ」

悠夜は一夏の話の話を聞くと千冬の方を見る。しかし千冬は無言で首を  
振った。どうやらこれは本当に知らないらしい。すると千冬が口を  
開いた。

「で、お前はなんて答えたんだ？」

「えーっと、友達を・・・いや、仲間を守るために俺は力を欲するって答えた気がする」

「ふん。甘いな」

「いいんだよ。これが俺だ」

「ま、その通りだな」

そう言って笑いあう三人。ふと悠夜があることを思い出す。

「あれ、ていうかマジでシャルたち何処行ったんだ？」

「あいつらなら仲良く福音を倒しに行ったよ。・・・無断でな」

「なっ、ヤベーじゃねーか!」

「俺たちも行くぞ!」

立ちあがって言う二人はダッシュでその部屋から出て行った。しかし数分した後何故か二人は千冬のもとへ戻ってきた。

「忘れてた!!! 千冬さん(姉え)、許可をお願いします!」

「ちっ、覚えていたか・・・よし、今からお前たちは鈴原他六名の応援にあっただけでもらうためISの使用を許可する。・・・行け!」

「舌打ちはともかく・・・ありがとございます!」

そう言って今度こそ一人は旅館を出て行った。

第二十話 これってただの八つあたりだろ！！（前書き）

なんかサブタイトルを考えるのが面倒になってきた……。始めます。

第二十話 これってただの八つあたりだろ！！

「悠夜！！」

「一夏さん！！」

「ったく……来るのが遅いで……」

口ぐちのそういうみんなを横目に悠夜は福音を睨みながら言う。

「ラウラ、篝たちを安全なところへ連れてってくれるか？」

「ああ、でもいいのか……」

「大丈夫。俺と悠夜だけ？ こんなやつすぐにやっつけてやるよ」

一夏がラウラに笑いかけるとラウラも笑い返した。

「フツ、そうだな。じゃあ、後は頼んだぞ」

「」「おっ」

そう言うとラウラは悠夜に渡された篝と海に落ちていったみんなを安全な場所に運びに行き、悠夜たちは福音に向き直った。

「よっ。待たせたな」

「さあ、ここからは俺たちの」



「一方通行だ」

「大丈夫か？」

悠夜たちが福音との戦闘を始めたころ、ラウラは他のみんなを近くの海岸に運んでいた。

「ええ、なんとかね」

「ホンマ、どうなるかと思ったわ」

「悠夜さんたち少し来るのが遅いですわ！」

「それさっきウチが言ったわ」

「わたくしにだって愚痴を言いたい時もあるんですのー！」

悠夜たちが来た安心感で少し気持ちの余裕ができた六人。しかしし

ばらくするとその顔はだんだんと真剣なものとなる。

「悠夜たち、前より強くなってる……」

「一夏は第二形態セカンド・シフト移行しているしな」

ラウラは左手への多機能武装腕『雪羅』の発現と大型化したウイングラスターが4機備わっている白式第二形態・雪羅と、両手に刀と剣の中間のような純白で見るものを魅了するほどに美しい形をしたブレード、『白孔雀』を見ながら言った。

「（私は、悠夜たちの足手まといなのだろうか……この紅椿でさえも……）」

一夏たち二人が戦っているところを見ながら筈が思ったことは、他の五人の心の中にもあったものだった。

「オラアー!!」

白孔雀で福音に斬りつける悠夜。それをギリギリで避ける福音だが

避けた先には一夏がいた。一夏は右手の雪片式型と左手のブレードに展開した雪羅で福音の背中を斬った。やはり福音には絶対防御が発動されず、装甲に傷をつけて二人と距離を取る。そして一对のエネルギーの翼から何発ものエネルギー弾が放たれた。

「悠夜！ 危ない！」

そうシャルは叫ぶがそれは杞憂でしかなかった。二人はまるで流れるように迫りくる無数の弾丸を避け、福音に接近する。そして今度は左右からの同時攻撃で福音に斬りつけた。

「はあああ！！！！」

そして二人は福音が防ごうとして自身を覆うエネルギーの翼ごとそれぞれ左右の腕を斬り飛ばした。腕を亡くした福音は五体満足で初めて得られる浮遊状態でのバランスを失いよろける。その隙を突こうとした二人だが流石は代表候補制五名＋専用機持ち一名を倒したIS。それは譲ってはもらえずまたもや距離を置かれてしまった。

「やべーな……。エネルギー残量がもうあと少ししか無え」

「ここらで一気に決めたいところだが、一夏、零落白夜はまだ使えるか？」

「あと一回が限度だな。その一回も時間は少ない」

「じゃあ、その一回でさっさと終わらせて早くみんなで帰ろうぜ！」

「おう！ー！ー！」

一夏が悠夜にそう答えると零落白夜を発動し機体が光る。そして二人は最後の悪あがきのように何度も見た福音の銀の鐘シルバークロを一発も当たらず避け、正面にまわり零落白夜の状態の雪片式型と白孔雀を福音のコアに思いっきり突き刺した。

「うおおおおおおおおお！！！」

コアに突き刺したまま突き進む二人。浜辺に衝突した後もその勢いは衰えることなく逆にさらに強くなる。

「これで……終わりだあああああああ！！！！！！！！」

そして二人の雄たけびと共に福音のエネルギーが0になり、背中エネルギーの翼も消え、福音はついに活動を停止した。深い安堵のため息を二人がつくと周りには筈たち六人がいた。

「終わったな」

「ああ、やっとな」

「さっさと帰ってメシ食いてーぜ」

「じゃあ、帰ろうか」

「そうだな……っと、お前らあとで千冬さんの部屋行っとけよいぎ帰ろうとした時、悠夜が思い出したようにラウラ達に言う。その言葉を聞いて一夏も“ああ”というふうな顔になるがとうの六人

は“何故？”という顔になっている。

「「「「「「は？」「」「」「」

「お前ら命令違反でここに来たんだろ？ 千冬姉えのあの様子じゃ、反省文20枚はくだらないな」

「「「「「あ………あ—————!!!」「」「」「」

「「やれやれだ」

やっと自分たちのでかしたことを思い出した六人はこれからあるであろう千冬からのお仕置きに少し帰りたくないと思ってしまう、そんな六人を悠夜と一夏は心の中で合唱するかなかった。

「あつ！！ 悠夜テーマ俺の刺身取つたな！！」

「へっ、よそ見してんのが悪……ヒナ！お前何勝手に俺の鍋の具取つてんだよ！」

「よそ見してるセンチが悪いんやー」

初日の夕飯風景と何ら変わりないこの風景。しかしこの三人以外のメンバーはげっそりとしておりまったく食べ物に手をつけていないそれもそのはず。あのあと旅館に帰った悠夜と一夏以外の六人は仲良く千冬のOHANA SHIを受け元気など出るはずもなかった。今もなお悠夜たちとおかず争奪戦に参加している雛鞠はそのOHANA SHIを受けていたのにもかかわらず元気に大広間を走り回っている。流石にその底なしの気力と体力は尊敬するものだった。

「なんでヒナはあんなに元気なの……………」

「なんでも『もっとキツイOHANA SHIを何回も受けた』  
と言っていましたわ……………」

「どのようなものなのだろうな。その『もっとキツイOHANA  
ASHI』というのは……………」

「知りたくもないわよ……………」

「同感だ……………」

上からシャル・セシリア・ラウラ・鈴音・篝の順で疲れ切った表情をしながら暴れまくって千冬に鉄拳制裁をくらっている悠夜と一夏と雛鞠を呆れて見ていた。

「はあゝあ。白式と黒神には驚くな。まさか操縦者の生体再生が可能や第二形態移行してもいないのに全スペックが大幅に上昇してるだなんて。まるで・・・まるで、白騎士のようだな・・・やあ、ちーちゃん」

夜。綺麗な星空の下、崖の上でディスプレイを広げながらつぶやいていた束の独り言を千冬がさえぎった。千冬は崖に生えている一本の松の木の幹に寄りかかっている。

「コアナンバー001。お前が心血を注いだ、一番目の機体にな」  
「・・・そうだね」

「たとえばの話がしたい。とある天才が、一人の男子を高校受験の日にISがある場所へと誘導できたとする。そこにあったISをその時だけ動くようにしておく。すると、世界でたった一人だけの男のIS操縦者の完成というわけだ。いや、今は二人か・・・」

フツと千冬のいつもの笑い方で笑うと束は同じように笑いながら言う。

「ま、黒神はゆーくんが自分で作ったから問題ないけど、白式の方はなんで動くのか私にもわからないんだよねー」

そうか。千冬はそれだけ束に言うとならばとまた千冬の口が動く。

「こんどは別の話だ。とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと思っている。そこで用意するのは、専用機とどこかのISの暴走受験だ。暴走事件に際して妹の乗る新型の高性能機を戦に加える。妹は華々しくデビューというわけだ。まあ、実際は『華々しく』というわけにはいかなかったがな」

「凄い天才がいたもんだねー」

「ああ、かつて十二カ国の軍事コンピュータをハッキングした……な」

千冬がそう言うと二人はしばらく沈黙したが、束がその沈黙を破った。

「ねえちーちゃん、今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「……そう」

「……束？」

千冬が束の方を見ると束がいた場所にはもうその姿はなかった。



「つつ」。千冬さんも少しは加減つてもんを知らねーのか」

一方悠夜は痛さの残る頭をさすりながら一人海岸にいた。夜の海岸は昼のときとは違い暑さではなく涼しさを与えてくれる。その涼しい風に浸りながら悠夜が夜空を見ていると後ろに誰かの気配を感じた。

「箒か？」

「突然いなくなったと思ったたらこんなところにいたのか。悠夜」

悠夜の後ろにいたのは箒だった。箒は悠夜の隣まで行きストンと座る。

「ああ、すこし外にいたくてな」

「そうか」

ザザァン・・・ザザァン・・・。波の音がよく響く。その波の音に重なるように悠夜が声を出す。

「・・・じゅめんな」

「え？」

「いや・・・俺、暴走してたっつってもお前を斬ったわけだし・・・」  
「覚えているのか？」

篤は悠夜の言葉に目を見開く。なぜなら雛鞠は暴走していた時を悠夜は覚えていないと薄い意識の中で聞こえていたのでまさか謝ってくるとは思わなかった。別に謝らなくてもよかったのだ。これは自業自得で負った傷なのだから。

「ああ、でもヒナには内緒にしておいてくれよ？ あいつ、もし俺が覚えてること知ったらへんな風に落ち込みそうだからよ。それよりごめんな？」

篤は心底悠夜らしいと思った。常に他人のことを思っている。他人のために強くなっているのだ。そしてそんな悠夜に私は惚れている。これは誇らしいと思った。

「やはり優しいのだな。悠夜は」

「そうか？ 俺はただ自分ができることをしてるだけなんだけどな」

「それが優しいと言っているのだ」

「んー、わかんね」

「ふふ。まあ斬ったことは許してやる。私も一夏に謝ったらデロピで許してもらえたしな」

「デコピンて・・・」

ハハハ・・・と笑う悠夜。箒は先ほどこの黒川悠夜という人間に惚れたことは誇らしいと思っただが同時に不安もあつた。こんな私が悠夜に恋をしていいのだろうか？　こんな『力』を『暴力』にすり替えてしまう女が『他人のために強くなる』男に・・・いや、今はそんなことを考えるのはよそう。この『他人のために強くなる』男はまたいずれ暴走するかもしれない。しかしそれはさせない。私たちが、決して。そして私たちでこの男のこの問題を解決したら自分の問題の取り組もう。箒は隣に座る男の方を見ながらそう思った。自分の恋の相手を見ながら。

「・・・って、悠夜？」

しかし箒の決心とは反対に悠夜はのんきに座りながら眠っていた。その少し幼さの残る寝顔にすこし顔がゆるんでしまう。

「私が・・・私たちが守ってやる。悠夜」

そう言うと箒の顔が徐々に悠夜の顔に近付いている。少しずつ近くなる悠夜の顔に箒は顔を真っ赤にさせながら近づける。そして箒の唇が悠夜の唇に触れようとしたその時、

コッソッ

「へ？」

箒のデコになにか青いものが当たった。その浮遊する青いものをよく見るとそれはセシリアのブルーティアーズだった。

「うおおー!!」

間抜けな声でびっくりする篝。よく見ると周りにはISを展開し凄まじいくらいの黒い笑みをしたセシリアたち五人がいた。

「何時まで経っても戻ってこないと思ったら・・・」

「なーにしてるんや?」

「篝ー、ちょっと抜け駆けのしすぎかなー?」

「これはお仕置きが必要のようね・・・」

「フフ、フフフフフ・・・」

どどん殺気が強くなっていく五人。後半の二人なんかもうすでに病んでいる。そんな騒ぎに目が覚めたのか目をこすりながらシャル達の方を見る。

「あれ、いつの間にか寝て・・・ん? なんでお前らがここにいないだ?」

「「「「「あなたは・・・もう少し警戒しろー」」」」」

「「「「「」」」」」

「のわ!!!! ちょ、え? 何!?!?」

「「「「「問答無用!!!!」」」」」

そう言ってそれぞれの武器を構え言葉通り問答無用で撃ってくる離

鞠たち。悠夜は必死にそれを避け箒を抱え走り出す。

「逃げるぞ箒!!」

「ふえ!?!?!」

「『『『『待て————!!』』』」

「不幸だ————!!!!」

悠夜の叫びが波の音と混ざって消えていった。

こうしてES「銀の福音」の暴走事件、『福音事件』は幕を閉じたのであった。

「いや、ほんつとに、平和だな」boy-夏

第二十一話 学園黙示録？ ああ、たぶんこれがそうなんだろうな……（前

思いつきで書いてみました！！！！ 若干百合っぽいです！！

第二十一話 学園黙示録？ ああ、たぶんこれがそうなんだろうな……

事件が起こった前の晩、俺は珍しく一睡もできなかった。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……」

「はあっ、はあっ、クツ……はあっ、はあっ、はあっ……」

「急げ！！ こっちだ」

「悠夜！ 危ねえ！！」

「クツ、すまん！」

ドカツ！！！！

「……やっぱり、こいつらを止めるには気絶させるしかねえ」

「………。これってなんだよ………なんだってんだよー  
――！！！！！！！！」

『織斑クーーーーーン！！！！／／／／／』

『黒川クーーーーーン！！！！／／／／／』





「あれ？　そういえばヒナは？」

時は少し進み昼食の時間。食堂で悠夜たち八人が食べていて、悠夜はトイレのために少し席を立って戻った間に雛鞠が居なくなったとに気付く。

「ああ、ヒナなら」

「なんかクッキー焼いたみたいだから一年生全員に配ってくるって・・・」

「何だと!？」

シャルの口から『ヒナ・クッキー・配る』という単語を聞いた瞬間、悠夜は凄い形相となり周りをキョロキョロとし始めた。

「え!？　ど、どど、どうしたの悠夜!？」

悠夜のあまりの慌てぶりにその場にいた六人は呆気にとられている。しかし悠夜はなおも何かを探すように周りを見ていた。と違っていたら突然こちらを振り返った。

「クッキー!！」



食べてないが雛鞠の作ったクッキーは色はともかく美味しかったのだ。分量・焼き具合・絶妙な甘さ・そして食べた時のサクツツとした感触。どれをとっても申し分なかった。それは料理上手の筈でさえも唸るも度に。

「ああ、美味しいのは分かる。だけどその先がダメなんだ」

「……………その先?」「……………」

「あいつのポイズンクッキングは見た目はともかく味は美味い。たぶんどんな凄腕パティシエにも勝るだろう。だがな、あいつの料理を食べた人間はそのあととてつもない副作用を味わうことになる」

「その副作用って?」

「俺が見てきた中では、『糖分が高いものしか食べたくなくなる』、『体が壊れるまで足が止まらず走り続ける』、『どんなに痛くても笑いが止まらない』などたくさんある。そしてあいつはこのことを知った上で他人に渡すんだ」

「……………(なんて迷惑な子!!!)」「……………」

「この副作用はランダムに100%起こる。このクッキーは何が起こるか……。だからもし他人に迷惑をかける副作用だったらヤバいから早くお前らは自分の部屋に……。くつろかわくーん」  
『うおっ!!!』

悠夜が雛鞠のポイズンクッキングに付いて説明していると突然悠夜の後ろから誰かが抱きついてきた。それは悠夜と同じクラスの少女Kだった。

「ちょ、お前！ 何してんだよ！！」

『黒川く〜ん・・・あたし・・・なんか体が熱くて・・・／＼／＼』

少女Kは顔を赤らめながら言うが目は全く焦点があっていない。まさか、悠夜はそう思った。

「鈴音！ シャル！ ラウラ！ セシリア！ 箒！ 今すぐ俺らから離れ・・・！！！」

少女Kを気絶させ一刻も早くこのクツキーの副作用を伝えようと箒たちの方を見てみると悠夜は全てを悟った。遅かった、今まで経験した中で最悪のパターンだ、と。なぜなら悠夜の目に飛び込んできたのは少女Kと同じように焦点の合っていない目でこちらを見据え顔を赤らめながらゆっくりとこちらによって来る五人だったからだ。一夏もそんな彼女たちを普通の状態じゃないと感じたのか後ずさりながら悠夜の横に並ぶ。

「悠夜・・・これって・・・」

「走れ！！！！！」

その瞬間、一斉に襲い掛かってくる彼女たち。一夏と悠夜は箒たち以外の生徒も襲ってくるなか全速力で食堂から出て行った。そして冒頭に戻る。悠夜たちは襲い掛かる少女たちを気絶させ、比較的安全だと思っただやっとな最近できた男子更衣室に入り鍵を閉めた。

「なんなんだよあいつらは！？ 一体箒たちはどうしたんだ！？」

「おそろくヒナのポイズンキングの副作用だろう。名前を付けるなら『インディスクリナト・バッション無差別欲情』」

「無差別欲情!?!」

そんな副作用もあるのか! 一夏は自分たちが厄介な状況に置かれていることに気がき目を見開く。悠夜は更衣室の外を警戒しながらうなずいた。

「ああ、たぶん今のあいつらには男も女も関係ねえ。まあ、異性は優先だろうけどよ。あと数分もしないうちに俺たちは非常に毒な光景を見ることになるだろうな」

「……ああ……だろうな……」

非常に目に毒な光景。その光景を少し想像したのか一夏は顔を赤くする。しかし今はそんなことをしている暇はない。自分の貞操の危機なのだから。

「取り敢えずなるべく襲い掛かってくるやつらは気絶させて一刻も早くこの騒動の原因であるヒナを見つけるぞ!」

「おう!」

次の瞬間だった。突然何かが割れる音が聞こえたと思ったら更衣室の窓からラウラがとび蹴りて入ってきた。やはりラウラも無差別欲情の状態に入ってしまった顔を赤らめながら焦点の合わない目で悠夜を見つめていた。その間にもラウラが割ってきた窓から次々と同じように無差別欲情の状態の生徒たちが入ってくる。

「悠夜……私を……抱いてくれえ!!!!!!/ / / /」

『黒川（織斑）くーーーーーん!!!!!!/ / / /』

飛びかかってくるラウラ達。悠夜は他の生徒を気絶させながらラウラの攻撃を受け流す。一夏の方も躊躇しながらもなんとか少女たちを気絶させている。

「クソツ、ラウラがいるのを忘れてた!!」

「一夏！ 一旦こっから出るぞ！」

悠夜がそう言うが早い更衣室のドアを開けそばにいた少女たちを意識を刈り取りながら更衣室を出て行きラウラ達が更衣室をでるギリギリのタイミングで扉を閉める。しかしあちらからしか鍵はかけられないので完全に閉じ込めたわけではない。でも多少の時間かせぎにはなるだろう。悠夜たちは一刻も早く離鞠を見つけて出すためすぐにその場を走って離れて行った。

「これからどうする？ 一夏」

「どうするって、ヒナを見つけれんじやなかったのかよ」

あれから数時間。悠夜たちは無差別欲情の状態の生徒に襲われた女子が数分すると襲った女子と同じ無差別欲情の状態になっていたことから、百合の花が咲き誇る光景を拝めさせてもらったと同時に『

無差別欲情は伝染する』という新たな情報を手にし、なんとか生徒たちに会うこともなくどこかの教室で休憩していた。悠夜が教室の時計を見ると、すでに夕方の時間であった。

「それは最終目的だ。おそらく、いや確実にあいつはこの状況を楽しんでる。そう簡単に見つかるはずがない。だからまずこれから俺たちはどうするべきかを考えるんだ」

一夏は悠夜の言葉に納得するとあごに手を当て考え始める。

「んーっと、まず安全なところに・・・って、もうIS学園自体が安全じゃないか。となると、生き残りを探してヒナの搜索範囲を広げるか・・・」

「お、一夏にしては良い案じゃねーか。じゃ、それでいくか」

「俺にしてはってなんだよ。ったく・・・よし、じゃあ行くか！  
！！」

「オウ！！！」

考えてみればこれは初めての行動であった。逃げるために戦うのではなく、自分たちが進むために戦ったのだ。しかし、悠夜たちは見過ごしていた。この学園にはあの人<sup>あの人</sup>がいたことに・・・。

『つたく・・・なんなんだこの騒ぎは・・・』

???先生—————!!////

ガス!!

『チツ、これじゃあキリがないな・・・何!?!?』

???先生—————愛してる—————!!////x10  
00

『やめる!! 気持ち悪いこと言うな!! ン!!?//// ンんん!!//// つぶは!!////』

「ふっふっふ・・・これであの人も堕ちたな さうて、次は誰にしようかいな」

『・・・体が・・・熱い////』



第二十一話 学園黙示録？ ああ、たぶんこれがそうなんだろうな……（後

まだ続くんですよこれが……。っていうか学園黙示録の二期って出るんですかね？ 自分としてはものすごくはまった作品なので出るのであれば早く放送してほしいです。

第二十二話 学園黙示録？ ああ、たぶんこれがそうなんだろうな……2

今回はすこし短いつえに文章がめっさおかしいです。どうか我慢してください。



しとかに隠れる。ずっとここにいてまた囲まれたら嫌だろ？ 分か  
ったら早く行く」

「は、はい……」

そう言って少女は立ち上がりその場を離れて行く。

「よし、じゃあ俺たちは職員室に行って千冬さんと合流するぞ」

「ああ、千冬姉えならこの状況でもなんとかやってるだろうしな」

そして悠夜たちも千冬がいるであろう職員室に向かってその場を離  
れてった。

「ウラッ！」

「じゅめん……！」

ドサドサッ

『キヤー！ 黒川君！ もっと叩いてー！／／／』

『織斑君が、私を殴ってくれる……／／／』

「おい！ こいつらなんかM化してないか！？」

「ああ、しかも何故か職員室に近づくに連れてこいつらが多くなってる気がする……」

そう言いながら『ああーん／＼』と通常時に言ったら赤面するであろう言葉を言って襲い掛かる生徒を悠夜が気絶させる。しかし悠夜の言った通り職員室に近づくにつれて顔がリングのように真っ赤な生徒たちが多くなっている。そのせいで悠夜たちは全く職員室に近づけない。

「悠夜！ こいつらISで何とかならないか！？」

「馬鹿言つな！！ こいつら生身なんだぞ！？」

「じゃあどうすればいいんだよ！！」

そう言っているうちにどんどん増えていく生徒たち。その時、突然職員室の方から生徒が飛んできた。しかし飛んできた生徒はほぼ全員気絶している。悠夜たちが生徒が飛ばされた方向を見ると、そこには悠夜たちが探していた人物がいた。

「千冬さん（姉え）！！」

千冬はその場をジャンプし、三国無双の必殺技も真つ青の攻撃をし、千冬の周りにいた生徒を一気に吹き飛ばす。そして気付いたら発情した生徒がうごめく場所が、たった三人しか立っている者がいなくなっていた。

「千冬姉え！」

「やっぱり千冬さんはスゲーや」

そう言いながら千冬に会えたことを喜び近付く二人。しかし悠夜たちは気付いた。千冬の顔が他の生徒までとはいかないが赤くなっていたのだ。それを見た二人は千冬に向かっていた足を止め、徐々に後ずさりし始める。

「ち、千冬姉え……まさか……」

「お……りむら……黒川……逃げ……ろ……私……では、抑えきれない……クツ！」

そして頭を伏せ沈黙する千冬。悠夜たちは千冬が頭を上げた瞬間、一気に走りだした。終わった。千冬が感染したのだ。二人は1mmでも遠く千冬から離れようと全速力で走るが、やはり千冬には勝てない。すぐに追い抜かれ逃げ道をふさがれてしまった。

「ふふふ……ゆ〜う〜やく？ い〜ち〜かく？ / / / /」

「ち、千冬さん？ キャラが180度通り越してぶっ壊れてんですけど……」

「ゆ、悠夜……こっちもやばい……」

気付いたらどんどんと悠夜たちの周りを取り囲んでいく生徒たち。おそらく千冬の騒ぎを聞きつけたのだろう。その中には筭、シャル、鈴音、そして雛鞠がいた。

「ヒナ！！！」

「又ツハツハツハツハ！！ 福音事件から早一ヶ月。まったく面白くないから久しぶりにウチの料理をふるまったらこのありさま。めっちゃおもしろいやないかい！！」

「「テメー！！」」

「さあ！！ 一斉にやーっしておしまーい！！！！」

『『『黒川（織斑）く—————ん！！！！！！』』』

雛鞠の声とともに一斉に襲い掛かってくるその場の生徒たち。もちろん千冬も入っている。そんな攻撃を悠夜と一夏が防げるわけもないもので……

「「ギャ—————！！！！！！！！」」

学園に二人の絶叫がこだました。

「……で、なにか弁解は？」

「ふあ・ふあみまへふ（あ・ありません）」

絶叫がこだました数時間後、悠夜と一夏、その他女子全員はポッコボコになり正座している雛鞠の前に仁王立ちしていた。

雛鞠の声とともに生徒たちが悠夜と一夏に飛びかかり、今にも悠夜たちの貞操が奪われようとしたその時、ギリギリのところでは雛鞠のポイズンクッキングの効果で千冬たちが正気に戻り、なんとか悠夜たちは助かったのだ。そして今は鈴原雛鞠の公開処刑中。

「まったく、お前の料理は毎回面倒なことになるんだからやめろつたろ」

「だって、福音事件から全く出来事があらへんかったから、この小説がおもろくなるようにウチがもつと……」

「メタな発言をするな！！ お前にせいで……私は……悠夜にあらんなことを……」

そう言いながら頬に手を当て顔を真っ赤にさせる篤、なんとか悠夜たちを襲わずにすんだものの、気がついた時目の前にあったのは制服がはだけ、ベルトも外れ、そして顔を少し赤くさせた涙目の、なんと艶めかしい自分の思いの人だったのだから顔を赤くするレベルじゃ済まないだろう。よく見ると他の生徒も顔を赤くして伏せている。



「とにかく、鈴原は罰として一か月水だけで過ごせ」

千冬は他に皆と同様に少し顔が赤いがなんとか大人の体裁を保とうとして、雛鞠に罰を下す。

「ええーーーー！！ そんな殺生な！ ウチ死んでまう！！」

「なら死ね」

「うわーーーーん！！！！」

そして雛鞠は千冬という言葉道理、一か月水だけで過ごした。ちなみにあの事件の後、Mに目覚めた大勢の生徒がいるとかいないとか……。

「あの人……織斑一夏……」

顔を赤くしている生徒の中に、一人だけじっと何かを見つめている少女がいた。少女の視線の先には世界でたった二人しかいないIS操縦者の片方、織斑一夏がうつっていた。

「織斑一夏……許さない……」

冒頭のとぎ悠夜たちに助けられたIS学園最強の妹、更識簪はギリッと歯を鳴らした。

第二十二話 学園黙示録？ ああ、たぶんこれがそうなんだろうな・・・2

最後に更識 簪を入れてみましたがどうでしたか？ もし口調などが違っていましたら報告してください。よろしくお願いします。

第二十三話 幸運は何度も続くと怖い(前書き)

久々の更新!! 今さらになって悠夜視点の方がかきやすいと感じ  
取った自分。どうか許して!

## 第二十三話 幸運は何度も続くと怖い

「アツチ〜。てめーこの太陽。無駄に俺たち照らしてんじゃねーよ」

屋上のだ真ん中。青々と茂る芝生の上に寝転びながら太陽に向かって届かぬ文句を言っているのは俺こと黒川悠夜高校一年生。世界でたった二人の男性IS操縦者のうちの片方である。俺が何故こんなところでこんなことを言っているのかというと、何時もなら現在進行形で授業なのだが、今は夏休みの真っ最中。授業をさぼった時間はほぼ確実に千冬姉えに鉄拳制裁をくらっているので思う存分に寝られないのだが、この『夏休み』という学生だけに許された長期休暇は俺に十分な睡眠を送るだろう。そして今回も屋上で昼寝兼日向ぼっこにきている。しかし、ここ最近猛暑日が続き俺の睡眠に支障をきたしているのだ。そして、また俺が「アツチ〜」と言っていると俺の頭に二本の棒が現れた。

「あつっーい。よくこんなところで寝ていられるわね。アンタ」

「なんだ。鈴音か」

頭に現れた二本の棒は鈴音の足だった。ヨッコイシヨと言って俺は起き上がると額に染み出ている汗を袖で拭きながら鈴音の方を見た。

「で、何の用だ？」

「何の用だじゃないわよ。アンタこんなところにいたの？ 探したんだから」

「うるせーなー。いいじゃねーか俺の勝手なんだから」

「う、そう言われると言い返しようがないじゃない」

何か言いたげな鈴音を俺は無視し、屋上の出口まで行くと鈴音に向かつて『こつちへ来い』のジェスチャーをする。

「ここで立ち話しても暑いだけだろ。俺の部屋に来るか？」

俺がそう言つと初めから暑さで赤かった鈴音の顔がさらに赤くなつた。

「ふえ！？／＼／＼ えと・・・あの・・・悠夜が来て欲しいんなら来てあげるわよ！！」

なんつー上から目線・・・ まあ、了解してくれたからいいか。

「そうか。じゃあ行くぞ」

「う・・・うん・・・／＼／」

そう言つて俺たちは夏休みでほとんどの生徒が帰省してスツカラカんな廊下を通り俺の部屋に向かった。

「麦茶でいいか？」

「う、うん・・・／＼／」

部屋に着いた俺は適当なところに鈴音を座らせ、冷蔵庫の中をあさくりはじめた。座らされた鈴音はあたりをきよるきよるしている。ここが街中だと完全に不審者扱いだな・・・。

「何キヨロキヨロしてんだ？」

「な、なんでもないわよ！？／＼／」

真つ赤な顔で手を振る鈴音。取り敢えず俺はスルーすることにし、麦茶をテーブルに置く。

「で、俺に何の用なんだよ？」

俺が麦茶を置いた瞬間、鈴音は置かれた麦茶を一気に飲み干し深く深呼吸をする。そんなにのどが渴いてたのか・・・。すると鈴音はポケットを探り、何かを取り出す。

「悠夜、あんた夏休みにどこか出かける予定とかって無いの？」

「ん？ そうだな・・・。これと言って無いわな。少なくとも、夏休み前半に予定はない」

俺が後半は本当だが、大体は適当な答えを言うと鈴音はかわいそうな目で俺を見る。

「ったく、涙が出るくらいに哀れな夏休みね・・・。しょうがないわ、

この私が融通を利かせてあげるわよ」

やっぱり上から目線か・・・まあいい。

「取り敢えず、聞くだけ聞いてやる」

すると何故か鈴音が嬉しそうな顔をして先ほどの何かを俺につきだした。

「ん」

「あ、何だ？」

鈴音が差し出したのは紛れもないチケット。よく見るとそれは最近噂のウォーターワールドというところのチケットだった。

「おい、これってあの・・・」

「そ、今月出来たばかりのウォーターワールド、そのチケットよ。豆知識だけど、前売り券は今月分が完売、当日券は開演二時間前に並ばないと買えないのよ？」

「ほお、そいつは凄い。よくそんな手に入れたな」

感心したように俺は言う。俺に感心され、なんでか得意になった鈴音はこのチケットを手に入れるのがどれだけ大変だったかを滔々と語り始めようとした。

「で、いつ行くんだ？」



が、なんか長くなりそうなので俺は話を遮る。すると鈴音は表情を固めた。

「え。い、行くの？」

なんでそんなこと聞くんだよ……。

「誘いに来たのはお前だろうが。それとも何か、自慢しに来たのか  
こん畜生」

ホントに自慢しに来たのなら俺は怒るね。

「じ、自慢しに来た訳じゃないわよ……」

どもる鈴音。ま、いいか。自慢しに来たわけじゃないらしいから。  
ていうか俺、『ま、いいか』が口癖になんてきてるような……。

「どうせ金取んだろ？ いくらだ？」

「二千五百円」

さらっとそんな金額を言うのかお主は……。まあ、お前から聞いた話から考えるに高くもないのか。

「……ほれ」

俺は机の上に置いておいた財布を取り出し、二千五百円を鈴音に渡した。

「毎度」

にここに顔で二千五百円を受け取り、鈴音は俺にチケットを渡す。そんなにチケットが売れたことが嬉しいかコノヤロー。

「聞き忘れてたけど、いつ行くんだったこれ？」

「明日の土曜日」

急だなおい。

「ま、いいか。んじゃ、待ち合わせは十時くらい、場所はゲート前でいいよな？」

「そうね、それで良いわよ」

「んじゃ、明日」

「遅れたら承知しないわよ」

俺のコップに入った麦茶を一気に飲み干し、鈴音は捨て台詞を残しながら後ろ手に扉を閉めた。ホントに嵐みたいなやつだな……。

「さって、やる事が無いな……。もっかい昼寝でもするか」

鈴音が部屋から去って数時間後、俺は明日の準備を整えてやる事が無くなり、もう一回屋上で昼寝をするために俺はドアに近づく。

「黒川、いるか？」

その刹那、扉が勢い良く開いて俺の鼻先をかすめた。

「ど、どうも……織斑センセ……」

俺は冷や汗ダラダラで扉を開けた本人、織斑千冬に挨拶をする。チラッとドアの方を見てみると俺が手をかけようとしていたドアノブは変形し、壁に穴があいている。

「チツ……黒川、話しがある」

「ちょっと待てー！ー！ー！ーい！！ なんださっきの舌打ちは！？ アンタは一体何が目的で俺のドアをこんなにした！！？？」

大声で抗議をする俺。しかし千冬姉えは大人の余裕を持て余したように俺に説明する。

「いや、少しむしゃくしゃしててな、八つ当たりをさせてもらった」

「八つ当たりのレベルが違うだろ！？」

「私の真の八つあたりはこれほどではないぞ」

「アンタは……もうホントにアンタは……」

もはや怒る気力もない。もうなんだか面倒になってきた俺は、千冬姉えにここに來た真意を聞くことにした。

「で、何しに來たんですか？」

「ああ、この前の福音・終焉事件、ご苦労だった」

「恐悦至極」

「そこでだ。あの事件で一番の功労者であるお前にこれを渡してやる」

千冬姉えがスーツのポケットから取り出した物、それは……。

「……」

「最近出來たウォーターワールドのチケットだ。驚くことに前売り券は今月分が完売、当日券は会場二時間前」

「ああ、それ以上言わなくていいです。聞いてますから」

本当に、同じ説明を数時間前に。

「そうか。とにかくこれをお前にやる。ではな」

チケットを強引に俺の手に押しつけ、何かを言う間も与えずに千冬姉えは部屋を出ていった。後に残されるのは困ったように頭を掻いている俺と、手に握られたチケットのみ。どーすんのよ、これ……。



「ひゃう！？／＼／＼」

腰を打ちつけてしまい、文句を言おうとして振り返った僕が見たのは、ほんの数秒前に会いたいと思っていた男の子の顔だった。しかもどアップ。僕はさつきとは別の意味でまた変な悲鳴を上げてしまふ。うう、恥ずかしい／＼／＼

「ほ、ホントに大丈夫か？」

「う、うん・・・大丈夫・・・」

僕は差し出された手を取って立ちあがると、改めて思いの人、悠夜を見た。

「ひどいよー、ノックもしないで入るなんて。これでも僕女の子なんだよ？」

「いや、ノックはしたぞ？　でも返事がなかったから勝手に入らせせてもらった」

え！？　そんなに僕集中してたの？

「そうなんだ。ごめんね、織斑先生から頼まれてた仕事に集中してたさ」

「その仕事は終わったのか？」

悠夜は僕の後ろにある資料の山を覗き込みながら言う。

「うん、取り敢えず必ずやっておいってくれて頼まれてた分は終わ  
ったよ」

「そうか、じゃあ後はここにやるやつだな」

「え？」

悠夜はそう言っていると僕の椅子に座りこみ、まだやっていない資料に目  
を通して始めた。

「ど、どうしたの？」

「いやな、俺も千冬姉えに頼まれてな。お前一人だけじゃ多分必ず  
やれって言ったとこまでしか出来ないだろうって。ドンピシャで当  
たってたな」

「ははははは……」

そ、そこまで分かっててこんな量を出したのかあの教師は……。

「ほれ、何やってんだ。お前も手伝え。それとも何か？ お前はこ  
の事務的仕事が苦手な黒川さんにこれほどの量をやれといっているのでせ  
うか？」

「え？ あ、うん。分かった」

そう言っ僕も悠夜の隣に別の椅子に座って作業を始める。あつ、  
これってもしかして初の共同作業！？／＼／＼（若干違います）

「ほれ、これで終わり」

「はい・・・っと。んゝ、ついに終わったー！」

最後の資料を受け取り印鑑を押す。そしてついに僕たちは頼まれていた全ての仕事を終わらせた。気がつくともう七時を過ぎていた。えーと、悠夜が手伝い始めたのが三時ごろだから、四時間もしてたんだ・・・。

「お疲れさん、シャル」

「ありがとう。おかげで助かったよ」

「いや、半分はシャルがやってただろ？ 残りの半分くらいもシャルが手伝ってくれたし・・・」

「それでもだよ。悠夜が手伝ってくれて助かった。ありがとう」

「そ、そうか？」

照れくさそうに頭を掻く悠夜。悠夜ってこういうところが可愛いんだよなあ。

「じゃ、これで俺はおいとまさせてもらおうわ」



そう言つて悠夜は後ろを向く。あ、ちよつとさびしいな。

「あ、そうだ」

しかし悠夜は何かを思い出したように振り返り、

「ここ、行かないか？」

「ふえ？」

翌日の十時。

「「で、これはどついついこのことか説明してくれるわよね（よね）」「？」」  
「.....」  
「.....はい」

ウオーターワールドゲート前。そこには気合の入った格好で仁王立ちする鈴音とシャル、そして土下座している悠夜の姿があったとか  
なかったとか.....。

第二十三話 幸運は何度も続くと怖い（後書き）

悠夜視点、どうでしたか？ 何か違和感があれば言ってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6633r/>

---

IS インフィニット・ストラトス 漆黒のIS

2011年6月9日00時19分発行